

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第6集

AWA BUCHI YASHIKIMAE NISHIKATAGAUE  
淡淵・屋敷前・西片ヶ上

MAGARIO MAGARIO  
曲尾III・曲尾I

長野県佐久市香坂淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾III・曲尾I 遺跡  
発掘調査報告書

1987

佐久市教育委員会  
佐久埋蔵文化財調査センター

# 例 言

- 1 本書は、長野県佐久市県道香坂中込線及び市道八風山線改良事業（高速道路関連道路）に伴う、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査委託者 淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾Ⅲ遺跡 佐久建設事務所  
曲尾Ⅰ遺跡 佐久市土木課
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 4 発掘調査所在地  
淡 淵遺跡 佐久市大字香坂字材木1503  
屋 敷 前遺跡 佐久市大字香坂字屋敷前1194—1、1195、1196、1217、1218、1219、  
1220、1221、1222、1251、1252、1253、1254—2、1255  
西片ヶ上遺跡 佐久市大字香坂字小屋場885、899、906—1、907、908  
曲 尾Ⅲ遺跡 佐久市大字香坂字下中原648、649—2、650、651—1～6、  
659、660—1、661、662—1～3、664  
曲 尾Ⅰ遺跡 佐久市大字香坂字曲尾297—2、298—1・2、字下中原649—1
- 5 調査期間及び面積  
淡 淵遺跡 昭和61年10月17日～10月21日・11月25日～昭和62年 3 月20日 1,000㎡  
屋 敷 前遺跡 昭和61年10月17日～10月31日・11月25日～昭和62年 3 月20日 4.800㎡  
西片ヶ上遺跡 昭和61年11月 4日～11月18日・11月19日～昭和62年 3 月20日 2.000㎡  
曲 尾Ⅲ遺跡 昭和61年 8月26日～9 月19日・11月19日～昭和62年 3 月20日 3.300㎡  
曲 尾Ⅰ遺跡 昭和61年 9 月25日～10月 6日・11月19日～昭和62年 3 月20日 1.500㎡
- 6 調査団の構成  
事務局 佐久埋蔵文化財調査センター  
所 長 西沢 正巳  
庶務係主任 畠山 俊彦  
庶 務 係 高橋 純子  
調査団  
団 長 黒岩 忠男（佐久考古学会副会長）  
調査指導者 林 幸彦（佐久市教育委員会）  
羽毛田卓也（ 同 上 ）  
調査担当者 高村 博文（佐久埋蔵文化財調査センター調査係主任）  
調査 主任 羽毛田伸博（佐久考古学会員）



調査補助員	神部 妙子、篠原 浩江、(佐久考古学会員) 橋詰 信子。
発掘協力者	黒沢太万喜、小林幸子、中島直江、中島初江、中島典代、中島文子、 中條繁子、細萱ミスズ、油井幸子 (五十音順)。
整理協力者	平林美津江、宮川百合子 (五十音順)。
縄文土器鑑定	平林 彰、三上 徹也、百瀬 新治、綿田 弘実 (長野 県埋蔵文化財センター)
地形・地質・石質指導	白倉 盛男 (佐久考古学副会長)
歴史的環境指導	木内 寛 (佐久市志編纂常任委員)
遺物 写真	畠山 俊彦

- 7 本遺跡の基本層序及び遺構覆土等の土層観察における色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の新版標準土色帖にもとづいて行った。
- 8 本書の編集は、高村博文、羽毛田伸博が行い、執筆は第II章第1節香坂東地の地形と地質を白倉盛男が、第2節歴史的環境を黒岩忠男・木内寛が担当し、他の章については高村博文・羽毛田伸博がそれぞれ分担し、文末に記して文責を明らかにした。
- 9 本書及び淡淵・屋敷前・西片ケ上・曲尾III・曲尾I遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、香坂地区区長中島美代太氏をはじめ、中島良造氏、佐藤勝氏等地元の方々には、発掘調査中数々のご協力及びご援助をいただき、また、報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

長野県埋蔵文化財センター、臼田武正、唐木孝雄、島田恵子、堤 隆、花岡 弘、樋口昇一、  
福島 邦男、丸山徹一郎、由井茂也 (敬称略五十音順)

# 目 次

## 例 言

### 第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機…………… 1

第 2 節 調査日誌…………… 2

### 第 II 章 遺跡の環境

第 1 節 佐久市香坂付近の自然環境（地形と地質）…………… 3

第 2 節 遺跡の歴史的環境…………… 7

1) 考古学的環境…………… 7

2) 香坂新田村の歴史…………… 10

### 第 III 章 基本層序及び概要

第 1 節 基本層序…………… 13

1) 屋敷前遺跡…………… 13      2) 西片ヶ上遺跡…………… 14

3) 曲尾 III 遺跡…………… 15      4) 曲尾 I 遺跡…………… 16

第 2 節 検出遺構・遺物の概要…………… 31

### 第 IV 章 淡淵遺跡…………… 32

### 第 V 章 屋敷前遺跡

第 1 節 土 坑…………… 34

### 第 VI 章 西片ヶ上遺跡

第 1 節 敷石住居址…………… 37

1) 第 1 号敷石住居址…………… 37

第 2 節 土 坑…………… 44

第 3 節 溝状遺構…………… 47

第 4 節 耕作土出土遺物…………… 49

### 第 VII 章 曲尾 III 遺跡

第 1 節 竪穴住居址…………… 51

1) 第 1 号住居址…………… 51

第 2 節 土 坑…………… 58

第 3 節 礫 群…………… 63

### 第 VIII 章 曲尾 I 遺跡

第1節 竪穴状遺構	64
1) 第1号竪穴状遺構	64
第2節 土 坑	64
第3節 曲尾Ⅰ・Ⅲ遺跡耕作土及び表採遺物	68
第4節 周辺遺跡既出資料	71
第IX章 調査のまとめ	77

引用参考文献

後 記

## 挿 図 目 次

第1図 淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾Ⅲ・ 曲尾Ⅰ遺跡の位置	1	第24図 第1号敷石住居址炉址実測図	39
第2図 東地部落にある古い石造文化財	3	第25図 第1号敷石住居址出土石器実測図〈その1〉	41
第3図 關伽流山尾根の溶結凝灰岩柱状節理	4	第26図 第1号敷石住居址出土石器実測及び 拓影図〈その2〉	42
第4図 香坂付近地質略図	5	第27図 第1号敷石住居址出土石器実測図	44
第5図 屋敷前遺跡崖推堆積地層	7	第28図 第1・7号土坑実測図	45
第6図 周辺遺跡分布図	8	第29図 第2～6号土坑実測図	46
第7図 天保頃の香坂新田村	11	第30図 第7号土坑出土石器拓影図	47
第8図 屋敷前遺跡基本層序模式図	13	第31図 第1・2号溝状遺構実測図	48
第9図 西片ヶ上遺跡基本層序模式図	15	第32図 第2号溝状遺構出土石器拓影図	49
第10図 曲尾Ⅲ遺跡基本層序模式図	16	第33図 第2号溝状遺構出土石器実測図	49
第11図 曲尾Ⅰ遺跡基本層序模式図	17	第34図 第1地区耕作土出土石器拓影図	50
第12図 淡淵・屋敷前・西片ヶ上遺跡 発掘区設定図及び地形図	19	第35図 耕作土出土石器実測図	50
第13図 曲尾Ⅰ・Ⅲ遺跡発掘区設定図及び地形図	21	<b>曲 尾 Ⅲ 遺 跡</b>	
第14図 淡淵遺跡トレンチ設定図	22	第36図 第1号住居址実測図	52
第15図 屋敷前遺跡遺構全体図	23	第37図 第1号住居址カマド実測図	53
第16図 西片ヶ上遺跡遺構全体図	25	第38図 第1号住居址出土石器実測図	56
第17図 曲尾Ⅲ遺跡遺構全体図	27	第39図 第1～3号土坑実測図	59
第18図 曲尾Ⅰ遺跡遺構全体図	29	第40図 第4～9号土坑実測図	60
<b>淡 淵 遺 跡</b>		第41図 礫群実測図	61
第19図 淡淵遺跡基本層序模式図	33	<b>曲 尾 Ⅰ 遺 跡</b>	
<b>屋 敷 前 遺 跡</b>		第42図 第1号竪穴状遺構実測図	64
第20図 第1～4号土坑実測図	34	第43図 第1～4号土坑実測図	65
第21図 第5号土坑実測図	35	第44図 第5～8号土坑実測図	66
第22図 第6号土坑実測図	35	第45図 第1号土坑出土石器実測図	67
<b>西 片 ヶ 上 遺 跡</b>		第46図 曲尾Ⅰ・Ⅲ遺跡耕作土 及び表採石器実測図	69
第23図 第1号敷石住居址実測図	38	第47図 曲尾Ⅰ遺跡耕作土及び表採石器拓影図	70

第48図 周辺遺跡既出土器拓影図〈その1〉	72	第50図 周辺遺跡既出土器実測図	75
第49図 周辺遺跡既出土器拓影図〈その2〉	73		

## 付 表 目 次

第1表 香坂ダム概要	5	第6表 曲尾Ⅲ遺跡第1号住居址出土土器観察表	57
第2表 第三紀層化石	6	第7表 曲尾Ⅰ・Ⅲ遺跡耕作土及び 表採土器観察表	68
第3表 周辺遺跡一覧表	9	第8表 曲尾Ⅰ遺跡耕作土及び表採 土器拓影図観察表	70
第4表 西片ヶ上遺跡第1号敷石住居址 出土土器観察表	43	第9表 周辺遺跡既出土器拓影図観察表	73
第5表 西片ヶ上遺跡第1号敷石住居址 出土土器観察表	43	第10表 周辺遺跡既出土器観察表	74

## 写 真 図 版 目 次

図版 一	淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ 遺跡付近航空写真	3	第1号敷石住居址接合部
	<b>淡 淵 遺 跡</b>	4・5	第1号敷石住居址掘り方
図版 二	1 淡淵遺跡遠景	図版 十	1 第1号土坑
	2 淡淵遺跡トレンチ内状況	2	第2号土坑
	<b>屋 敷 前 遺 跡</b>	3	第3号土坑
図版 三	1 屋敷前遺跡遠景	4	第4号土坑
	2 A・B地区全景	5	第5号土坑
図版 四	1 C・D地区全景	6	第6号土坑
	2 F・G・H地区全景	7	第7号土坑
図版 五	1 第1号土坑	8	第1・2号溝状遺構
	2 第2号土坑	図版 十一	1～3 第1号敷石住居址出土土器
	3 第3号土坑	図版 十二	1・2 第1号敷石住居址出土土器
	4 第4号土坑	3	第2号溝状遺構出土土器
	5 第5号土坑	4	耕作土出土土器
	6 第6号土坑		<b>曲 尾 Ⅲ 遺 跡</b>
	7・8 発掘調査スナップ	図版 十三	1 曲尾Ⅲ遺跡遠景
	<b>西 片 ヶ 上 遺 跡</b>	2	第1地区全景
図版 六	1 西片ヶ上遺跡遠景	図版 十四	1 第1地区全景
	2 第1地区全景	2	第2地区全景
図版 七	1 第1地区全景	図版 十五	1・2 第1号住居址
	2 第2地区全景	図版 十六	1 第1号住居址炉址
図版 八	1・2 第1号敷石住居址	2	第1号住居址炉址掘り方
図版 九	1 第1号敷石住居址炉址	3	第1号住居址炉址とP1
	2 第1号敷石住居址炉址掘り方	4	第1号住居址P1
		5	第1住居址掘り方

- 図版 十七 1 第1号土坑  
2 第2号土坑  
3 第3号土坑  
4 第4号土坑  
5 第5号土坑  
6 第6号土坑  
7 第7号土坑  
8 第8・9号土坑

- 図版 十八 1・2 礫群  
3 礫群下部  
4・5 発掘調査スナップ

- 図版 十九 1～11 第1号住居址出土土器  
曲尾 I 遺跡

- 図版 二十 1 曲尾 I 遺跡遠景  
2 発掘調査区全景

- 図版二十一 1 発掘調査区全景  
2 第1号土坑

- 図版二十二 1 第1号竪穴状遺構  
2 第1号土坑  
3 第2号土坑  
4 第3号土坑  
5 第4号土坑  
6 第5号土坑  
7 第6号土坑  
8 第7・8号土坑

- 図版二十三 1 第1号土坑出土土器  
2 曲尾 I・III 遺跡耕作土及び表採石器

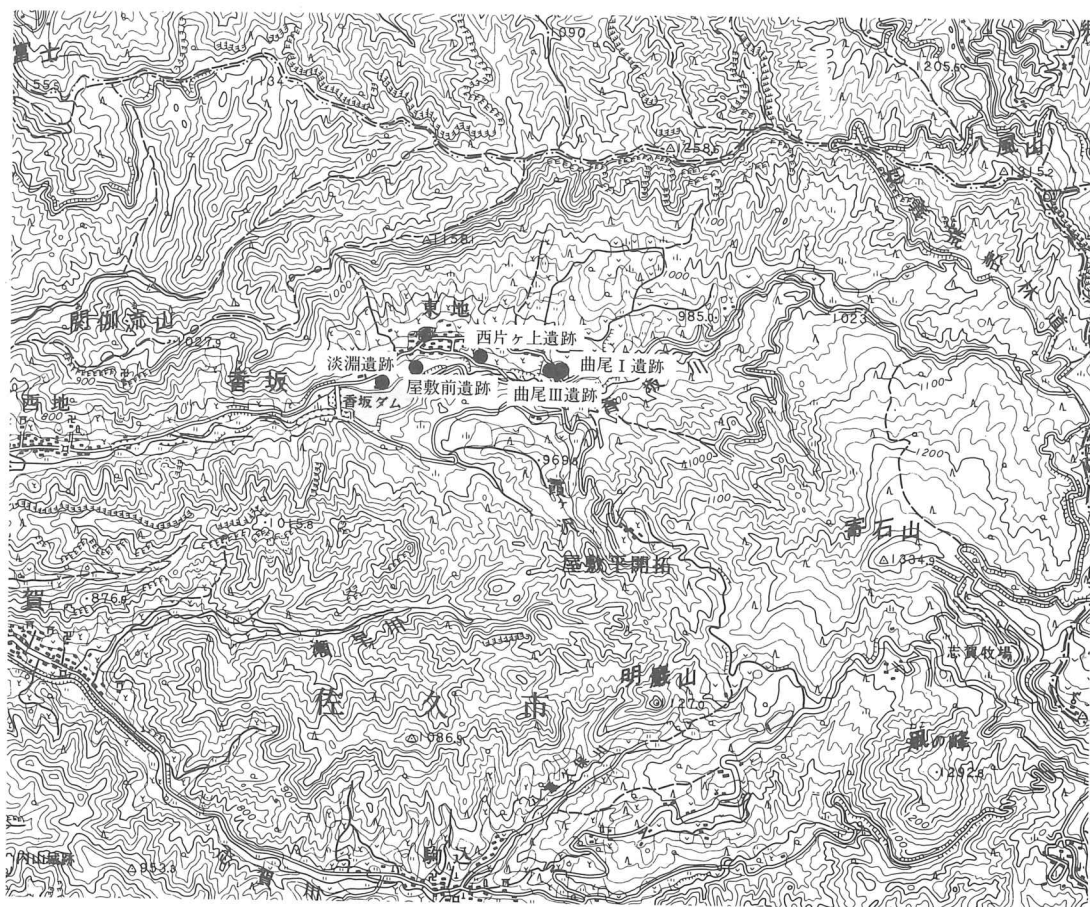
- 図版二十四 1・2 曲尾 I・III 遺跡耕作土及び表採石器  
3～5 周辺遺跡既出石器

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 発掘調査に至る動機

淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾 I・III 遺跡は、香坂川に沿って形成された崖推積地形に位置し、標高は 820 ～ 900 m 内に所在する。

今回、佐久建設事務所・佐久市土木課が行う県道香坂中込線及び市道八風山線改良事業（高速道路関連道路）に伴い、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、緊急に記録保存する必要性が生じた。そこで、淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾 III 遺跡については、佐久建設事務所より、曲尾 I 遺跡については、佐久市土木課より、佐久市教育委員会に委託をされ、佐久市教育委員会から委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第 1 図 淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾 III・曲尾 I 遺跡の位置 (1:50,000 国土地理院地形図による)

## 第2節 調査日誌

### 曲尾 III

8月26日(火)

佐久建設事務所・佐久市土木課・佐久市教育委員会・当センターの4者で現地にて協議を行う。

8月27日(水)

機材の搬入・整備、テント設営を行う。

8月28日(木)

当遺跡での基準標高点の設置を行う。

9月1日(月)～9月6日(土)

調査区の北側より重機による表土削平作業を行う。

9月8日(月)

遺構プラン検出作業を開始する。第1地区において検出された第1号住居址の掘り下げ作業を行う。

9月9日(火)～9月18日(木)

遺構の掘り下げ・実測作業・写真撮影作業を行う。

9月19日(金)

第2地区、礫群の実測作業、全景写真を撮影し、曲尾III遺跡の全発掘作業を終了する。

### 曲尾 I

9月25日(木)～9月30日(火)

重機による表土削平作業を行う。

10月2日(木)

第1地区の遺構検出作業を行う。

10月3日(金)～10月6日(月)

遺構の掘り下げ、実測作業、写真撮影を行

い、曲尾I遺跡の全発掘作業を終了する。

### 淡淵

10月17日(金)

重機により、幅約1m50cmのトレンチを東西に2本入れ、遺構の存在を確認する。崖推堆積のため、溶結凝灰岩の角礫が非常に多く、遺構の存在はないと思われる。

10月20日(月)

基準標高点を設置する。

10月21日(火)

全体層序を実測し、すべての作業を終了する。

### 屋敷前

10月17日(金)～10月24日(金)

重機による表土削平作業を行う。

10月27日(月)～10月28日(火)

遺構検出のための精査作業を行い、土坑と思われる落ち込みを6基検出する。

10月28日(火)～10月30日(木)

土坑の掘り下げ・実測作業・写真撮影作業を行う。

10月31日(金)

遺跡の全景写真を撮影し、屋敷前遺跡の全発掘作業を終了する。

### 西片ヶ上

11月4日(火)～11月6日(木)

重機による表土削平作業を行う。

11月5日（水）

テントの設営と機材の搬入を行う。

11月7日（金）

遺構検出のための精査作業を行う。第1地区より住居址1棟、土坑2基が、第2地区より土坑7基、溝状遺構2基が検出された。

11月8日（土）～11月17日（月）

遺構の掘り下げ作業・実測作業・写真撮影を行う。

11月18日（火）

最後まで残った、第1号住居址の炉の実測作業を行い、全景写真を撮影し、西片ケ上遺跡の全作業を終了する。

11月19日（水）～昭和62年3月20日（金）

室内において、報告書作成作業を行い、全遺跡のすべての調査を完了する。

（高村）

## 第II章 遺跡の環境

### 第1節 佐久市香坂付近の自然環境（地形と地質）

佐久市香坂地域は、佐久山地の東北端部にあたる山地で、南は関東山地の連続する佐久山塊の物見山（1,375.4 m）荒船山（1,356 m）に続き、東北部は森泉山（1,135.9 m）八風山（1,315.2 m）を経て浅間火山（2,560 m）碓氷連山・妙義山（1,104 m）に対しており、上信国境に位置している。

この長野・群馬県界の山地は妙義荒船佐久高原国定公園に指定され風景の変化・奇岩絶壁に



第2図 東地部落にある古い石造文化財



も恵まれ、最近では観光地として注目をあびはじめている。この県界は古くから関西関東の交通の要衝として峠路の開発が進められ、碓氷峠・入山峠・和美峠・矢川峠・香坂峠・内山峠・星尾峠・田口峠・余地峠等々数多く数えられ、東山道・中山道の側街道としての要所ともなったものであるが、当地区内にある矢川峠・香坂峠は地形・距離・勾配が主要道の裏街道・女街道・姫街道としての理由から早くから拓かれ多く利用されていた形跡が道路わきの草に埋れた石碑・道標・峠頂の展望などからうかがうことができる（東地部落東端の路傍に建つ200年前の経塚、その他、馬頭観世音・百万返供養塔がそのことを物語っている）。とくに矢川・香坂峠は難路が少なく爪先上りの明るい峠路で距離も近いこと地形上からも最も古く拓かれた神坂峠<sup>かみさか</sup>・御坂峠<sup>みさか</sup>にあたるもの考察もある。（坂は古語で峠を表現）ちなみに昭和61年高速道として決定をみた関越自動車道上越線の計画はこの峠近くを通る予定で歴史は繰返す事実を物語っている。

この県境尾根は南北に続く分水嶺であり、この分水嶺を源とする川には当地域内では霞川・香坂川・瀬早川・志賀川があり、何れも西流して佐久平に向い佐久市杉ノ木で千曲川に合流している。この香坂峠に発源する香坂川の上流が今回、発掘の淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ遺跡の所在地である。昭和54・55年度佐久市教育委員会によって発掘調査の行われた兵士山遺跡・五斗代B遺跡の縄文・平安時代遺跡地もこの東方800 mの地点である。

この香坂川上流は浸蝕解折の進まない谷底の広いU字谷で前記のように爪先登りの緩い展望のひらけた峠路が香坂東地部落から峠頂まで続いていて河岸段丘もはっきりしたものは未だ発達していない。僅かに谷底部分に崖推堆積物の小平地が一部に認められるだけである。今回の発掘地点は何れもこの崖推面に立地していた。

香坂川北方の尾根は西方から平尾山（1,155.5 m）關伽流山（1,100 m）東地部落真北（1,228 m）八風山（1,315.2 m）矢川峠（1,136 m）と続き、香坂川河床面では香坂ダム（823.9 m）西片ヶ上遺跡（844.6 m）曲尾遺跡



第3図 關伽流山尾根の溶結凝灰岩柱状節離

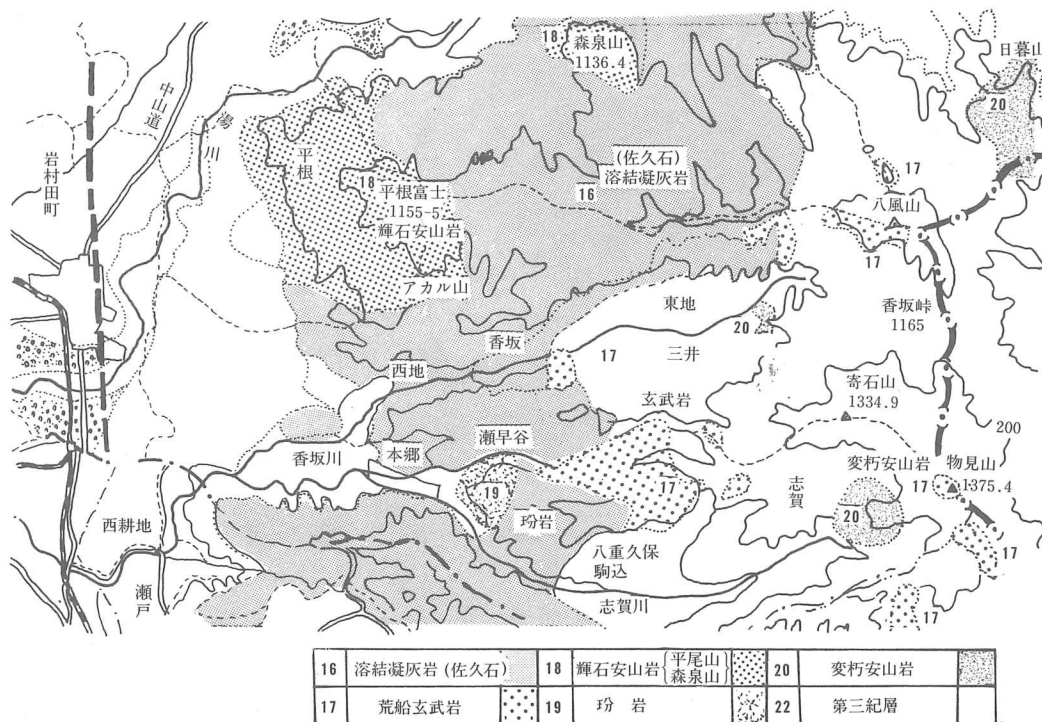
(870 m) で南北比高約 400m を示している。南側瀬早川との境尾根との比高は天狗山 (1,015 m) 屋敷開拓地西部 (984 m) となって北側より低く 200 m 内外である。この受水面積の広い香坂の谷の洪水調節防災と貯水活用の

第1表 香坂ダム概要

名称	香坂ダム (香坂川) 防災ダム
所在地	佐久市大字東地
型式	ロックフィルダム 高さ38.5m 幅8m 長さ184m
築造	昭和44年4月～昭和49年3月
事業主体	長野県 (運営管理 佐久市)
貯水量	平時 105万トン
利用目的	農地防災ダム (将来多目的ダム希望)
受水面積	14km <sup>2</sup>
受益面積	250 ha

ため長野県営農地防災ダムとして昭和49年3月完成したのが香坂ダムである。このダムの概要は第1表のようである。

佐久山地全体の地質構造は多摩秩父地方から続く関連山地の連続で秩父古生層を中心として中世層・新生代第三紀第四紀層の帯状配列鱗覆構造によって構成されているが、当地域はその最西北端部に当り秩父古生層・中生層の分布は途絶して見られない。秩父古生層は佐久町抜井川沿岸と宿岩まで、中生層は佐久市内山川上流沿岸までの分布に限られており、それより以北は新生代第三紀層に不整合に覆われていて露出は見る事が出来ない。その第三紀層分布地帯にも妙義山



第4図 香坂付近地質略図

第2表 第三紀層化石

内 山 層	駒込層・八重久保層	兜 岩 層
maComa sp	Ostrea sp	古代蛙
Turritella sp	Dentatium sp	昆虫の成虫、幼虫
Yoldia sp	Natica sp	植物の葉化石
Venericadia sp	Turritilla sp	
Lucinoma sp	Lucinoma sp	
	Chlamys sp	
	Lima sp	

荒船山その他の旧期火山岩の噴出が各所に見られ、広く分布して新生代地層分布地帯となっている。

佐久市内山・志賀・三井地域の基盤は新生代第三紀に属する内山層・駒込層・八重久保層・兜岩層が広く分布している。内山層と呼ばれている地層は第三紀層の最下部層で余地峠・田口峠・内山川上流沿岸に露出しており、礫岩・砂岩・凝灰質頁岩などによって構成され、その砂岩中には第2表のような海棲貝化石を多産することにより第三紀漸新—中新世の海の堆積層と考えられている。

この内山層の上部に重なる地層が駒込層・八重久保層・兜岩層で駒込・香坂地区主として分布し、その当時は火山活動の旺盛だった証左として火山灰の堆積による凝灰角礫岩・凝灰岩・頁岩・凝灰岩によって構成され、駒込・八重久保付近からは鮮新世を指示する浅海性貝化石の産出で知られている。

第三紀層最上部には兜岩層と命名されている淡水湖成堆積層の凝灰岩・凝灰質砂岩を種とした見事な成層が重なり、この地層からは古代蛙化石・昆虫化石・植物の葉化石を産し、最近多くの研究者の興味を引き珍重されている。

これらの第三紀層分布地域や縁辺部には妙義山・荒船山などの旧期火山の噴出物である集塊岩・凝灰岩・溶結凝灰岩・玄武岩などの大規模の分布が見られるが、噴出が古く長期の浸蝕解折の結果、当初の火山形態は復原出来ない状態であることは、第4図香坂付近地質略図で読みとることができる。關伽流山や内山峡に代表される溶結凝灰岩（佐久石）の柱状節理の奇勝がこの付近に多く見られ石材として広く活用もされている。佐久地方にある古い石造文化財の原材はすべてこれであると言っても過言ではない。荒船火山の最後の噴出による荒船玄武岩が内山・志賀・三井地区の山嶺尾根部の高所に著しい板状節理を発達させて覆っており、露地庭園作りに珍重され、佐久地方では、うずまき石と通称している。

旧期火山に属するものでは風の峯・日暮山の変朽安山岩、平尾山・森泉山の輝石安山岩のトロ

イデ式噴出、瀬早川谷に露出する玢岩があげられる。

香坂東地付近の香坂川沿岸の谷中平坦地は今回の発掘調査の深堀り部分（第5図）の観察によって洪積段丘ではなく、洪積期に解析によって出来た幅広い谷中



第5図 屋敷前遺跡崖堆積地層

平地へ南北両側に連続している山嶺や傾斜部分から崩れ落ち、押し出しによる崖推堆積地形であることが確認された。溶結凝灰岩の大小塊を主とし荒船玄武岩の板状破片、玢岩、輝石安山岩塊が僅かに含まれる不規則な堆積で場所によって層厚の変化も著るしいことから考察される。

（白倉）

## 第2節 遺跡の歴史的環境

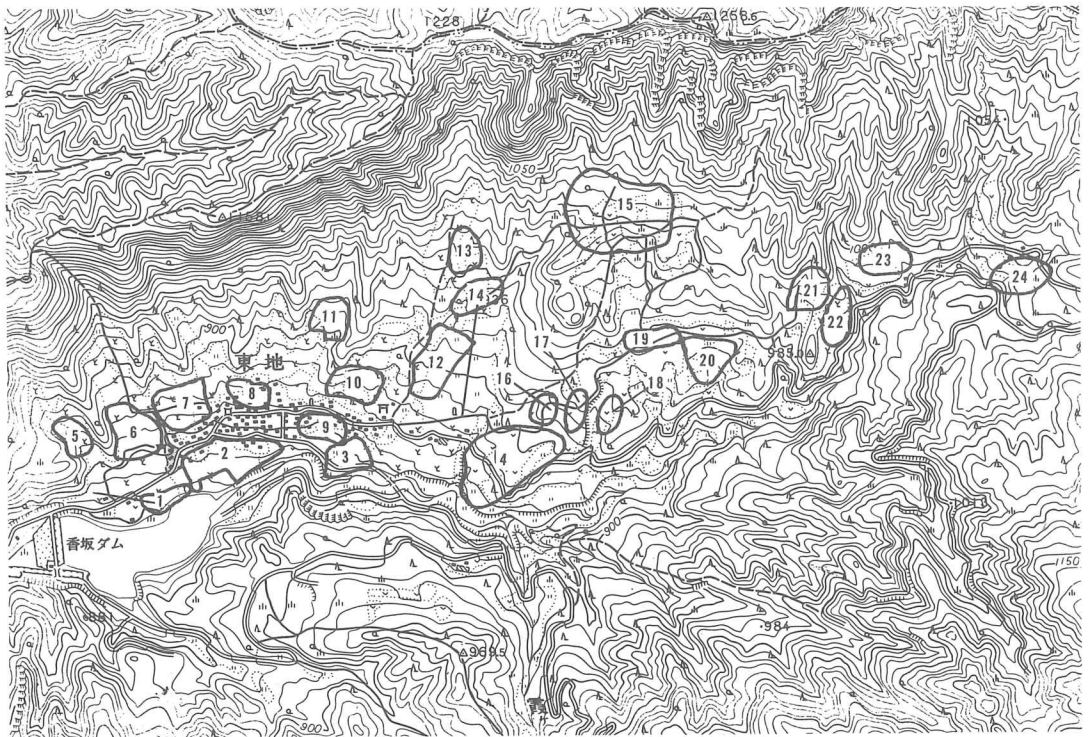
### 1) 考古学的環境

淡淵・屋敷前・西片ケ上・曲尾 I・III遺跡は、佐久市大字香坂東地地籍に位置し、香坂の谷の南面傾斜地に所在する。標高は820～900 mを示す。

香坂の谷は、峡谷であるが佐久市遺跡詳細分布調査によると、香坂東地地籍の南向き斜面は、埋蔵文化財の分布が濃密で、西称ぶた遺跡（5）、東称ぶた遺跡（6）、城の口遺跡（7）、淡淵遺跡（1）、屋敷前遺跡（2）、裏林遺跡（8）、小屋場遺跡（9）、西片ケ上遺跡（3）、東山神遺跡（10）、東林遺跡（11）、鶉尾根遺跡（12）、仙太郎遺跡（14）、鶉尾根北遺跡（13）、五斗代遺跡群（15）、曲尾遺跡（4）、吹付遺跡（16）、木戸平A遺跡（17）、木戸平B遺跡（18）、東木戸平A遺跡（19）、東木戸平B遺跡（20）、五斗代B遺跡（21）、兵士山遺跡（22）、雨原B遺跡（23）、雨原A遺跡（24）、茂内口遺跡群（25）等25を数える多くの遺跡・遺跡群が目白押しに存在し、縄文時代早期から平安時代に至る遺物が表採により採集されているが、発掘調査により確認された遺跡は数少ない現状である。

これらの遺跡を時代別に概観すると、縄文時代の遺跡は、昭和55年度発掘調査による五斗代B遺跡から、礫群が検出され、その礫群内から多量の縄文時代の遺物が出土している。土器は縄文早期楕円押型文土器・細線文指痕薄手土器・縄文前期花積下層期の土器・黒浜期の土器・諸磯A・B・C期の土器。縄文中期勝坂式土器、縄文後期に比定される土器、石器も石鏃21点・石匙9点・石錐2点・スレイパー5点・剥片石器・石片等が出土している。茂内口遺跡は昭和61年度発掘調査により、縄文時代前期の繊維を含む土器及び石器。兵士山遺跡は昭和54年度発掘調査により縄文前期関山式土器・後期の堀ノ内式土器を出土している。また、詳細分布調査に於て、曲尾遺跡は縄文前期関山式土器・中期加曾利E式土器・後期堀ノ内式土器・石鏃・打石斧・磨石・石皿等を。屋敷前遺跡は縄文中期加曾利E式土器と石棒。鶉尾根遺跡は縄文中期加曾利E式・後期堀ノ内式土器、雨原A遺跡は縄文前期繊維を含む土器・中期の加曾利E式土器、雨原A・B遺跡は縄文前期繊維を含む土器と打石斧を、裏林遺跡で縄文前期・中期の土器。仙太郎遺跡・鶉尾根北遺跡・西片ヶ上遺跡・東林遺跡・小屋場遺跡・城の口遺跡・東称ぶた遺跡等も縄文中期の土器が、木戸平A・B遺跡・吹付遺跡は縄文後期堀ノ内式土器等をそれぞれ採集しているなど縄文時代の遺跡の分布が非常に濃密に感じられる。

弥生時代の遺跡は、屋敷前遺跡・曲尾遺跡・木戸平B遺跡・裏林遺跡等より後期の箱清水式土器が少量であるが表採されている。香坂の谷は山間の溪谷である峠道に位置するという点で注意



第6図 周辺遺跡分布図 (1:25,000国土地理院地形図による)

第3表 周辺遺跡一覧表

No	佐分 No	遺跡名	所在地	立地	時代						備考	
					縄	弥	古	奈	平	中		
1	154	淡淵遺跡	香坂字淡淵	段丘	○					○		本調査
2	155	屋敷前遺跡	香坂字屋敷前・材木	〃	○	○				○		本調査
3	157	西片ヶ上遺跡	香坂字西片ヶ上	〃	○							本調査
4	168	曲尾遺跡	香坂字曲尾	台地	○					○		本調査
5	146	西柵ぶた遺跡	香坂字西柵ぶた	〃	○					○		
6	147	東柵ぶた遺跡	香坂字東柵ぶた	〃	○					○		
7	148	城の口遺跡	香坂字城の口	〃	○					○		
8	149	裏林遺跡	香坂字裏林	〃	○					○		
9	156	小屋場遺跡	香坂字小屋場	〃	○					○		
10	151	東山神遺跡	香坂字東山神	〃	○					○		
11	150	東林遺跡	香坂字東林	〃	○					○		
12	152	鶉ヲネ遺跡	香坂字鶉ヲネ	〃	○							
13	153	鶉ヲネ北遺跡	香坂字鶉ヲネ北	山麓	○					○		
14	158	仙太郎遺跡	香坂字仙太郎	〃	○					○		
15	159	五斗代遺跡群	香坂・五斗代・東五斗代 上岩合地	〃	○							
16	167	吹付遺跡	香坂字吹付	台地	○							
17	165	木戸平A遺跡	香坂字木戸平	〃	○					○		
18	166	木戸平B遺跡	香坂字木戸平	〃	○	○						
19	163	東木戸平 A遺跡	香坂字東木戸平	〃	○					○		
20	164	東木戸平 B遺跡	香坂字東木戸平	〃	○					○		
21	160	五斗代B遺跡	香坂字五斗代	山麓	○							昭和55年度発掘調査
22	161	兵士山遺跡	香坂字兵士山	〃	○					○		昭和54年度発掘調査
23	162	雨原B遺跡	香坂字雨原	〃	○					○		
24	169	雨原A遺跡	香坂字雨原	〃	○					○		

すべきではなかろうか。

古墳時代の遺跡は、曲尾遺跡で後期（鬼高期）の土器が表採されているが、他には明確な遺物は確認されていない。

平安時代になると、遺跡の数は比較的多く、曲尾遺跡・屋敷前遺跡・雨原A遺跡・木戸平A遺跡・仙太郎遺跡・鷓尾根北遺跡・小屋場遺跡・城の口遺跡・西称ぶた遺跡等の遺跡で平安時代の土師器・須恵器を採集している。裏林遺跡は土師器と灰釉陶器。東称ぶた遺跡で土師器と内耳土器を採集している。昭和54年度発掘調査の兵士山遺跡は、平安時代竪穴住居址1棟と土師器が出土、前記五斗代B遺跡も須恵器が出土している。茂内口遺跡は昭和61年度発掘調査により、平安時代竪穴住居址3棟・堀立柱建物址3棟・土坑及び特殊遺構等が検出され、須恵器・灰釉陶器・鉄器・石器等が出土している。香坂東地に平安時代の遺跡が比較的多いのは、峠越えによる上野国との古道が推定される。

以上、香坂東地地籍の遺跡を概述したが、縄文時代の遺跡が濃密に存在し、平安時代に再び遺跡が増加する傾向が看取できる。 (黒岩)

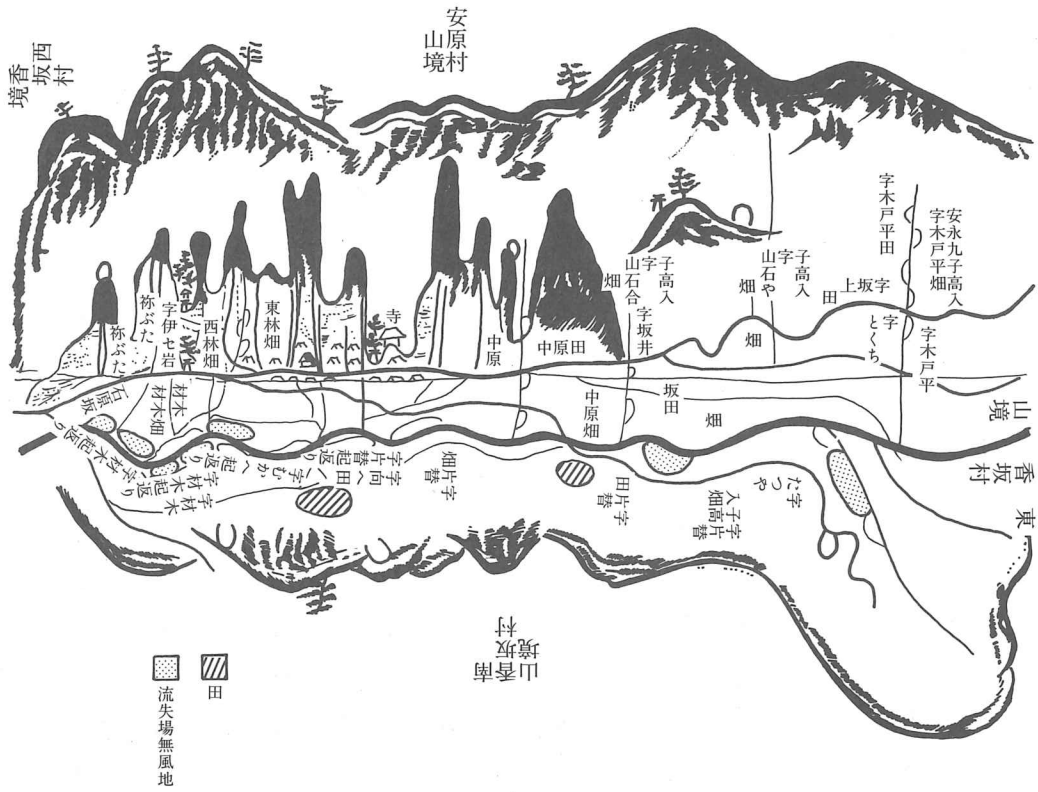
## 2) 香坂新田村の歴史

香坂新田村の記録に現われる歴史は近世に始まる。慶長十七年（1612）子三月、宮平村の折右衛門・利右衛門・長四郎は南相木村中島の神明宮をこの地に勧請している（中島茂利氏文書）ので、慶長年中の一郡逃散という大きな動きの中で、折右衛門等も慶長の始め頃には、この地に入って開拓を初めていたのであろう。元和九年（1623）には正式に開拓の許可状を得て仕事は急速に進んだ。

香坂之内宮平之荒地、罷移、  
ひらき可申之由、尤候、  
如御定子、年6刀<sup>寅</sup>之年迄三年  
ハ可為作取候、  
卯之年6相当御年貢可  
納候、為基如此以上  
亥ノ  
十二月十七日 岩波七郎右衛門  
平岡 忠七  
相木、  
折右エ門  
長四郎  
(長島美代太氏文書)

㊦ ㊦





第7図 天保頃の香坂新田村

寛永六年（1629）には縄請人十人、分付け百姓十二人によって、畑のみ六町九反余の検地を受けて宮平村としての地歩を得た。

その後、宮平村は承応元年（1652）を境として香坂新田村となり、所領は小諸領、一時的に館林領、甲府領と変遷するが、元禄十四年（1701）以降は一貫して幕領である。

開田畑も徐々に進み、承応元年の割付に田方三畝歩があらわれ、正徳四年（1714）には田高十九石六斗三升五合（二町六反五畝歩）、畑高九十六石二斗六升四合（十四町六畝十三歩）、文化年中には田高二十二石三斗余、畑高百四十七石六斗余となるが、いづれにせよ田方優越の山村である。

畑作物は大麥・小麦・蕎麥・大小豆・馬稗・毛稗・粟・餅粟が主で（「穀物取場控帳」中島茂利氏文書）、山間のため猪鹿が多く、慶長年代には「御郡中鉄炮留雖（中略）てっぼうにてしし・さる打候て、作を上可申旨、被<sub>レ</sub>仰出<sub>レ</sub>候」（仙石秀久恵印状）村の一つであり、年貢も山畑ゆえの減免があった。



近世の公道はもちろん中山道であるが、その裏道として岩村田宿から横根・発地を経て入山峠や和美峠に出る道があった。ところが享保の頃から日影新道が脚光を浴びるようになる。岩村田宿から香坂・香坂新田を通り、香坂峠越えて上州市野萱に出る道である。上州本宿や下仁田への近路であり、比較的平坦で馬の通行に便利であった。佐久からの米穀が続々とこの道を市野萱・本宿・下仁田の市場へ運ばれ、戻り馬は麻・塩・茶その他を積んできた。

日影新道の利用が多くなって最も打撃を受けたのは小田井中宿から松井田宿に至る中山道の宿々で、これらの宿々と岩村田宿や日影新道沿いの村々とでしばしば争論が起きたが、道筋の利用は既成事実として、佐久の米や木曾木具の付送りと、上州からの麻荷の積み帰りは公然と認められるようになった。したがって村内にも米の仲買いや馬士としてこの道筋の運輸にたずさわる者も多く、明治十一年（1878）頃になっても内国通運会社の出張所が置かれていた（『北佐久郡誌』資料編）。

香坂新田村は明治八年に香坂村と合併し、村としての歴史を閉じ、香坂村東地区となるが、明治二十年代に開通した信越線に荷物が流れて、日影新道はすっかり寂れ、東地は谷あいの寒村となりさがったように見えた。

地形的に上州と境を接する東地には、最近新しい動きが出てきている。かつて軽井沢宿の助郷として、百姓たちが数里の道を軽井沢宿や杓掛宿に通った道筋には、妙義荒船スーパー林道が開られ、いままた、これとほぼ同じ道筋に関越自動車道が設けられようとしている。

（木内寛）

# 第III章 基本層序及び概要

## 第1節 基本層序

### 1) 屋敷前遺跡

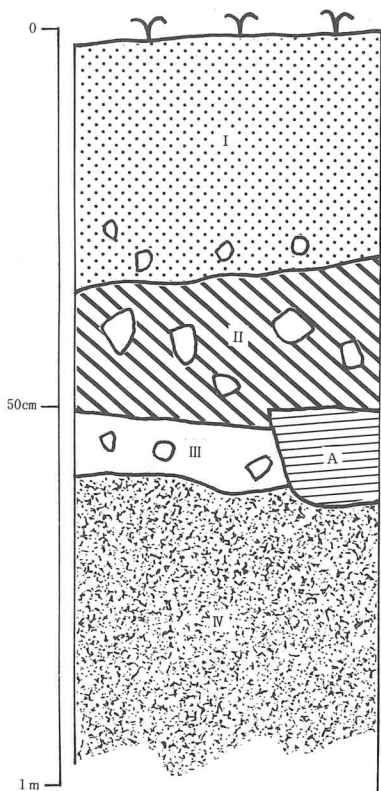
#### 屋敷前遺跡基本土層

第I層 10Y R 2/3 耕作土 黒褐色土層 粒子やや粗く、やや粘性あり。 $\phi 2 \sim 15\text{cm}$ の溶結凝灰岩の小礫・溶結凝灰岩の風化小礫・ローム粒子を含む。

第II層 10Y R 3/2 $\sim$ 3/4 黒褐色土を基調とする。ややしまりがあって、粒子粗く、粘性あり。下面に向かってローム粒子混入増。 $\phi 2 \sim 15\text{cm}$ の溶結凝灰岩の礫を多量に含む。溶結凝灰岩の風化小礫を含む。僅かに玄武岩・玢岩の礫を含む。

第III層 10Y R 3/4 暗褐色土層 黄褐色土を基調に僅かに黒褐色土を含む。粒子粗く、砂粒を含み、ややばさばさしている。 $\phi 0.5 \sim 1\text{cm}$ の軽石・溶結凝灰岩の風化小礫・ $\phi 5 \sim 10\text{cm}$ の溶結凝灰岩の礫を含む。

第IV層 10Y R 4/4 褐色土層 黄褐色土（ローム層）・砂粒・ $\phi 2 \sim 5\text{cm}$ の軽石を含む。 $\phi 2 \sim 15\text{cm}$ の溶結凝灰岩を多量に含む。 $\phi 30 \sim 50\text{cm}$ の大きな溶結凝灰岩をまばらに含む。



第8図 屋敷前遺跡基本層序模式図

## A層 遺構覆土

屋敷前遺跡は、東地部落の南方、香坂川の北岸、香坂ダムに注ぎ込む直前の崖推堆積地形上にあり、河床からの比高差は約10mを測る。本発掘調査区は、幅約10～15m、長さ240 mを測り、標高は832～842 mを示す。遺跡の地形は、典型的な崖推地形で第I層の耕作土を取り除くと、いたる所で溶結凝灰岩が露出した。

発掘調査区の長軸方向に約30m間隔で区を設定したが、そのうち遺構らしき落ち込みを確認できたのは、C・D区のみであった。A・G・H区においては、特に溶結凝灰岩の大きな礫が露出し、C・D区については、比較的安定したローム層が見られた。層位は基本的に、第8図に示したとおりであるが、C・F区には自然地形によるものと思われる、大きな凹地が確認できた。遺構は、すべて土坑で、第III層及びIV層の上面で確認された。

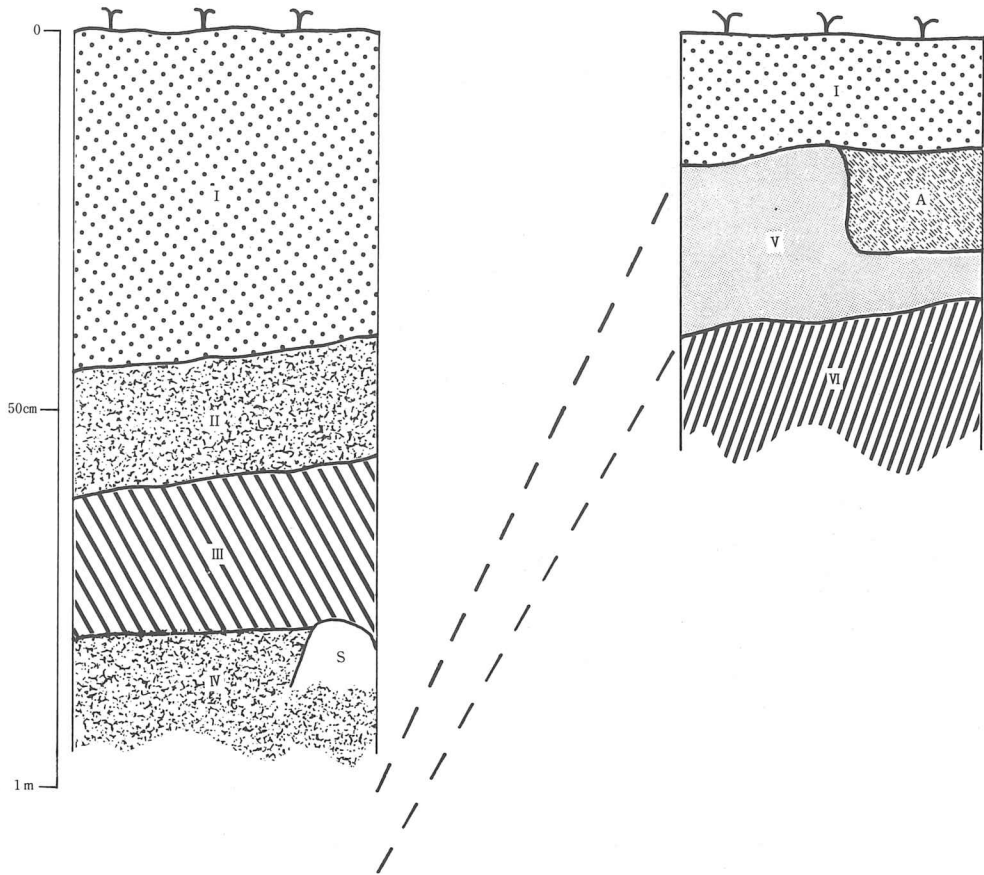
## 2) 西片ケ上遺跡

### 西片ケ上遺跡基本土層

- 第I層 10Y R 3/4 耕作土 暗褐色土層 粒子やや粗く、やや粘性あり。ローム粒子・ $\phi 0.5 \sim 1$  cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 第II層 10Y R 3/3 暗褐色土層 黒褐色土を基調に僅かにローム粒子を含む。溶結凝灰岩の風化礫が形状を留めて含まれている。
- 第III層 10Y R 2/3 黒褐色土層 粒子やや細かく、粘性・しまりあり。僅かに溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 第IV層 10Y R 4/3 にぶい黄褐色土層 第V層に類似しているが、溶結凝灰岩の亜角礫が多く含まれている。
- 第V層 にぶい黄褐色土層 ローム層に至る漸位層。粒子粗く、僅かに黒褐色土・ $\phi 0.5 \sim 1$  cmの軽石を含む。 $\phi 5 \sim 10$ cmの溶結凝灰岩の亜角礫を含む。
- 第VI層 黄褐色ローム層

## A層 遺構覆土

西片ケ上遺跡は、東地部落の中心地東南方にあり、香坂川が蛇行した北岸の崖推堆積地形上に位置し、河床からの比高差は約14～15mを測る。発掘調査区は、幅約10～15m、長さ120 mを測り、標高は842～854 mを示す。発掘調査は、土地地権者の了承が得られない地域が存在し、2地区に分けて調査せざるを得なかった。第1地区から第2地区にかけては、ゆるやかに西傾斜をなしており、基本層序は第1地区の北側断面を観察した。



第9図 西片ヶ上遺跡基本層序模式図

あ〜い—1〜5グリッドは、現在畑であったが、昔、水田が営まれていたものと思われ、約20〜30cm下から床土と思われる水平堆積層が見られ、その下層は、水田を開拓する際、埋土したと思われる黒色土が観察できた。第1号敷石住居址が検出された、その西方は急傾斜で落ち込んでおり、第9図左がその部分の土層断面であり、4層に分割された。東方および第2地区は、3層に分割され、遺構の確認は、第V層のローム層に至る漸位層で確認された。

### 3) 曲尾Ⅲ遺跡

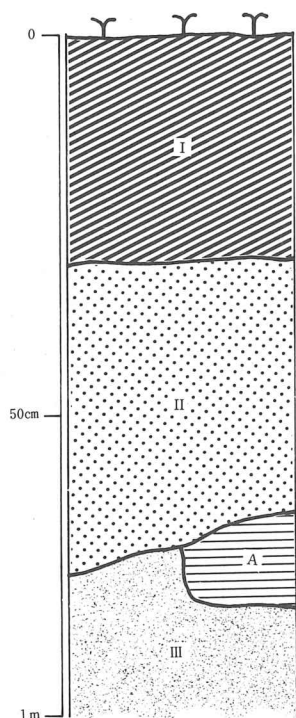
#### 曲尾Ⅲ遺跡基本土層

第Ⅰ層 耕作土

第Ⅱ層 暗褐色土層 粒子細かく、やや粘性あり。溶結凝灰岩の風化小礫を含む。

第Ⅲ層 黄褐色ローム層

A層 遺構覆土



第10図 曲尾Ⅲ遺跡基本層序模式図

曲尾Ⅲ遺跡は、東地部落の東方、香坂川の北岸に位置する。発掘調査地区は、道路と水路により3地区に分断され、東側から第1地区、第2地区、第3地区として調査した。第1地区から第2地区にかけては、かなりの角度をもって西側に傾斜しており、第2地区西端は水路による凹地が形成されていた。

地層は、第1・2地区と第3地区で著しく異なり、第1・2地区では安定したローム層が検出されたが、第3地区においては、多量の溶結凝灰岩が露出し、それぞれの地形形成に差があることがはっきりとした。第2地区には、東北方向から南西方向にかけて押し出された礫群が存在し、自然地形によるものと判断した。

地層は、第1・2地区で3層に分割され、傾斜地で一般的に見られるように、沢地に向かうほど、堆積層が厚くなる特徴が観察できた。

香坂地区の土層の特徴と思われるが、溶結凝灰岩の風化小礫が第Ⅱ層中においても見られた。遺構の確認は、第Ⅲ層黄褐色ローム層上面でなされた。

#### 4) 曲尾Ⅰ遺跡

曲尾Ⅰ遺跡は、急傾斜地を含んでいるため、基本土層を5ヶ所にわたって観察した。

##### 曲尾Ⅰ遺跡基本土層

い11G付近

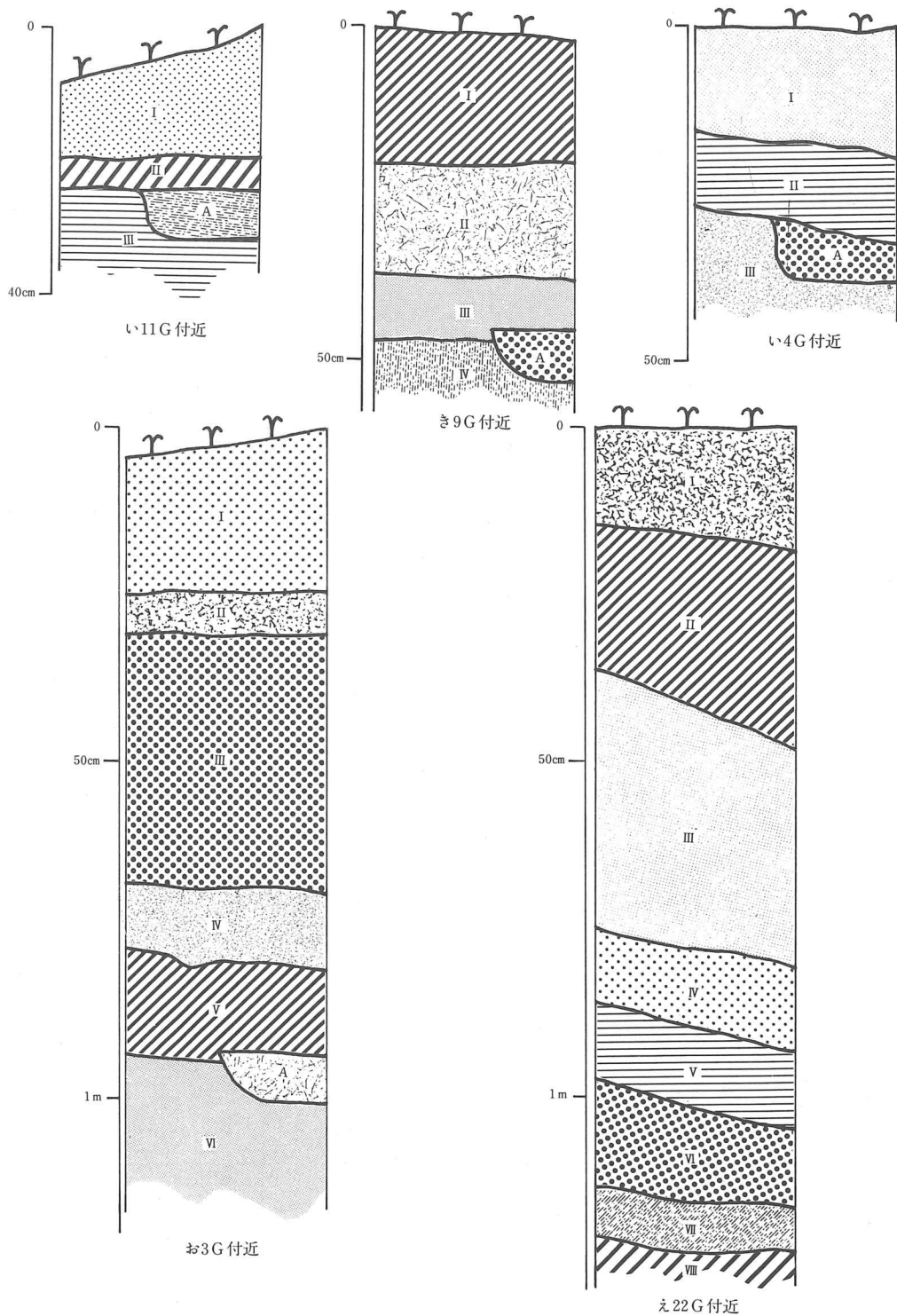
第Ⅰ層 10Y R3/4 暗褐色土層 耕作土 僅かにローム粒子・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。  
 $\phi 0.5 \sim 1$  cmの軽石を含む。

第Ⅱ層 10Y R3/2 黒褐色土層 ローム層に至る漸位層。ややしまり・粘性あり。 $\phi 0.2 \sim 0.5$  cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。僅かにローム粘土を含む。

第Ⅲ層 黄褐色ローム層

A層 遺構覆土

き9G付近



第11図 曲尾 I 遺跡基本層序模式図

- 第I層 10Y R 3/2 黒褐色土層 表土 粒子やや細かく、僅かにローム粒子を含む。
- 第II層 10Y R 3/4 暗褐色土層 やや粘性あり。φ0.2 ～0.5 cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。僅かにローム粒子を含む。
- 第III層 10Y R 4/4 褐色土層 ローム層に至る漸位層。黄褐色土を基調に僅かに黒褐色土を含む。φ0.2 ～0.5 cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を僅かに含む。
- 第IV層 黄褐色ローム層
- A層 遺構覆土

#### い4 G付近

- 第I層 10Y R 4/4 褐色土層 耕作土 平坦にするための埋土。ばさばさしており、ローム粒子・黒褐色土・φ0.2 ～1 cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 第II層 10Y R 4/2 灰黄褐色土層 平坦にするために影響を受けた土層。黒褐色土と黄褐色ローム層がくま状に層をなしており、人為堆積。軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 第III層 黄褐色ローム層
- A層 遺構覆土

#### お3 G付近

- 第I層 10Y R 3/4 暗褐色土層 耕作土 粒子細かく、ばさばさしている。φ0.2 ～0.5 cmの軽石を含む。僅かにローム粒子・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 第II層 10Y R 2/2 黒褐色土層 粒子やや細かく、やや粘性あり。僅かにローム粒子・φ0.5 ～1 cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 第III層 10Y R 3/2 黒褐色土層 やや粘性あり。ローム粒子・φ0.2 ～1 cmの軽石を含む。僅かに溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 第IV層 10Y R 4/3 にぶい黄褐色土層 ややしまりあり、粒子やや粗く、やや粘性あり。黒褐色土・黄褐色土・多量のφ0.2 ～2 cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 第V層 10Y R 4/4 褐色土層 ローム層に至る漸位層。粒子粗く、しまり、粘性あり。多量のφ0.2 ～2 cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 第VI層 黄褐色ローム層
- A層 遺構覆土

#### え22G付近

- 第I層 10Y R 3/4 暗褐色土層 表土

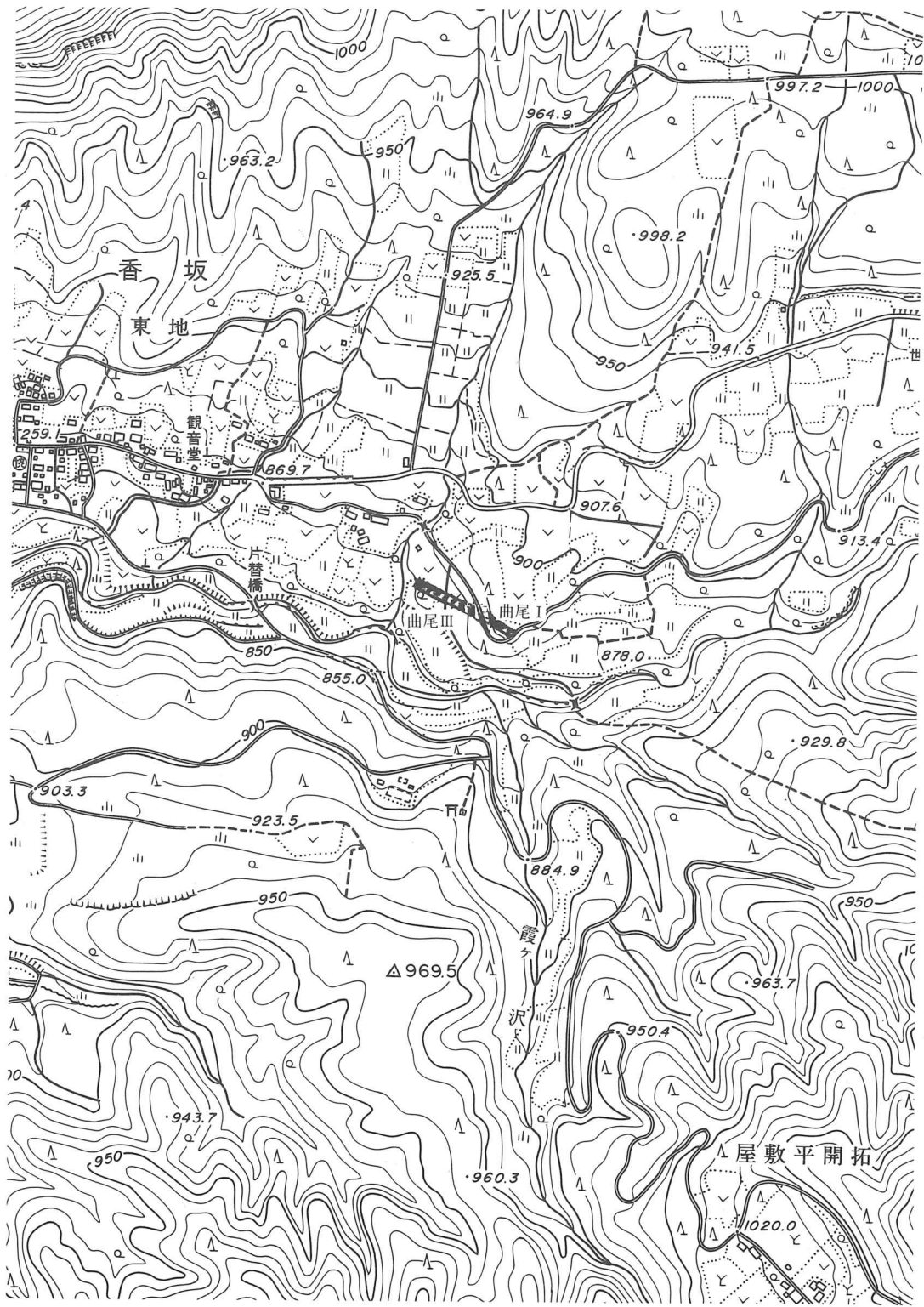




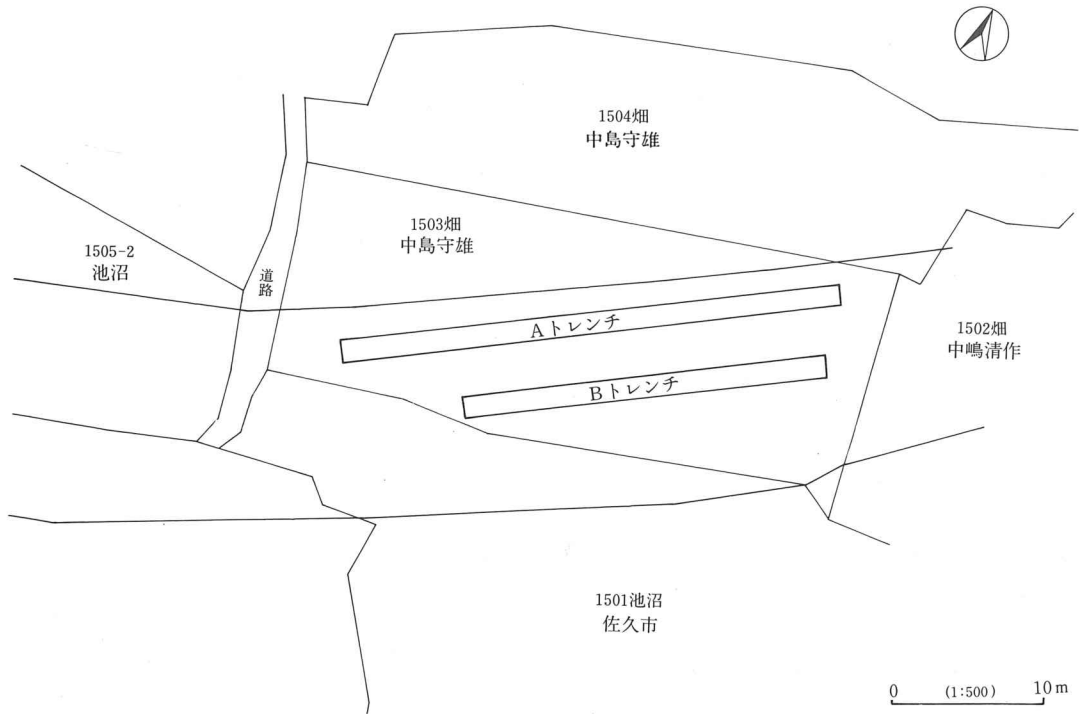
香坂ゲム

第12図 淡淵・屋敷前・西片ヶ上遺跡発掘区設定図及び地形図 (1:2,500佐久市基本図51による)





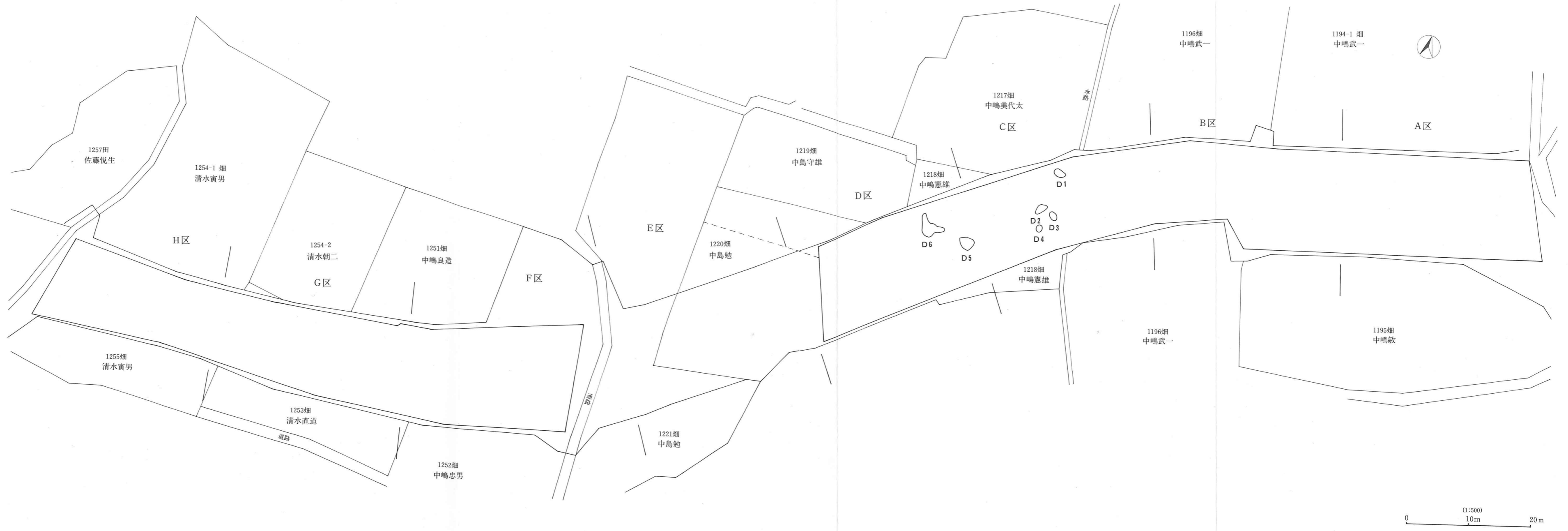
第13図 曲尾I・III遺跡発掘区設定図及び地形図 (1:10,000佐久市No.2による)



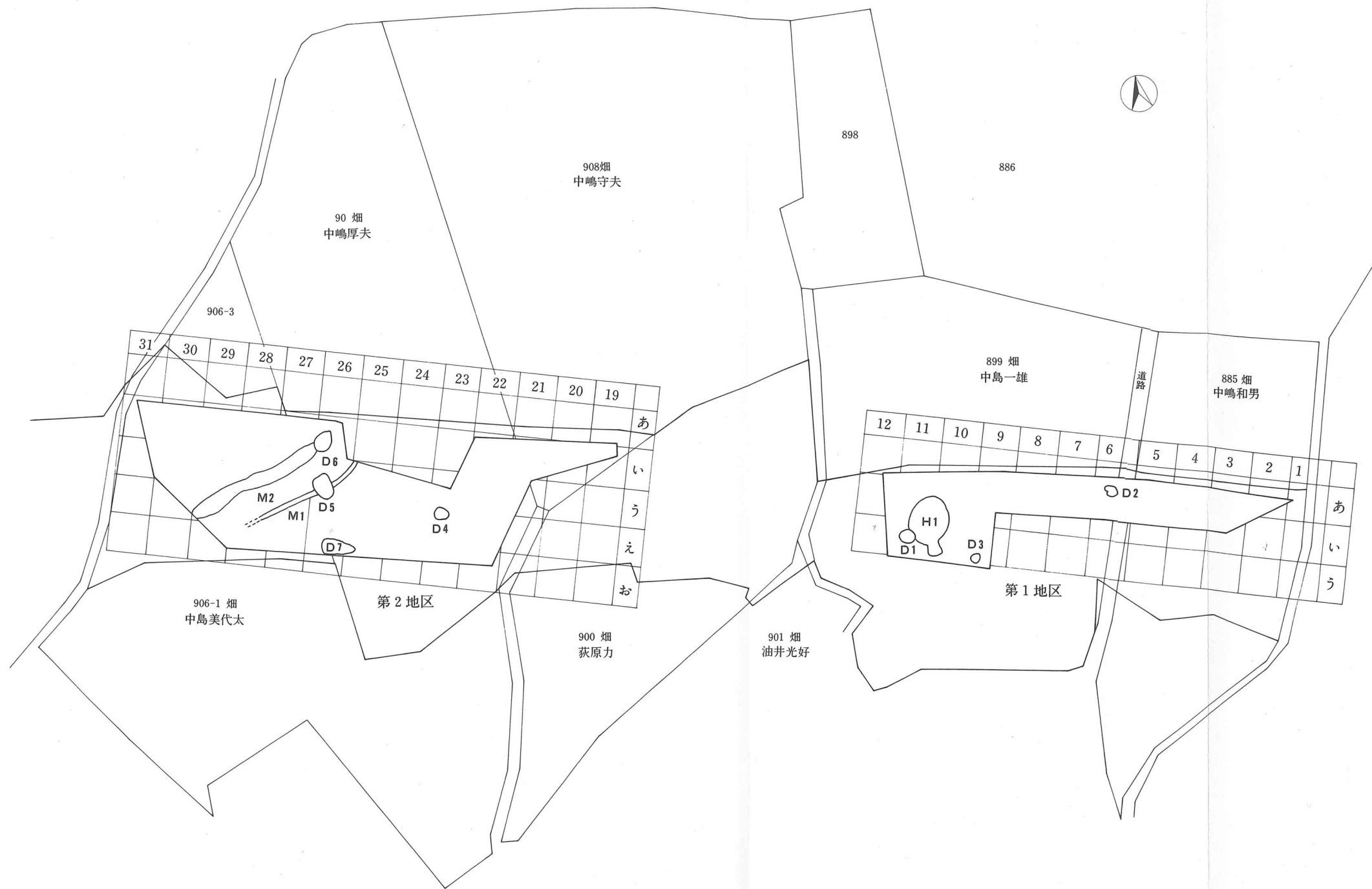
第14図 淡淵遺跡トレンチ設定図

- 第II層 10Y R2/2 黒褐色土層 粒子やや細かく、やや粘性あり。ローム粒子僅かに・ $\phi 0.2 \sim 0.5$  cmの軽石極僅かに・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 第III層 10Y R3/2 黒褐色土層 ややしまりあり。粒子やや粗く、やや粘性あり。ローム粒子・ $\phi 0.2 \sim 1$  cmの軽石僅かに・溶結凝灰岩の風化小礫僅かに含む。
- 第IV層 10Y R4/3 にぶい黄褐色土層 黒褐色土・ローム粒子僅かに・溶結凝灰岩の風化礫形状を留めたまま含む。
- 第V層 10Y R2/1 黒色土層 粒子細かく、しまり、粘性あり。溶結凝灰岩の風化小礫・極僅かにローム粒子を含む。
- 第VI層 10Y R2/2 黒褐色土層 しまり・粘性あり。僅かにローム粒子・ $\phi 0.2 \sim 1$  cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 第VII層 10Y R4/4 褐色土層 ローム層の漸位層。 $\phi 0.5 \sim 1$  cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 第VIII層 黄褐色ローム層

曲尾I遺跡は、曲尾III遺跡と同一の遺跡で、その東方に続く山地・台地にあり、香坂川の北岸、崖推堆積地形上に位置する。河床からの比高差は約40mを測り、標高880～890 mを示す。

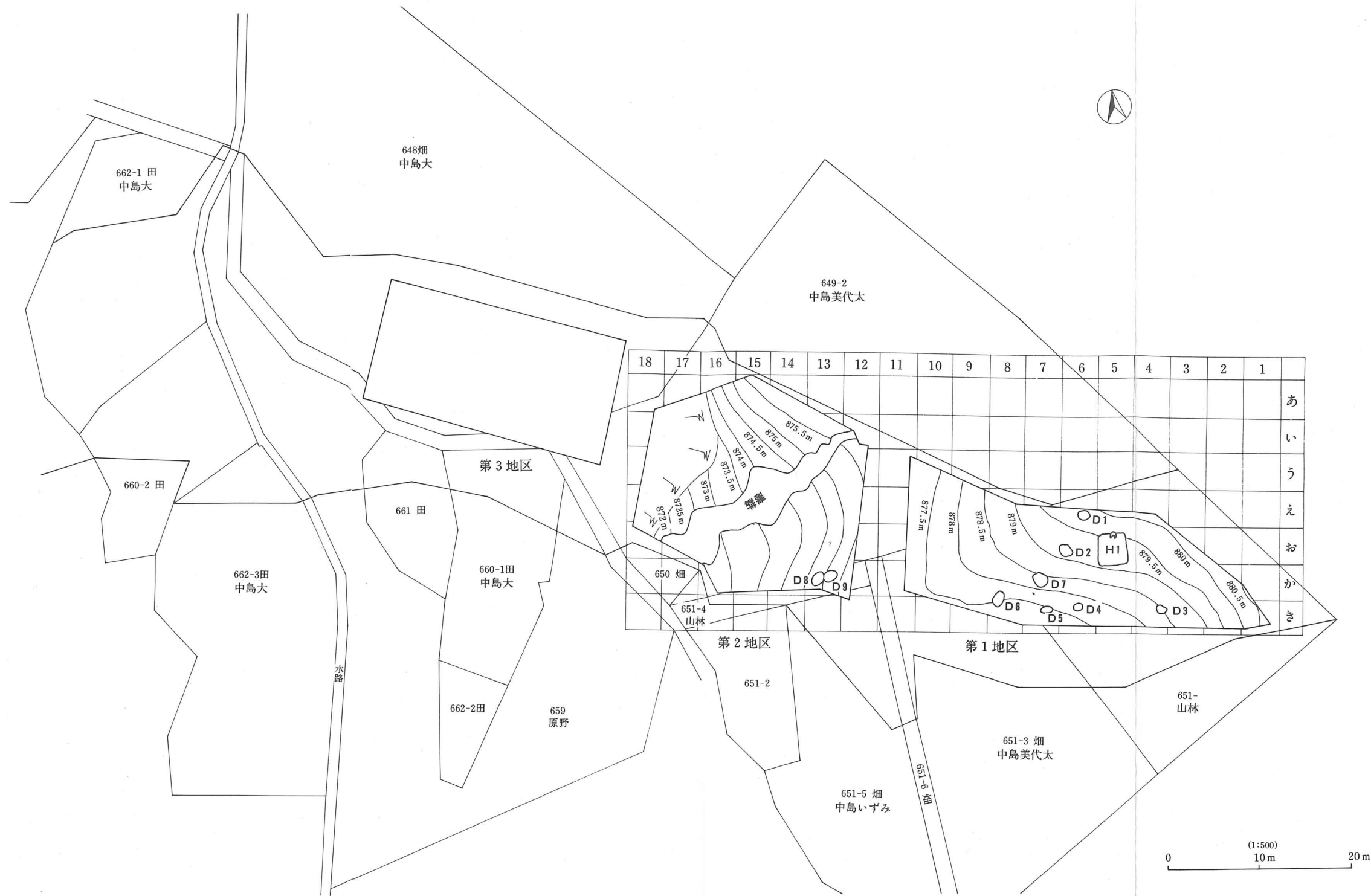


第15図 屋敷前遺跡遺構全体図

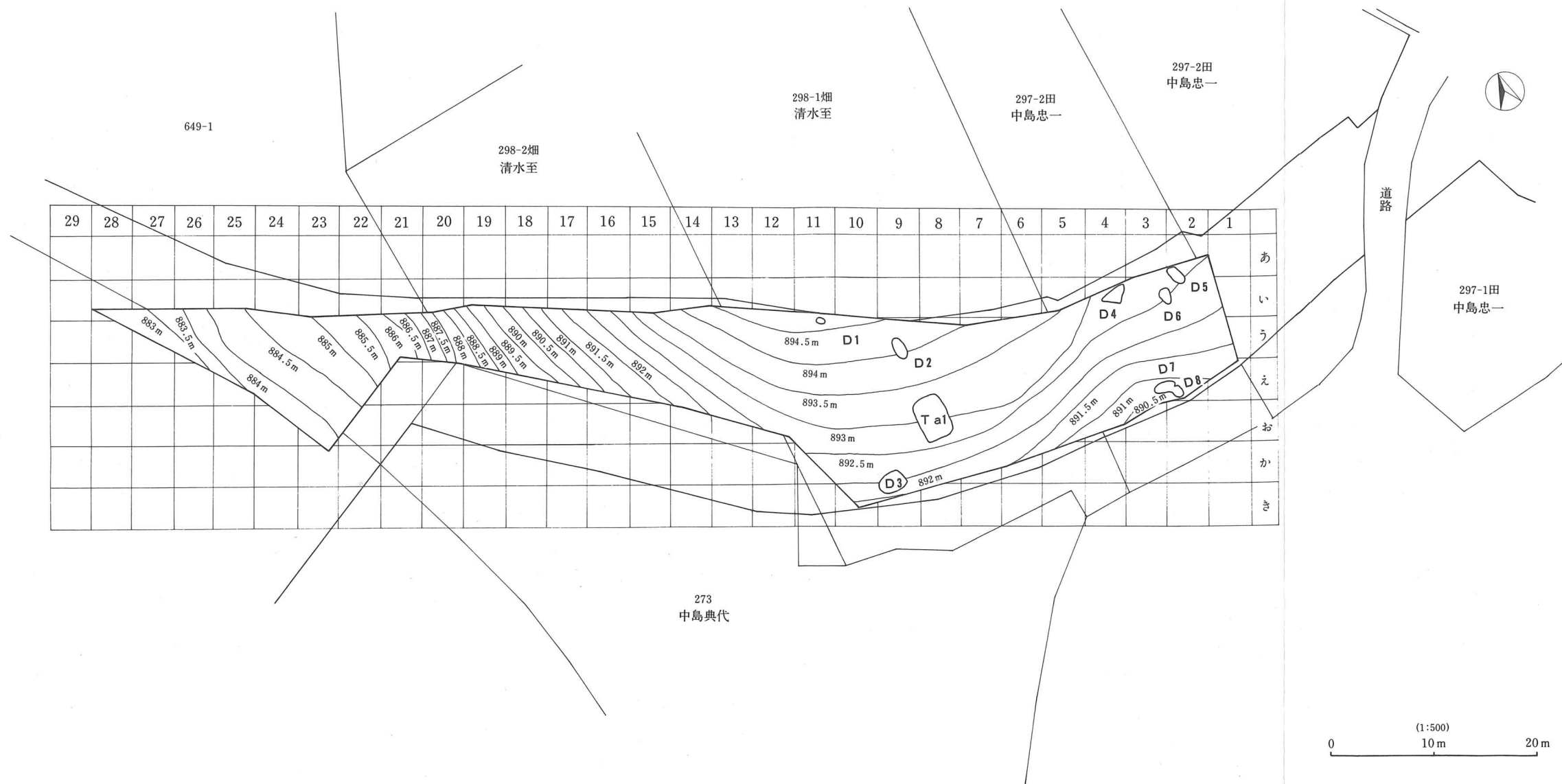


第16図 西片ヶ上遺跡遺構全体図





第17図 曲尾Ⅲ遺跡遺構全体図



第18図 曲尾 I 遺跡遺構全体図

発掘調査区において、い～お—12グリッドから西方は、西方に向けて急傾斜の山地で遺構は検出されなかった。い～お—12グリッドより東方は、南方へ向けて緩やかな傾斜をなす台地で、この地域より土坑 8 基と竪穴状遺構 1 基が検出された。

上述のように曲尾 I 遺跡は、傾斜地のため場所場所によって土層が異なるため、い11G付近、き 9 G 付近、い 4 G 付近、お 3 G 付近、え22G 付近の 5 ケ所において土層観察をした。第11図に示した基本層序模式図に見られるように、傾斜地特有の沢地になるほど土層の堆積が厚くなることから、お 3 G 付近及びえ22G 付近の断面より看取することができる。遺構の確認は、ローム層の漸位層中かローム層上面においてなされた。(高村)

## 第 2 節 検出遺構・遺物の概要

### 淡淵遺跡

遺構・遺物なし

### 屋敷前遺跡

遺構 土 坑 6 基 遺物 縄文土器片・石器剥片

### 西片ヶ上遺跡

遺構 敷石住居址 1 棟 (縄文時代後期)、土坑 7 基、溝状遺構 2 基  
遺物 縄文土器 (深鉢)、土師器 (甕・坏)、須恵器、陶器、石器 (石鏃・打製石斧)

### 曲尾III遺跡

遺構 竪穴住居址 1 棟 (平安時代)、土坑 9 基、礫群 1 基  
遺物 縄文土器片、土師器 (甕・坏等)

### 曲尾 I 遺跡

遺構 竪穴状遺構 1 基 (現代)、土坑 8 基 (D 1 は縄文時代中期)  
遺物 縄文土器 (深鉢等)、石器

## 第Ⅳ章 淡淵遺跡

淡淵遺跡は、香坂ダム北岸の崖推堆積地形上に位置し、標高は822～826 mを測る。遺跡の眼下には香坂ダムにより貯水された湖が広がっており、丁度、湖水の溜まる入口付近に当たっている。試掘対象地は、北から南に向って緩やかな傾斜をもったレタス畑で、その畑に幅1.5 mのトレンチを2本、平行に南西方向から北東に向って重機により試掘した。試掘したAトレンチの基本土層は下記のとおりである。

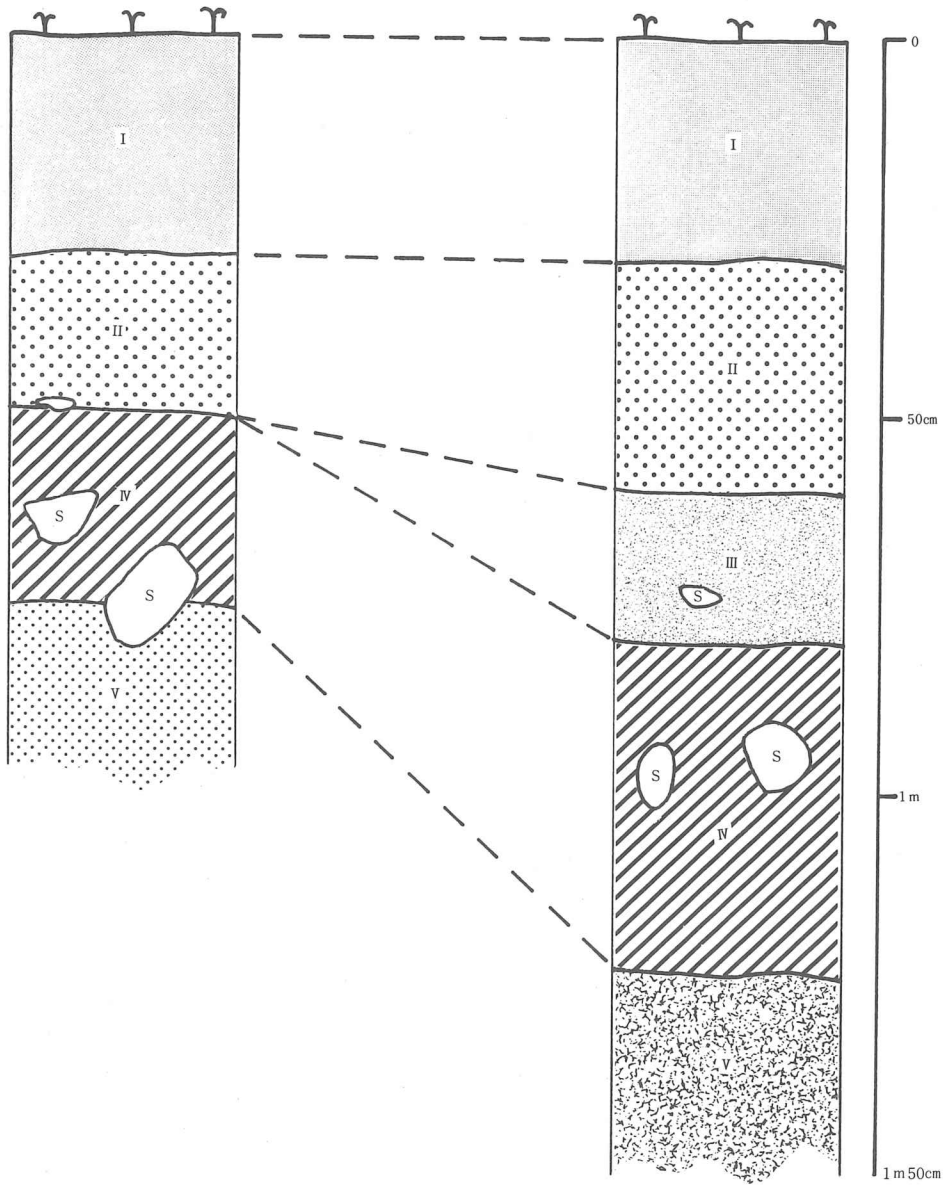
### 淡淵遺跡基本土層

- 第Ⅰ層 10Y R2/3 黒褐色土層 耕作土 粒子やや粗く、粘性ややあり。
- 第Ⅱ層 10Y R2/1 黒色土層 粒子やや細かく、やや粘性あり。僅かに溶結凝灰岩の風化小礫が下面でふくまれている。
- 第Ⅲ層 10Y R2/2～3/3 黒褐色から褐色土層 黒褐色土を基調に下面に向ってローム粒子が段々増す。粒子やや粗く、やや粘性あり。φ0.5～1 cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫・溶結凝灰岩の礫を僅かに含む。
- 第Ⅳ層 10Y R4/3 にぶい黄褐色土層 黄褐色土を基調にローム粒子を含む。粒子粗く、ばさばさしている。φ1～2 cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を僅かに含む。溶結凝灰岩の頭大から一かかえもする大きな礫を多く含む。
- 第Ⅴ層 10Y R4/4 褐色土層 ローム層

Aトレンチ内の基本層序は第19図に示したように、第Ⅰ層の耕作土は約30cmの層厚をもって堆積しており、第Ⅱ層は約20～30cmの層厚で全面に堆積していた。第Ⅲ層は、Aトレンチの東側部分にしか見られず、西側には存在しない。第Ⅲ層下面から溶結凝灰岩の礫が含まれており、第Ⅳ層中には頭大から一かかえもある大きな溶結凝灰岩が多数含まれていた。これらの溶結凝灰岩の礫の存在から、この段丘の上部（第Ⅲ・Ⅳ層）は、崖推堆積であることが知られ、崖推堆積の最盛期は、白倉盛男氏の鑑定によると氷河期とのことである。第Ⅴ層は褐色のローム層で、この段丘の基盤と思われる。

A・Bトレンチ内の土層から、所々に自然地形による凹地が観察されるものの、人為的な落ち込みである遺構は確認できず、また、遺物の出土も皆無であった。このことから、今回の試掘区域内に遺跡が存在しないことが判明した。 (高村)





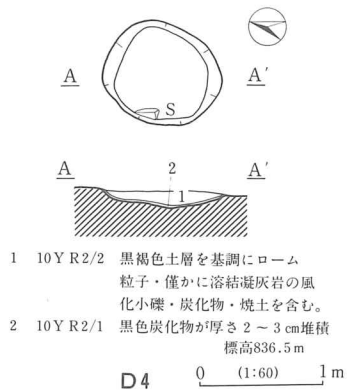
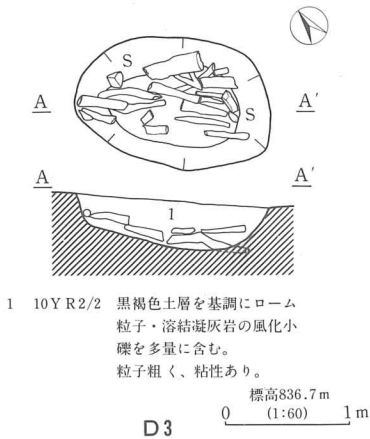
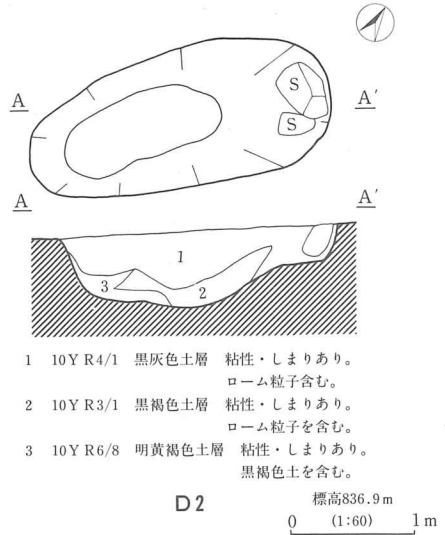
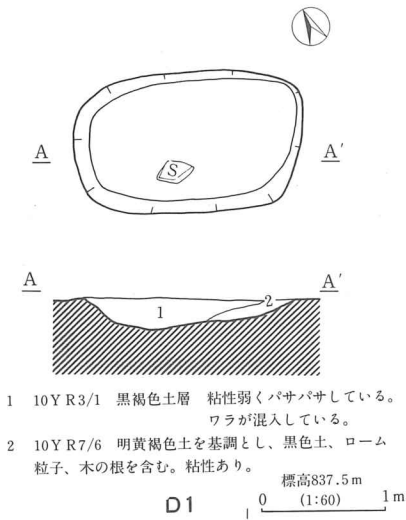
第19図 淡淵遺跡基本層序模式図

# 第V章 屋敷前遺跡

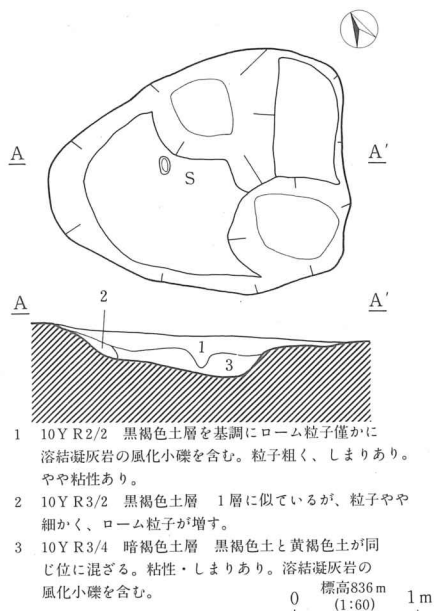
## 第1節 土坑 (第20~22図、図版 五の1~6)

屋敷前遺跡より検出された遺構は、土坑が6基だけである。検出された土坑は、すべてC・D区に集中してみられる。

第1号土坑は、C区中央付近の北側に位置し、東西181cm、南北112cmの隅丸方形を呈する。



第20図 第1~4号土坑実測図



第21図 第5号土坑実測図

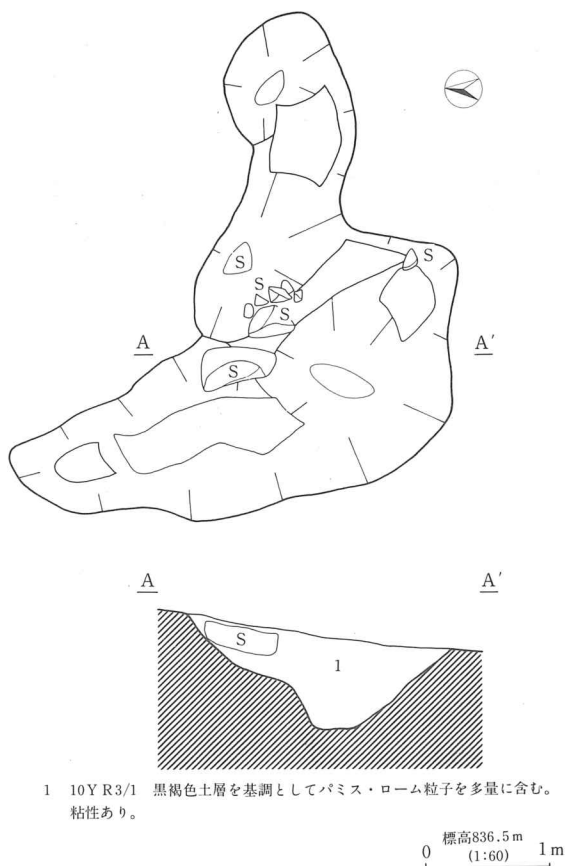
長軸方位はN-73°-Wを示し、深さ25cmを測る浅鉢状を呈している。出土遺物は、覆土内より無文の縄文土器小片が出土しているが、共伴するものとは貝合せない。

第2号土坑は、C区西寄りで発掘

区のほぼ中央付近で検出された。長軸246cm、短軸108cmの楕円形を呈し、長軸方位N-48°-Eを示す。土坑の東壁に大きな礫が2ヶ存在し、深さ49cmの逆台形状に掘り込まれている。覆土は3層に分割でき自然堆積と思われる。1層は黒灰色土層で、粘性があり、ローム粒子を含む。2層は黒褐色土層で粘性があり、ローム粒子を含む。3層は明黄褐色土層で漸位層かもしれない。出土遺物は玄武岩の剝片が1片出土しただけで他は見られなかった。

第3号土坑は、C区の第2号土坑の南東に位置し、長軸154cm、短軸100cmの楕円形を呈する。長軸方位はN-49°-Wを示し、深さ39cmの逆台形状に掘り込んである。土坑内には、奥州桑の根が長軸方向と平行にぎっしりつまっており、地元の人の話によると奥州桑を抜根する際、根を細かく切って行ったとのことであり、その名残りと考えられる。

第4号土坑は、C区第2号土坑の西方に位置し、長軸91cm、短軸88cmの小形の円形に近い楕円形を呈している。長軸方位はN-9°-Eを示し、深さ11cmの浅鉢状に掘り込まれており、底面には炭化材がびっしり堆積していた。覆土は2層に分割でき、1層は黒褐色土を基調としたローム



第22図 第6号土坑実測図

粒子混入の層で、溶結凝灰岩の風化小礫僅かに、炭化物・焼土を含む。2層は炭化物の層で層厚は2～3cmを測る。この土坑はぼや炭を作った跡で現代のものと思われる。

第5号土坑は、D区東寄りの発掘区の中央付近において検出された。平面形態は底辺155cm、長軸236cmの隅丸三角形を呈し、長軸方位はN-69°-Wを示す。東側底辺付近にテラスを有し、深さ35cmの浅鉢状に落ち込んでいる。覆土は3層に分割され、1層は黒褐色土を基調にローム粒子僅かに、溶結凝灰岩の風化小礫を含む。粒子は粗く、しまりとやや粘性あり。2層は1層と同じく黒褐色土層であるが、粒子やや細かくローム粒子が増す。3層は暗褐色土層で黒褐色土と黄褐色土が同じ位に混ざり、粘性・しまりあり。溶結凝灰岩の風化小礫を含む。出土遺物としては、1層からチャートの母岩と縄文土器が1片出土している。

第6号土坑は、D区東寄り、発掘区の北側に位置する。平面形態は、東西383cm、南北362cm、の不整形で、深さ70cmを測る。覆土は1層で、黒褐色土層を基調としてパミス・ローム粒子を多量に含み、粘性がある。本土坑の形状および覆土、また、底面に木の根があったことなどから、風倒木によるものと判断する。

以上、6基の土坑について述べたが、出土遺物がほとんどなく、その正確・時期については不明な土坑が多い。

その他、屋敷前遺跡から表採及び耕作土出土の遺物は、無文の縄文土器小片2点と、陶器1片が出土しているだけである。

(高村)

## 第VI章 西片ヶ上遺跡

### 第1節 敷石住居址

#### 1) 第1号敷石住居址

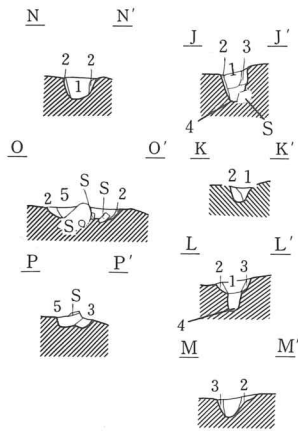
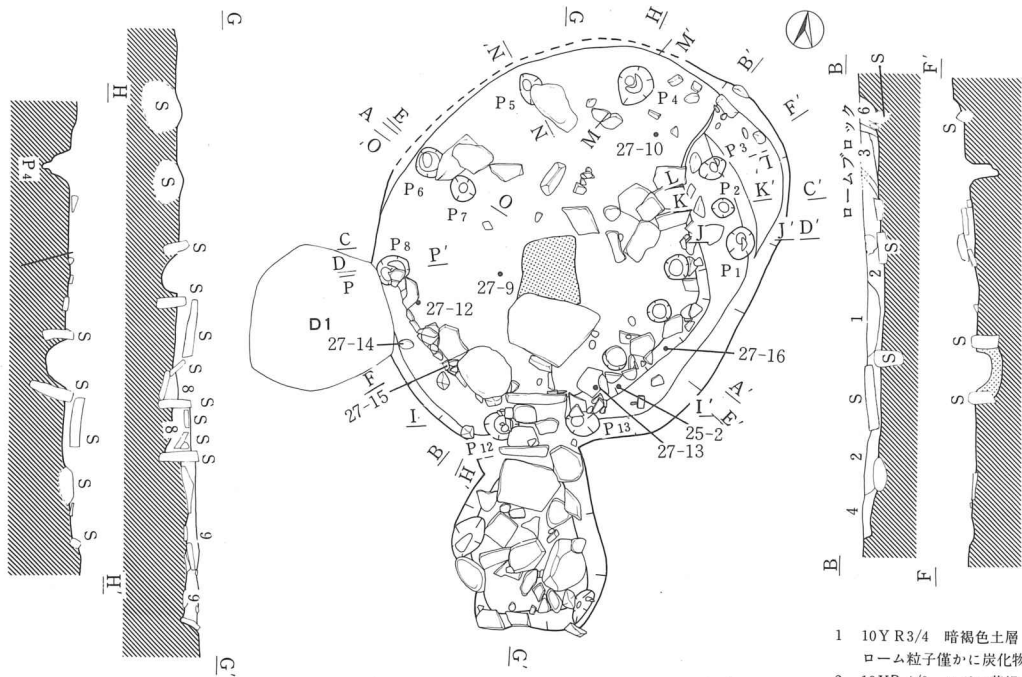
遺構 (第23・24図、図版 八・九)

本住居址は発掘区第I地区西側、緩やかな尾根が、香坂川におちる西斜面上に構築され、グリッドい・う—10・11に位置し、全体層序第VI層黄褐色ローム層上において、第1号土坑に僅かに西側壁が破壊をうけた状態で検出された。本住居址の張り出し部を入口施設と見なすと主軸方位はN—4°—Wで、張り出し部と炉が略一直線に位置し、主体部東西425cm、南北420cmを測り、略円形を呈し、張り出し部は東西150cm、南北190cmを測り、隅丸長方形を呈し、主体部面積は13.01m<sup>2</sup>で、張り出し面積は2.63m<sup>2</sup>である。

壁残高は深い所で20cmを測り、北西部は上面破壊をうけ床面を留めるのみであり、壁体は残存部分ではやや堅固で、緩やかなカーブをもって立ち上がる。

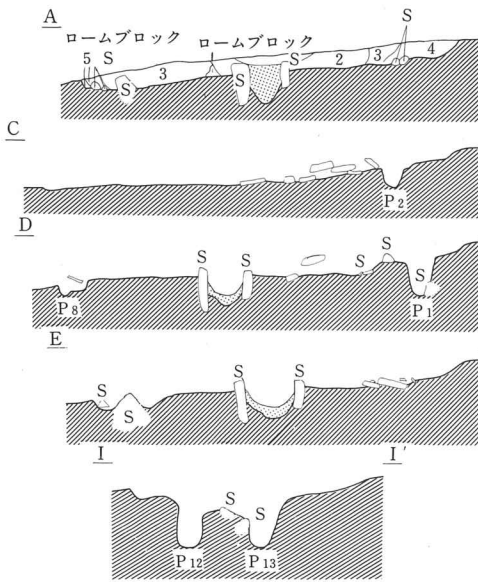
主体部の覆土は7層に分割でき、堆積状態は大概自然堆積で1層は暗褐色土層でローム粒子混、僅かに炭化物を含み、土質はソフトである。2層はにぶい黄褐色土層でローム粒子、僅かに溶結凝灰岩の風化小礫、炭化物を含み、土質はやや粘性、しまりある。3層は黒褐色土を基調に僅かにローム粒子、溶結凝灰岩の風化小礫を含み、土質は2層に似る。4層は2層より、より多くのローム粒子混、5層は3層に似ているが、僅かにφ0.5～2cmの小礫を含む。6層は5層より多くの黒褐色土を含み、7層はにぶい黄褐色土層でローム粒子を多量に含み、僅かにφ0.5～2cmの小礫を含む。土質は粒子粗く、ソフトであり、流れ込みと考えられる。張り出し部は9層暗褐色土層で1層に似ているが、より多く黒褐色土を含む。また、主体部と張り出し部の接合部は扁平な亜角礫の溶結凝灰岩が立脚し、2室を区切った様に3個埋まっており、8層黒褐色土を基調にローム粒子を含み、土質ソフトであり、人為堆積と考えられるが、土中からはなにも検出されなかった。

床面は本住居址において、主体部南側半分には壁と敷石の間15～35cmの幅をもったテラスを有し、規則性をもった配石が残存している。その形状は幅20～50cm、厚さ5～10cmの円磨作用をうけた扁平な玄武岩、溶結凝灰岩を敷き、その外周には幅5cm前後、長さ15cm前後の扁平な亜角礫の玄武岩、溶結凝灰岩、安山岩が丁寧に敷かれており、残存部において敷石は三日月型を呈して



ピットの土層説明

- 1 10Y R3/4 暗褐色土層 黄褐色土と黒褐色土が同量位混入。やや粒子粗く、やや粘性あり。僅かに炭化物・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 2 10Y R4/4 褐色土層 黄褐色土を基調に僅かに黒褐色土を混入。崩落か？。
- 3 10Y R3/2 黒褐色土を基調に僅かに黄褐色土混入。粒子やや粗く、しまりあり、僅かに溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 3' 3層に似ているが僅かに炭化物を含む。
- 4 10Y R2/3 黒褐色土を基調にローム粒子混入。僅かに炭化物・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 5 10Y R3/3 暗褐色土層 土質ソフトで粒子やや粗い。僅かに炭化物・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。



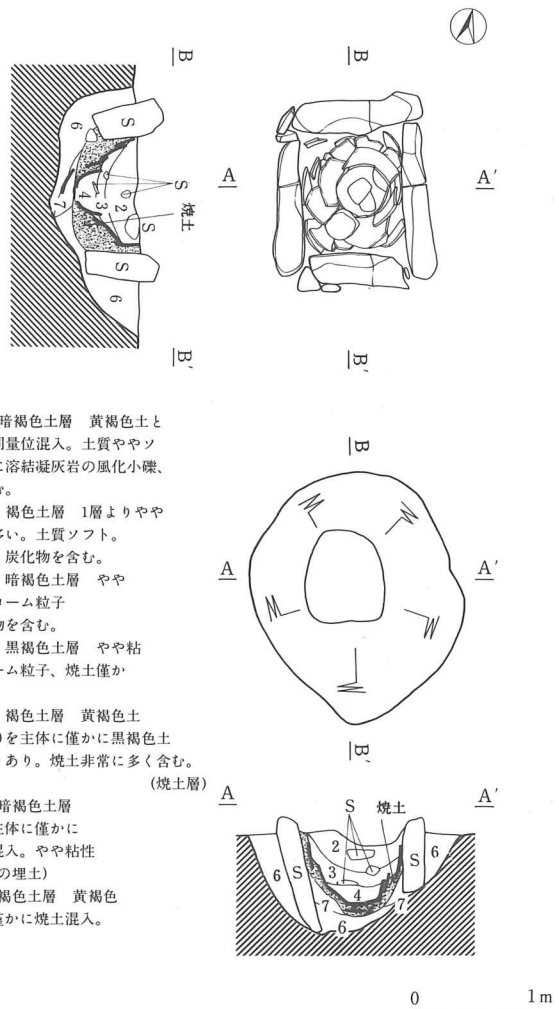
- 1 10Y R3/4 暗褐色土層 土質ソフト。ローム粒子僅かに炭化物を含む。
- 2 10Y R4/3 にぶい黄褐色土層 やや粘性・しまりあり。ローム粒子。僅かに炭化物・僅かに溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 3 10Y R3/2 黒褐色土を基調に僅かにローム粒子混入。ややしまり・粘性あり。僅かに溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 4 10Y R4/4 褐色土層 2層に似ているがローム粒子をより多く混入。
- 5 10Y R2/3 黒褐色土を基調に僅かにφ0.5-2cmの小礫を含む。粘性あり。僅かに溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 6 10Y R2/2 黒褐色土層 5層に似ているがより多く黒褐色土を含む。
- 7 10Y R4/3 にぶい黄褐色土層 ローム粒子・φ0.5-2cmの小礫を含み、粒子やや粗く、土質ソフトである。
- 8 10Y R3/2 黒褐色土を基調にローム粒子を混入。土質ソフトで粒子やや細かい。僅かに溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 9 10Y R3/4 暗褐色土層 粒子やや粗く、φ0.5-2cmの軽石・僅かに溶結凝灰岩の風化小礫・僅かに炭化物を含む。

標高851.3m  
(1:80) 2m

第23図 第1号敷石住居址実測図

いる。その他の石は床面上に接しているものと、床面上に浮いているものが散在し、規則性は看取できない。これらのことから、床面全面に敷石がなされたとは考えにくく、張り出し部に接する側に三日月型に敷石を行った可能性がある。また、覆土のところでも少しふれたが、張り出し部と主体部との接合部は特異な形状を示しており、床面より深く掘り窪められ、立脚する扁平な溶結凝灰岩によって2つに区切られており、後方は30×40cmの長方形を呈し、深さ20cmで、底面には扁平な垂角礫の溶結凝灰岩が置かれ、8層が埋まっていた。また、炉に接し敷石面より浮いている65×90cm、厚さ10cm前後の扁平な垂角礫の溶結凝灰岩は、その上に乗っていたとも考えられる。区切られた前方は65×65cmの略正方形を呈し、深さ20~30cmで、12~15cmの厚さに8層が堆積しており、その上面には扁平な垂角礫の溶結凝灰岩が3個乗っている。接合部は主体部敷石面より15~20cm高い所が使用面と考えられる。張り出し部は主体部敷石面より一段高く、接合部とレベルは略同じであり、底面には雑ではあるが、略全面に円磨作用をうけた扁平な溶結凝灰岩と玄武岩が敷れており、平面の形状は胴張りの長方形であった。壁は軟弱であり、緩やかなカーブをもって立ち上がっていた。

ピットは主体部において13個検出され、円形壁柱形式の様相を示す。その配置はP1・P3・P8・P12・P13は残存部において、敷石外縁と壁の間に位置し、P4・P5・P6は敷石の痕跡を留めない床面上に位置し、P5・P6は崖堆積内の石を側壁に利用していた。P12とP13は張り出し部と主体部の接合部に位置していた。それぞれの間隔はP1~P3間55cm、P3~P4間90



第24図 第1号敷石住居址炉址実測図

cm、P4～P5間82cm、P5～P6間105cm、P6～P8間90cm、P8～P12間170cm、P12～P13間55cm、P13～P1間220cmを測り、柱穴間は等間隔でなかった。深さはP1は30cm、P3は31cm、P4は20cm、P5は23cm、P6は30cm、P8は20cm、P12は50cm、P13は52cmを測り、特にP12・P13の深いのは上屋構造上の問題か、他の機能を有するのためのものか、類例を待ちたい。他に補助的な柱穴としてP2・P7があげられる。深さは12～15cmと浅い。P9・P10・P11はいずれも円形を呈し、深さ3～5cmと浅く、敷石の埋まっていた痕跡と考えられる。張り出し部においては2個検出され、いずれも壁中ピットであり、深さは20～25cmを測り、楕円形であった。

炉においては主体部略中央に位置し、石組埋甕炉である。その形状は4枚の扁平な溶結凝灰岩を60×72cmの長方形に組み、その3コーナーには溶結凝灰岩の割り石と円礫によって、僅かに補強されていた。火床中央に深鉢25—1が、半載され横位の位置に据えられ、その周囲に粗製深鉢26—3の大きい破片を用いて、25—1を取り巻く形で配されていたが、土器内は火熱をうけた痕跡は少なかった。また、構築順序は床面を82×100cmの楕円形、深さ35～40cmの播鉢状に掘り窪め、石組に適する4枚の無加工の自然石を、埋土をしながら4角形になるように据え、火床は播鉢状になるように、土器を埋土しながら固定していたことが窺われる。尚、埋設甕に火熱による変化が少なく、灰・炭化物の少ないこと、また、埋設甕の下に焼土の多く含む褐色土層があり、25—1、26—3破片とは異なる26—5・7が含まれていること等から、埋設甕の火床を何度か代えたとも考えられる。尚、炉内より、4～7cmの不定形の河原石が12個出土した。

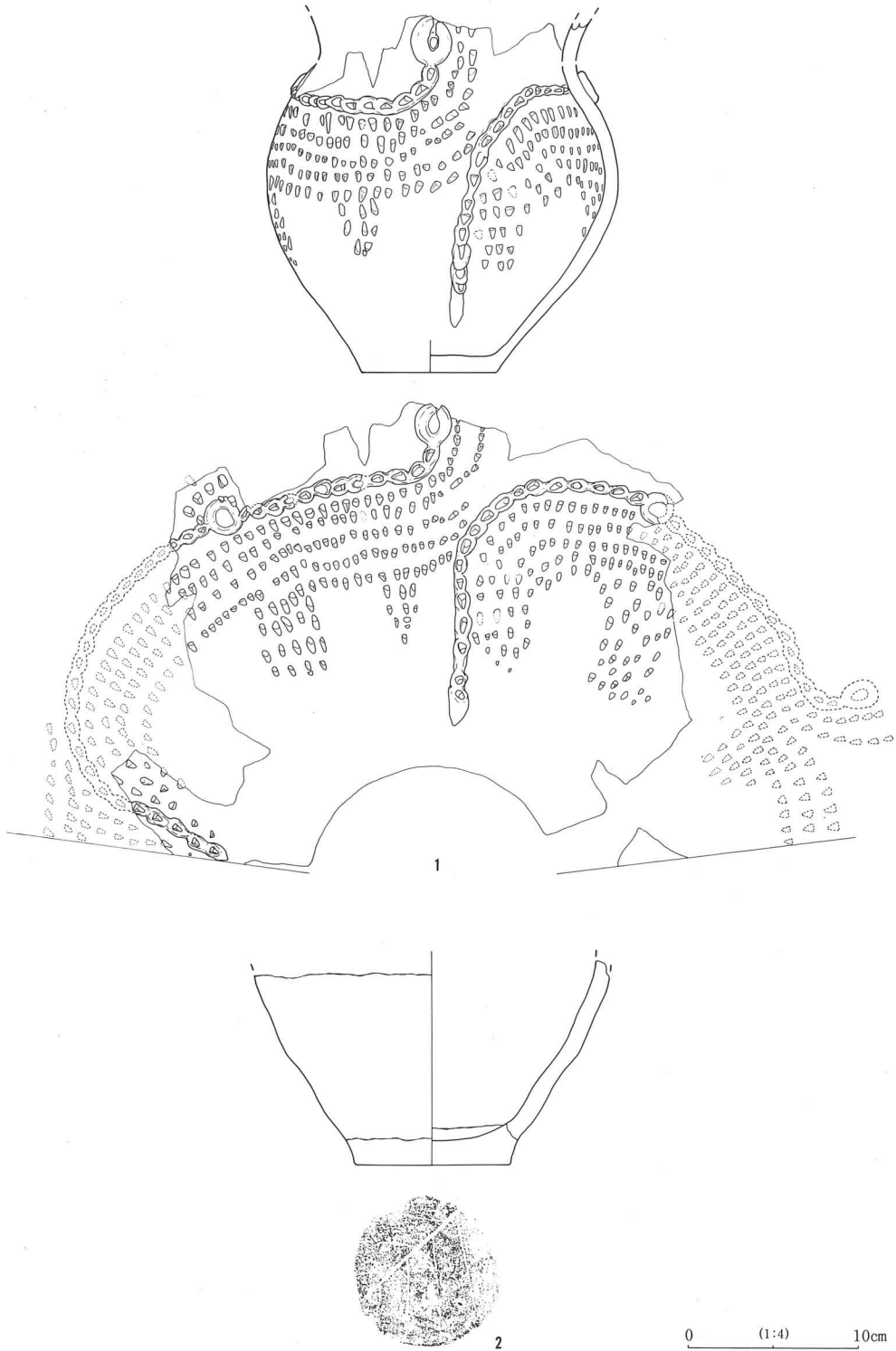
遺物の分布は、本住居址においては極めて出土が少なく、遺物は散在していた。土器としては埋設炉に用いた深鉢25—1・26—3と東南壁下付近、木葉痕の観察できる底部25—2と、石器においては、石鏃が2点、27—9はP4の東南40cmの位置に、27—10は炉西側15cmの位置で出土、横刃型石器27—12はP8の南東28cmの敷石の上より出土、欠損している打製石斧27—15は主体部南西敷石の外縁に使用されていた。

#### 遺物（第25～27図、図版十一・十二の1・2）

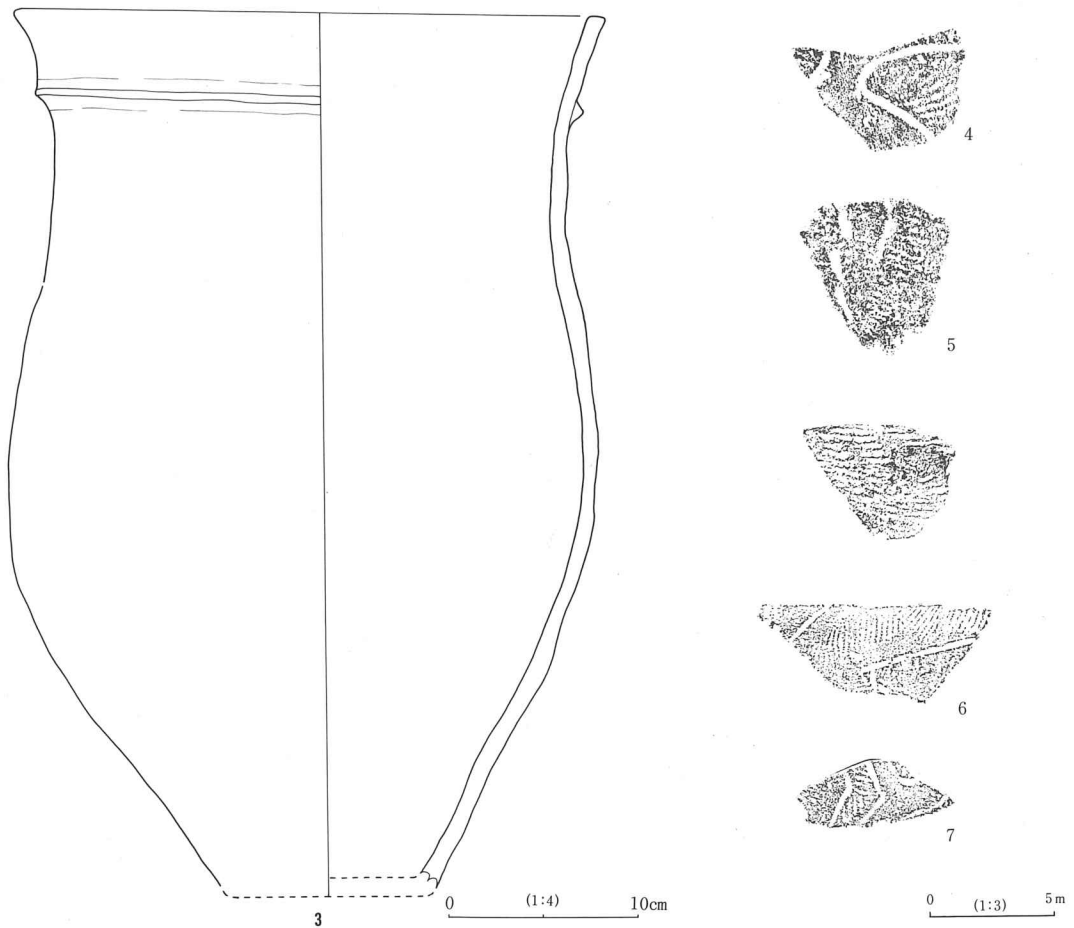
本住居址からは深鉢・石鏃・凹石・横刃型石器・打製石斧・敲石が出土した。そのうち図示し得たものは16点（実測図11点、拓影図5点）である。

深鉢についてふれると25—1は三十稻葉系の刺突文を有し、二帯の鎖文によって区画されており、胴下部には刺突による垂下文が施こされている。文様構成からみると垂下文を有するところから、称名寺式土器の文様構成の影響が看取でき、この土器は三十稻葉式土器に準ずる土器として位置づけられよう。<sup>(1)</sup>25—2・26—3は粗製深鉢土器であり、26—3は胴部緩く張り出し、頸部僅かにくびれ、口辺部外反し、頸部には貼付けによる一条の隆帯を有する。共に加曾利E系の系譜をひく土器と考えられる。26—4・7・8は地文にLR縄文を施して、沈線で区切り、磨消し





第25図 第1号敷石住居址出土土器実測図〈その1〉



第26図 第1号敷石住居址出土土器実測図及び拓影図〈その2〉

縄文である。これらの土器は小片のため全器形を知り得ないが称名寺系の土器と考えられる。<sup>(2)</sup>これら同一住居址内より系譜の異なる土器が共存していることは、文化圏を知る上で貴重な資料といえよう。また、26—5はLR縄文を地文に列点文が施され、26—6は地文に縄文が施されている。以上のことから土器に関し、耕作土出土においては僅かに曾利系土器が検出されているが、本住居においては見当らず、主に南関東の文化圏（加曾利E系・称名寺系）に影響され、従の形で三十稲葉系・曾利系の文化圏が影響を与えたと考えられる。そのことは敷石の形態からも看取できる。

石鏃27—9は石質玄武岩で、逆刺が円形を呈し、扶りやや深く、粗製の凹基無茎石鏃であり、27—10は石質黒曜石で、側辺直線的に収束、扶りやや浅く、逆刺鈍い凹基無茎石鏃、27—12は石質チャートで、石匙に近い形状を示しているが、摘み部がはっきりせず、刃部両面加工が施されていることから、横刃型石器としてとらえておきたい。27—15は打製石斧の再利用品で敷石の外

第4表 西片ヶ上遺跡第1号敷地住居址出土土器観察表

挿 番 号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整及び文様構成	備 考
25-1	深鉢	— (20.8) 7.8	頸部でくびれる。	内面) ヘラミガキ 外面) 磨消し縄文 文様) 鎖文が口縁部から頸部に垂下、頸部 に輪状の繫を有し、胴上部で鎖文が垂直 に交換し、中程でもう一つ輪状の繫を有 し、また胴下部に鎖文が垂下する。この 鎖文によって2区画され、区画内、胴中 央部は刺突文が一面に施こされ、胴下部 は刺突による垂下文によって構成されて いる。	完全実測 埋設炉に使用 三十稲葉式土器に 準ずる。
25-2	深鉢	— (11.8) 9.0		粗製土器、底部木葉痕有す。	回転実測B No 8
26-3	深鉢	31.2 (36.1) —	胴部緩く張り出し、頸部僅 かにくびれ、口辺部外反す る。	粗製土器、頸部貼付けによる一条の 隆帯を有す。	回転実測B 埋設炉に使用 加曾利E系土器

7.8

第5表 西片ヶ上遺跡第1号敷石住居址出土石器観察表

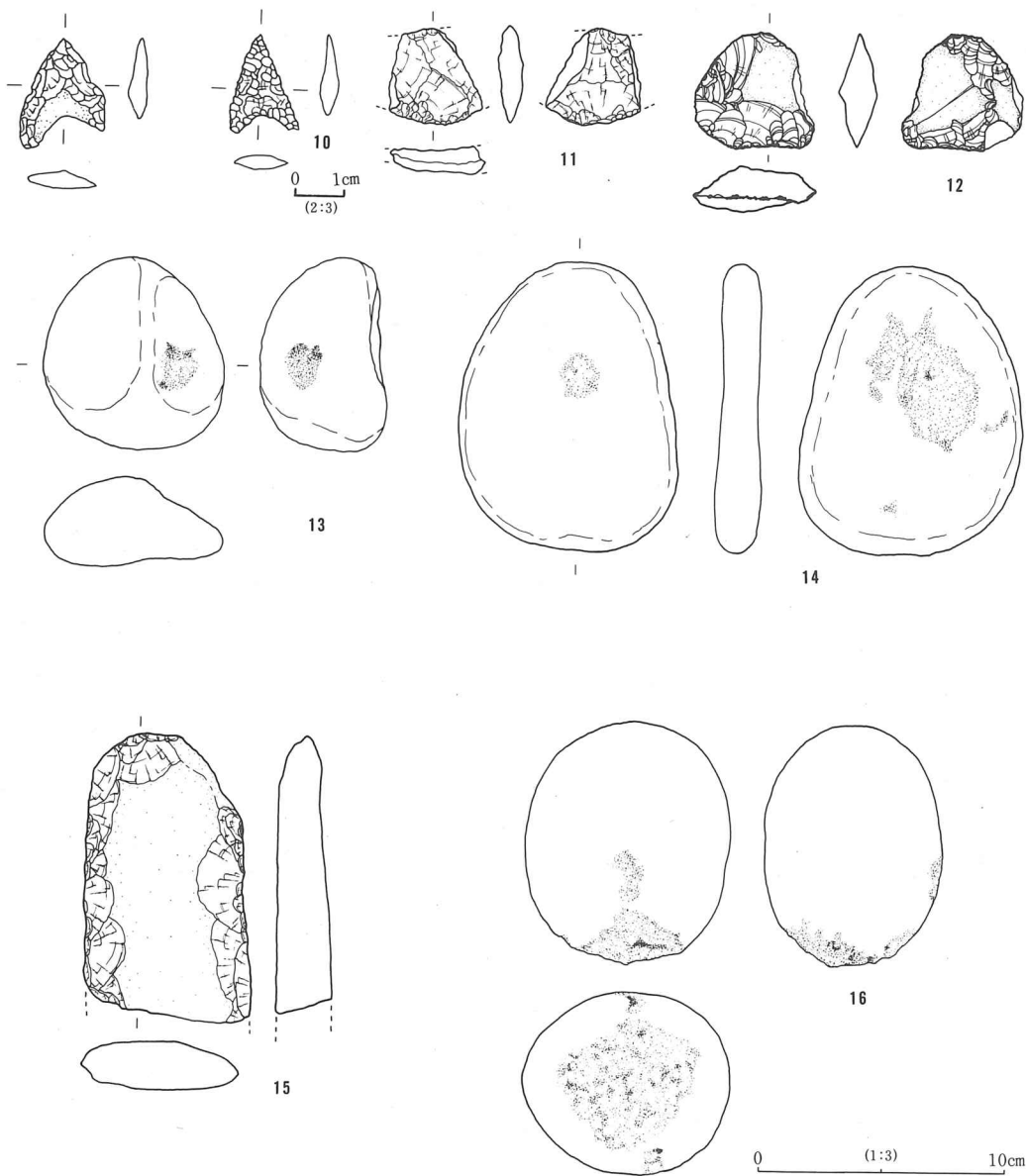
挿 番 号	器 種	石 質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	欠損状態	出土位置	備 考
27-9	石 鏃	玄武岩	1.65	1.7	0.4	0.72	完 形	No 2	幅広く、側辺内湾気味先端で収束。 抉りやや深く、逆刺円形を呈す。 凹基無茎鏃。
27-10	石 鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.4	0.5	完 形	No 1	側辺直線気味先端で収束。抉りや 、浅い。逆刺鈍い。凹基無茎鏃。
27-11	横刃型石器	玄武岩	(3.9)	3.8	0.9	45.9	両端欠	IV区	刃部両面加工、使用による磨耗が 観察できる。
27-12	横刃型石器	チャート	4.5	5.5	1.6	28.4	完 形	No 3	刃部両面加工、刃部刃毀著しい。
27-13	凹 石	安山岩	7.7	7.3	3.5	315	完 形	No 7	円礫で、一面にφ 1.5cmの凹状を 有す。
27-14		砂 岩	11.6	8.8	1.9	300	完 形	No14	偏平な円礫、両面に敲打痕有す。
27-15	打製石斧	安山岩	(11.2)	( 6.3)	( 2.1)	( 312)	刃部欠	No13	側辺両面加工。基端部磨滅著しい。 敷石の外縁に利用。
27-16	敲 石	安山岩	9.7	8.3	7.2	796	完 形	No 4	円礫、端部敲打痕著しい。

縁に使用されていた。27-16は敲石で、握り拳大の円礫であり、先端著しい敲打痕が観察できる。

以上、本住居址出土の遺物は縄文時代中期後半の系譜を継承している土器と、縄文時代後期初頭の称名寺式土器、三十稲葉式土器に系譜をもとめる土器等が共存していることから、本住居址の所産期を縄文時代後期初頭と考えておきたい。(羽毛田伸)

註1 平林彰・綿田弘美両氏の御教示による。

註2 註1に同じ



第27図 第1号敷石住居址出土石器実測図 (9~10は2:3、他は1:3)

## 第2節 土坑 (第28~30図、図版十の1~7)

本遺跡からは7基の土坑が検出され、第1地区3基、第2地区4基とその分布は散漫である。

第1号土坑は、第1地区のうー11グリッド内より検出された。第1号敷石住居址と重複関係にあり南西部の一部を破壊して構築されている。断面は底面が凹凸した浅鉢状を呈し、深さ14cmを測

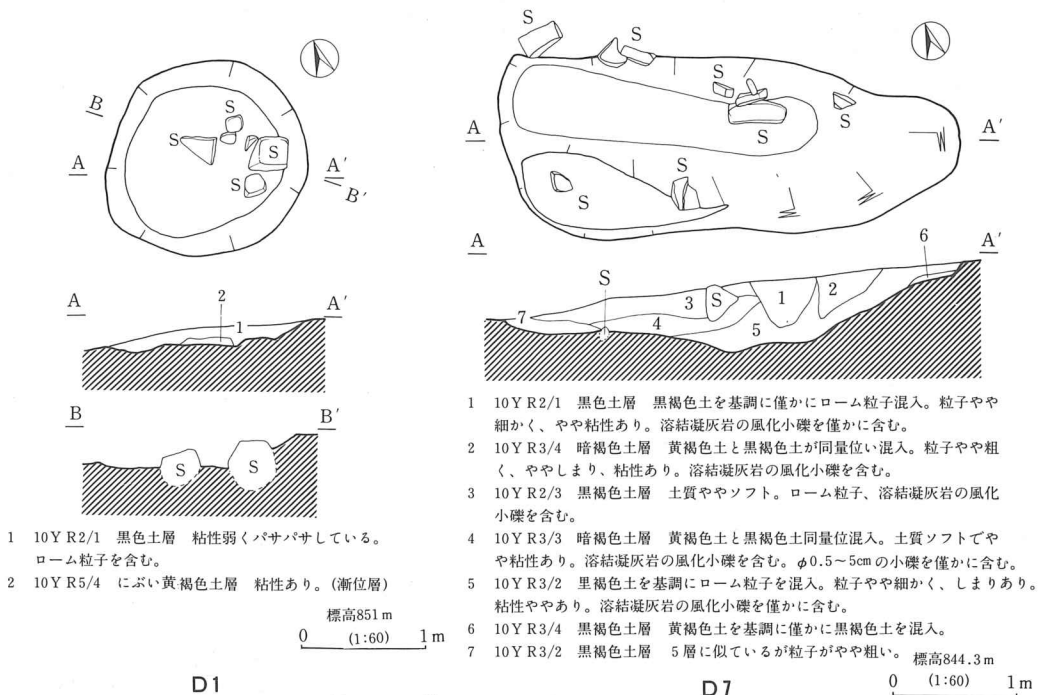
る。

覆土は2層に分割され、1層は黒色土層で、粘性弱く、ばさばさしており、ローム粒子を含んでいる。2層はにぶい黄褐色土層で粘性があり、漸位層かもしれない。遺物は出土しなかった。

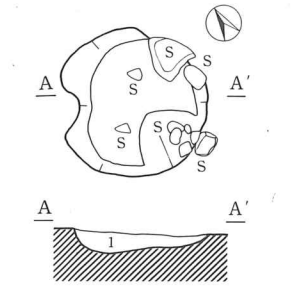
第2号土坑は、第1地区、あー6グリッド内より検出された。平面形態は、径105cmの西方に凹んだ円形を呈しており、溶結凝灰岩が多く露出している。断面は西方にやや深くなる浅鉢状で深さ15cmを測る。覆土は1層しか見られず、黒褐色土層で粒子粗く、ばさばさしており、ローム粒子を含んでいる。遺物は出土しなかった。

第3号土坑は、第1地区、うー9グリッド内より検出された。平面形態は長軸105cm、短軸79cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-33°-Eを示す。底面は3ヶ所深い掘り込みが認められ、中央の掘り込みが最も深く、約35cmを測る。覆土は3層に分割され、1層は黒色土層で粒子細かく、しまりがあり、ローム粒子を含む。2層はにぶい黄褐色土層で粒子細かく、しまりがあり、ローム粒子を含む。3層は明黄褐色土層で粒子細かく、しまりがあり、ローム粒子を含む。この堆積は自然堆積と考えられず人為堆積と思われる。遺物の出土はなかった。

第4号土坑は、第2地区、えー23グリッド内より検出された。平面形態は長軸156cm、短軸125cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-55°-Wを示す。断面形は西方にテラスを有し、底面凹凸とした、深さ10~15cmを測る掘り込みである。覆土は1層しか見られず、黒褐色土を基調にロー

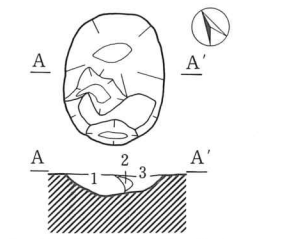


第28図 第1・7号土坑実測図



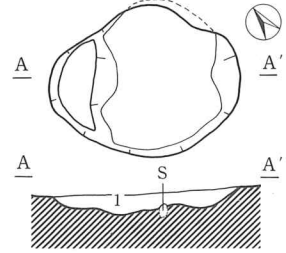
1 10Y R3/1 黒褐色土層 粒子粗く  
 パサパサしている。  
 ローム粒子含む。  
 標高844.9m  
 0 (1:60) 1m

D2



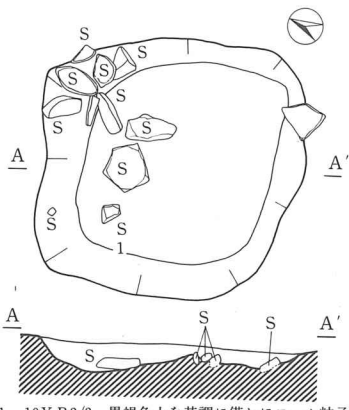
1 10Y R2/1 黒色土層 粒子細か  
 くしまりあり。ローム粒子を含む。  
 2 10Y R4/3 にぶい黄褐色土層  
 粒子細かくしまりあり。ローム粒子含む。  
 3 10Y R 6/6 明黄褐色土層 粒子細か  
 く、しまりあり。ローム粒子含む。  
 標高843.9m  
 0 (1:60) 1m

D 3



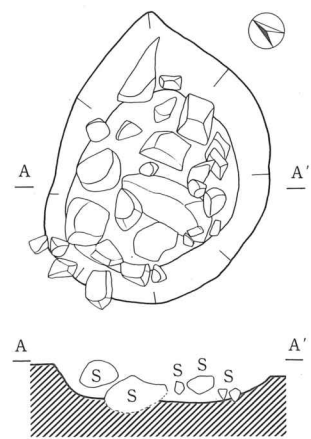
1 10Y R2/2 黒褐色土を基調にローム粒子  
 を含む。粒子粗く、やや粘性あり。溶結  
 凝灰岩の風化小礫を含む。φ1~5cmの小  
 礫僅かに含む。  
 標高845.2m  
 0 (1:60) 1m

D4



1 10Y R2/2 黒褐色土を基調に僅かにローム粒子混入。  
 粘性、ややしまりあり。溶結凝灰岩の風化小礫、  
 φ3~8cmの小礫を含む。  
 標高844.2m  
 0 (1:60) 1m

D5



標高844.3m  
 0 (1:60) 1m

D6

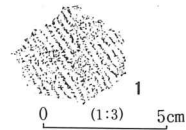
第29図 第2~6号土坑実測図

ム粒子を含み、粒子粗く、やや粘性がある。溶結凝灰岩の風化小礫・僅かにφ1~5cmの小礫を含んでいる。遺物の出土はなかった。

第5号土坑は、第2地区、う・え-26グリッド内より検出され、第1号溝状遺構を破壊して構築されていた。平面形態は一辺205cmの方形を呈し、多くの溶結凝灰岩を含んでいた。断面は北方が深く、南方に浅い掘り込みで、深さは10~25cmを測る。覆土は1層しかみられず、黒褐色土を基調に僅かにローム粒子を混入しており、粘性・ややしまりがある。溶結凝灰岩の風化小礫・φ3~8cmの小礫を含んでいる。遺物は、表面磨滅しているためはっきりしないが縄文が施文された小片が1点出土している。これは、流れ込みによるものの可能性が強い。

第6号土坑は、第2地区、い-26・27グリッド内より検出され、第2号溝状遺構を破壊して構

築されている。平面形態は長軸211cm、短軸166cmの東部に突出部を持つ楕円形を呈し、長軸方位はN-76°-Eを示す。断面形は、深さ20cmを測る、舟底型を呈し、土坑内にはぎっしり拳大から頭大の溶結凝灰岩がつまっていた。遺物は陶器の小片が1片出土している。



第30図 第7号土坑  
出土土器拓影図

第7号土坑は、第2地区、お-25・26グリッド内に検出された。平面形態は底辺137cm、長軸363cmの東方に尖んがりをもつ隅丸三角形を呈し、長軸方位はN-67°-Wを示す。断面形は南方にテラスを有し、大きく上方に開く逆台形を呈し、深さは55cmを測る。覆土は7層に分割され、1層は黒色土層で、黒褐色土を基調に僅かにローム粒子を混入しており、粒子やや細かく、ややしまりがある。溶結凝灰岩の風化小礫を僅かに含む。2層は暗褐色土層で黄褐色土と黒褐色土が同量位混入しており、粒子やや粗く、粘性・ややしまりがある。溶結凝灰岩の風化小礫を含む。3層は黒褐色土層で土質ややソフト、ローム粒子・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。4層は暗褐色土層で黄褐色土と黒褐色土が同量位混入しており、土質ソフトでやや粘性がある。溶結凝灰岩の風化小礫・僅かにφ0.5～5cmの小礫を含む。5層は黒褐色土層を基調にローム粒子を混入しており、粒子やや細かく、しまり・やや粘性あり、溶結凝灰岩の風化小礫を含む。6層は暗褐色土層で黄褐色土を基調に僅かに黒褐色土が混入している。7層は黒褐色土層で5層に似ているが粒子がやや粗い。遺物は、単節斜縄文の施文された小片が1点出土しているが、流れ込みによる可能性が強い。

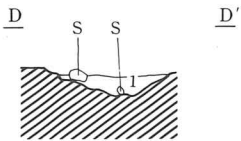
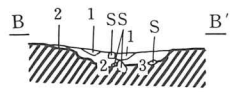
以上土坑について述べてきたが、遺物の出土がほとんどなく、その所産期・性格については不明である。

(高村)

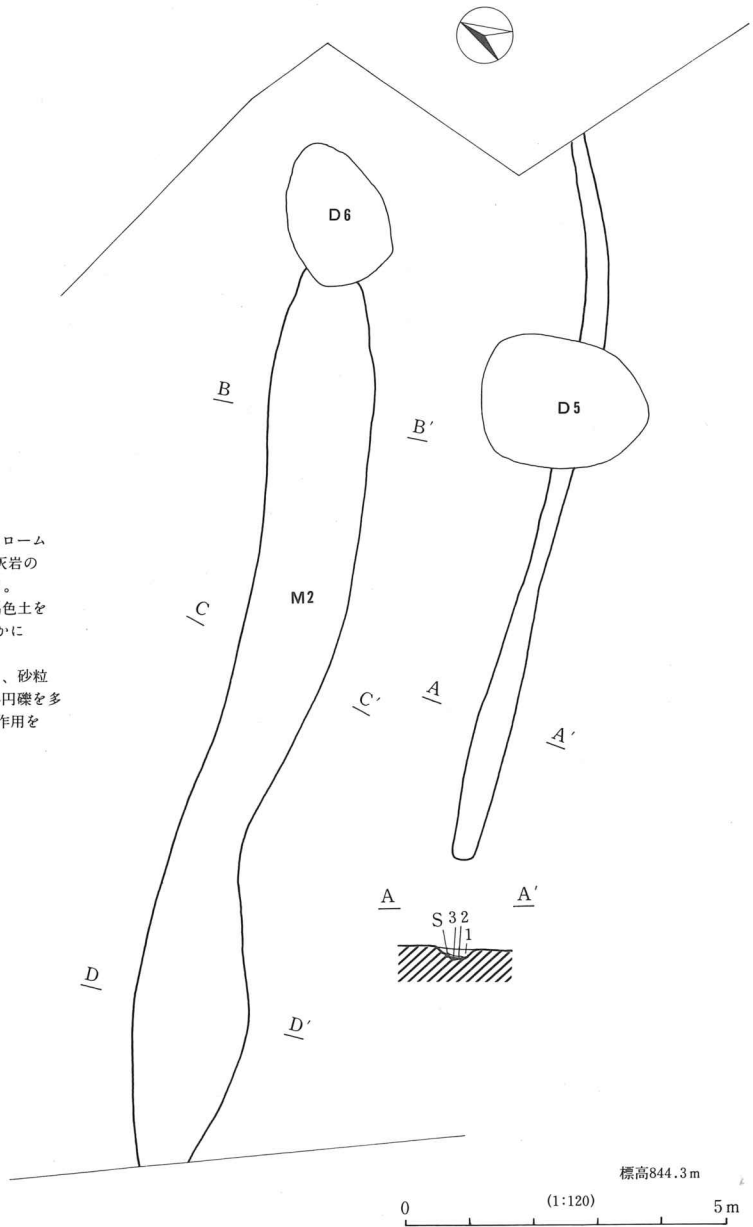
### 第3節 溝状遺構 (第31～33図、図版 十の8・十二の3)

西片ヶ上遺跡からは、第2地区において2基の溝状遺構が検出された。

第1号溝状遺構は、第2地区、う-25・26、え-26・27・28グリッド内において検出された。第5号土坑と重複関係にあり、D5により破壊されている。調査区の東方から西方に伸びており西方の端は消滅しているものの重機により削平されてしまったものと思われ、さらに西方に続いていると考えられる。検出長は11m50cm、幅22～60cmを測る。断面形は逆台形を呈しており、覆土は3層に分割された。1層は黒褐色土を基調に僅かにローム粒子が混入しており、φ2～5cmの小礫、溶結凝灰岩の亜角礫を含み、粘性・ややしまりある。2層はにぶい黄褐色土層で黄褐色土を基調に僅かに黒褐色土が混入しており、粘性僅かに、しまりがある。3層は灰黄褐色土層で粒子粗く、砂粒を基調にローム粒子・φ0.5～8cmの小円礫を多く混入しており、溶結凝灰岩の亜角礫と円磨作用を受けた礫を含んでいる。3層の土層状態から、この溝は水が流れた跡と思わ



- 1 10Y R2/3 黒褐色土を基調に僅かにローム粒子混入。φ2~5cmの小礫、溶結凝灰岩の垂角礫を含む。粘性・やしまりあり。
- 2 10Y R4/3 にぶい黄褐色土層 黄褐色土を基調に僅かに黒褐色土混入。粘性僅かにしまりあり。
- 3 10Y R4/2 灰黄褐色土層 粒子粗く、砂粒を基調にローム粒子・φ0.5~8cmの小円礫を多く混入。溶結凝灰岩の垂角礫と凹磨作用を受けた礫を含む。流水跡。



第31図 第1・2号溝状遺構実測図



れ何かの水路と考えられる。遺物は出土しなかった。

第2号溝状遺構は、第2地区、い—26・27、う—27・28・29、え—28・29内において検出された。第6号土坑と重複関係にあり、第6号土坑により破壊されている。この溝は第

1号溝状遺構と平行に走っており、第6号土坑から初まり西方に伸びている。検出長は、14m50cm、幅100~120cmと第1号溝状遺構より幅が広い。断面形は上部と中間と下部の3ヶ所で

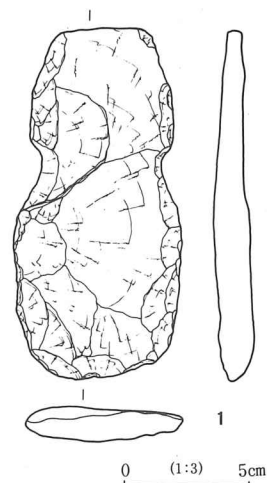
断面図をとったが、いずれも底面が凹凸で定形はみられなかった。覆土はBB'面で第1号溝状遺構と同様3層に分割されたが他のCC'面、DD'面、では1層しかみられなかった。溝の

上部BB'面では3層の砂粒を基調とした層が見られるため水の流れた跡と思われるが中間から下部には見られず、どう解釈してよいか不明である。遺物は単節斜縄文の施された深鉢の口縁部付近(32—1)、と玄武岩の分銅形打製石斧(33—1)が出土しているが流れ込みによる可能性が強い。

(高村)



第32図 第2号溝状遺構出土土器拓影図

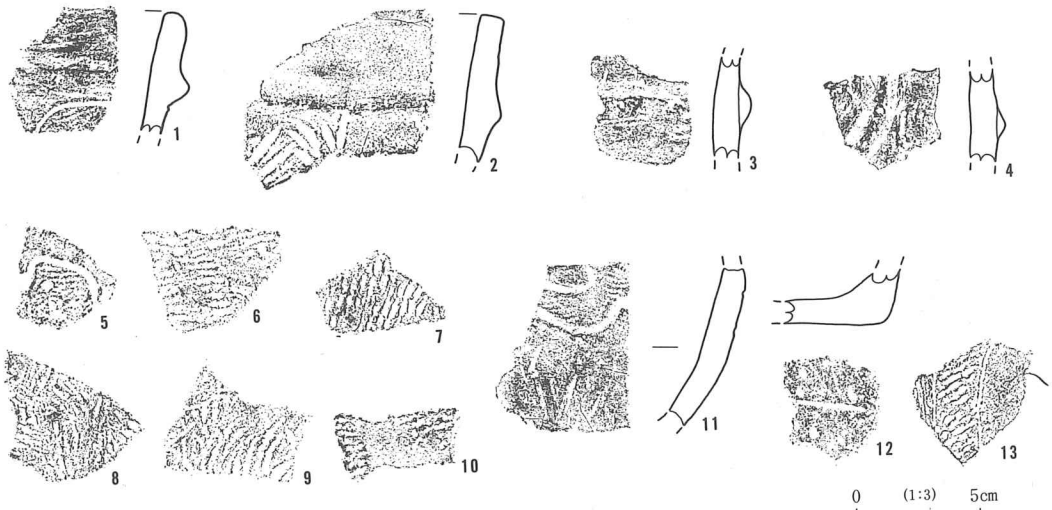


第33図 第2号溝状遺構出土土器実測図

#### 第4節 耕作土出土遺物 (第34・35図、図版十二の4)

本遺跡の第1地区東側は、黒色の落ち込みが全面にわたって見られたため、調査区の北面に沿ってトレンチを入れてみた。その結果、第三章第1節基本層序で触れたように、田にするための埋土の土層であることが確認できたのであるが、そのトレンチ内より縄文土器・土師器・須恵器・陶器が出土した。

縄文土器は多く出土しており、そのうち無文土器が多数を占めている。第34図の拓影した土器のほとんどは深鉢と考えられ、34—1は口縁部の破片で、凸帯を一帶有し、磨消縄文がみられ、沈線で区画し、その中に縄文を残す。34—2は口縁部の破片で、凸帯を一帶有し、縦の沈線で区画し、綾杉文が施されており、曾利系の土器である。34—4は胴部破片で曲線を描く凸帯が観察できる。34—6~10は胴部破片で縄文が施文されている。34—11は胴下部の破片で、磨消し縄文がみられ、胴下部まで文様区割が施されており、称名寺式の古い様相を示している<sup>(1)</sup>。34—12は木葉痕のある底部である。これらの土器のうち34—2・4は縄文時代中期の土器片で、34—1・5・11は後期初頭の土器片と考えられる<sup>(2)</sup>。土師器には、武蔵系の薄手長胴甕の口縁部片と胴部片、内



第34図 第1地区耕作土出土土器拓影図

面黒色研磨の坏口縁部片等がある。

須恵器は内外面タタキ目の見られない大甕の破片が出土している。陶器には染付茶碗と新しい播鉢が出土している。

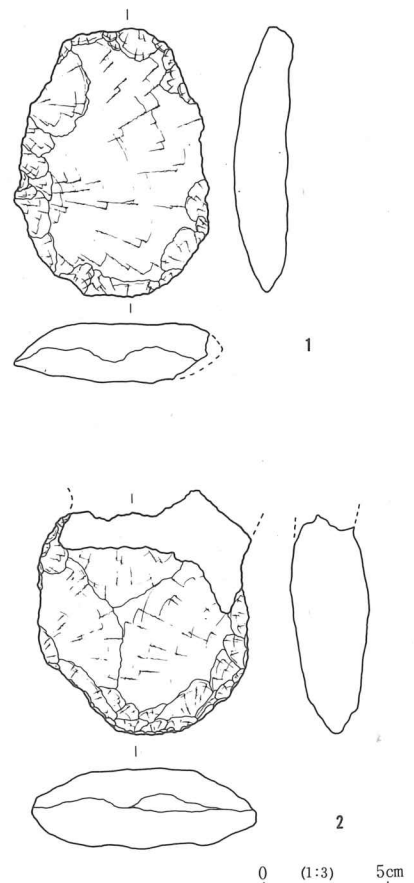
石器には、35—1の未成品の打製石器があり、玄武岩質である。長さ10.7cm、幅7.7cm、厚さ2.1cmを測る。正面は周縁に粗い剥離を施してあり、裏面は主要剥離を多く残し周縁には、二・三ヶ所に粗い剥離が施されているだけである。35—2は基部半分を欠損する玄武岩質の打製石斧である。半分は欠損するが左右側縁にくびれを有し、分銅形を呈すると考えられる。正面は粗い剥離の後、周辺に細かな剥離が施されている。刃部は下側縁で円刃形態を呈し、細かい刃こぼれと使用による磨耗が著しい。裏面も正面同様の加工が施されるが中央に自然面を残している。

以上、耕作土出土遺物について述べてきたが、縄文土器・土師器・須恵器などから周辺に縄文時代中期～後期初頭、平安時代の遺構の存在が十分予想できる。

(高村)

註1 平林彰・綿田弘美・三上徹也氏の御教示による。

註2 註1と同じ。



第35図 耕作土出土石器実測図

## 第七章 曲尾Ⅲ遺跡

### 第1節 竪穴住居址

#### 1) 第1号住居址

遺構 (第36・37図、図版十五・十六)

本住居址は調査区第1地区中央北側、緩やかな尾根が、香坂川に落ちる、南斜面上に構築され、お・か—5グリッド内に位置する。尚、本住居址は傾斜面上の構築のため、略北半分は黄褐色ローム層を掘り込んであるが、南側は黒褐色土層を掘り込んでおり、確認の際、余儀なく上面を破壊し、南側は床面と壁溝を留めるのみであった。

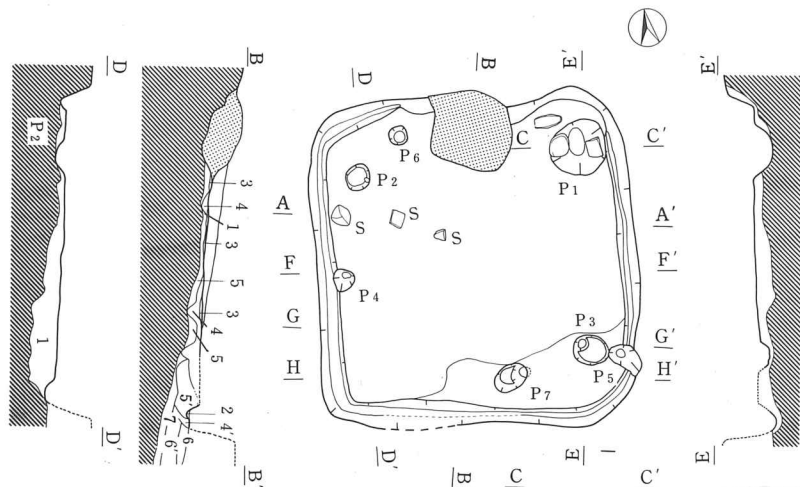
平面形態は、南北350cm、東西340cmを測り、北壁長325cm、南壁長345cm、東壁長360cm、西壁長340cmの隅丸方形を呈し、長軸方位はN—12°—Eを示す。

覆土は7層に分割でき、1層はローム粒子僅、溶結凝灰岩の風化小礫を含み、土質は粘性を有す。2層は壁溝中の堆積で黒褐色土で、土質はしまりない。3層は床面と考えられ、僅かに炭化物・焼土を含み、土質は堅く、しまり、粘性を有し、1～3層は自然堆積である。4～5層は床面下の堆積状態で、掘り方から床面を平坦面にするための人為堆積土層である。人為堆積の順序は4'→5'→5→4層であり、4層は黒褐色土を基調にローム粒子、溶結凝灰岩の風化小礫混、粒子粗い。4'層は黒褐色土で6・6'層の影響を受け、4層より黒褐色土を多量に含み、粒子もやや細かい。5層はにぶい黄褐色土で、僅かに黒褐色土混、土質はソフトである。5'層は5層に類似しているが、土質はやや粘性を有す。以上のことから、傾斜面上に住居址を構築するにあたり、全面を掘り窪めず、ある程度床面を平坦にするため、計画性と省力化が4～5'層の堆積状態から窺われる。また、6～7層は傾斜面から窪地に至る自然堆積状態を示している。

壁残高は0～26cmを測り、残存部分では緩やかな傾斜で立ち上がり、壁体は堅固であった。壁溝は幅8～17cm、深さ3.5～10cmを測り、北東コーナーから東壁・南壁・西壁・北西コーナーにかけて巡らされ、断面形は「U」字状である。

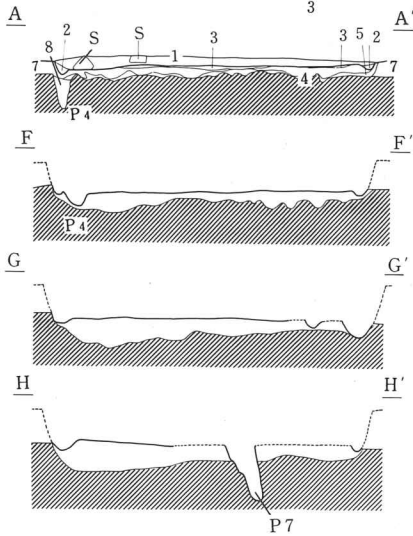
床面は僅かに南に傾斜をもつ平坦面で堅固であり、特にカマド焚口周辺では僅かに土が盛り上がり堅固であった。

ピットは計7個検出された。そのうち柱穴と考えられるのはP2・P3・P4・P5・P7の5個で、



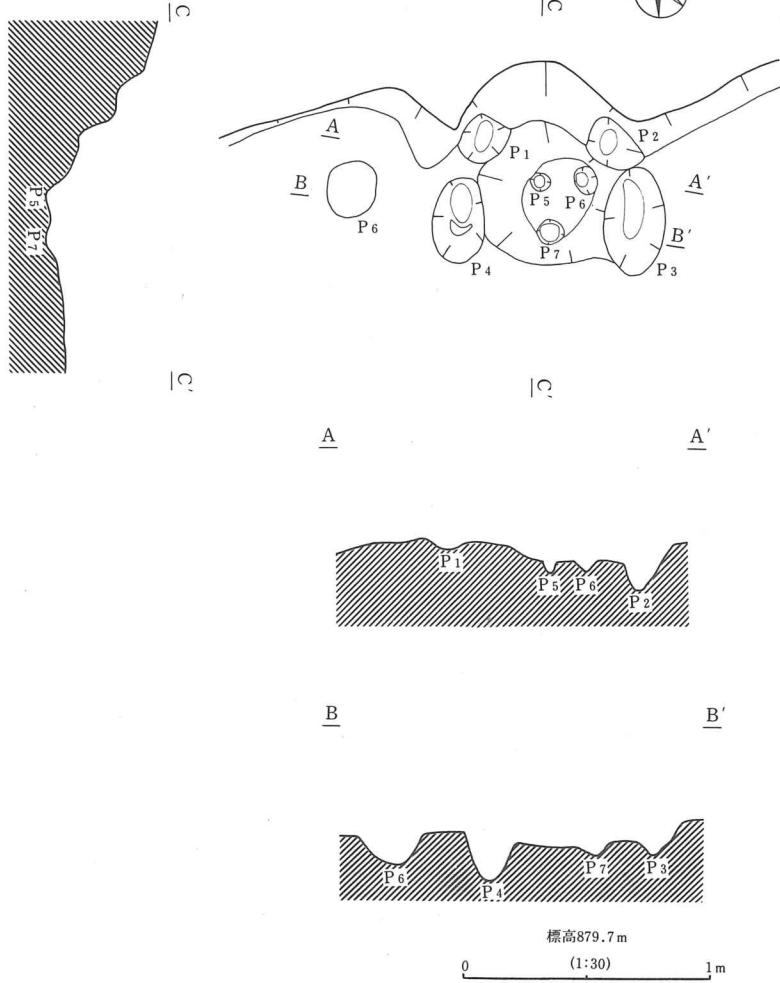
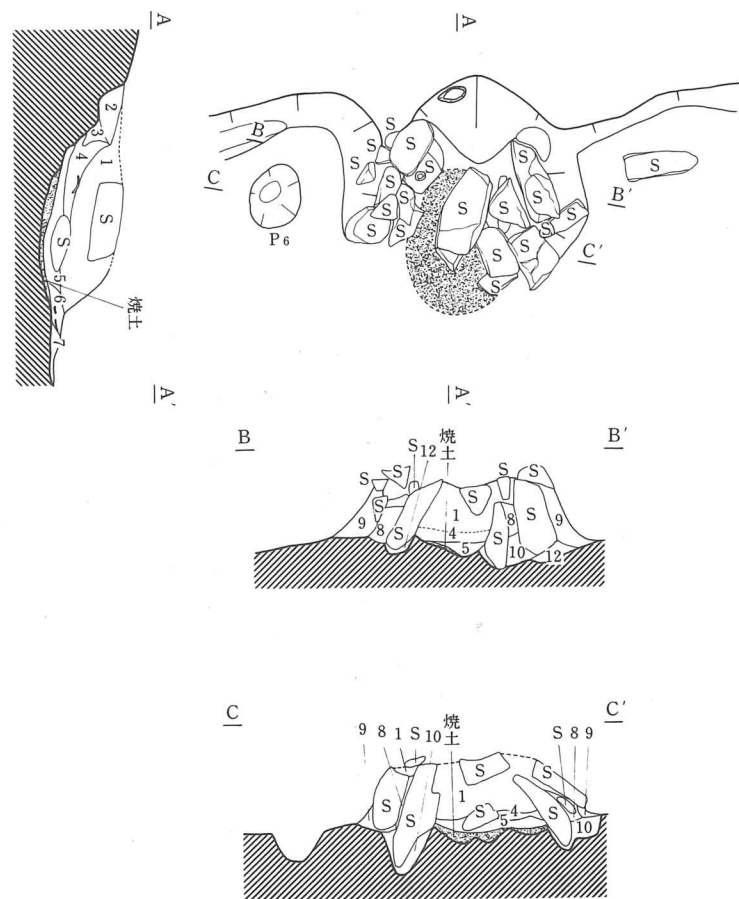
- P1土層説明**
- 1 7.5Y R3/1 黒褐色土層 粒子細かく、粘性あり。炭化物・焼土を含む。
  - 2 7.5Y R4/3 褐色土層 粒子粗く、ローム粒子、溶結凝灰岩の風化小礫僅かに含む。
  - 3 5Y R4/2 灰褐色土層 焼土・ローム粒子・炭化物・溶結凝灰岩の風化小礫僅かに含む。僅かに灰を含む。

- 1 10Y R2/1 黒色土層 粘性あり。ローム粒子僅かに・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 2 10Y R3/2 黒褐色土層 ややしまりなし。溶結凝灰岩の風化小礫僅かにローム粒子を含む。
- 3 10Y R2/2 黒褐色土層 かたくしまり、粘性ややあり。炭化物・僅かに焼土・溶結凝灰岩の風化小礫僅かに含む。
- 4 10Y R3/2 黒褐色土を基調にローム粒子・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。粒子粗い。
- 4' 10Y R2/3 黒褐色土層 4層より黒褐色土を多量に含み、粒子もやや細くなる。
- 5 10Y R4/3 にぶい黄褐色土を基調に黒褐色土僅かに混入。ばさばさしている。ローム粒子多量に・溶結凝灰岩の風化小礫僅かに含む。
- 5' 10Y R3/3 暗褐色土層 5層より黒褐色土が多量になり、含有物は同じ。やや粘性をおびる。
- 6 10Y R3/1 黒褐色土層 住居址構築当時の表土と思われる。粒子密でやや粘性あり。溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 6' 10Y R3/4 暗褐色土層 6層より黒褐色土を多量に含み、φ2~5cmの小礫を含む。
- 7 10Y R4/6 褐色土層 やや粘性あり。僅かに黒褐色土を含み、ローム層に至る漸位層。
- 8 10Y R4/4 褐色土層 4層に類似するが粒子粗く、ばさばさしており、ローム粒子・黒褐色土・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。(P-4)



標高879.7m  
0 (1:80) 2m

第36図第1号住居址実測図



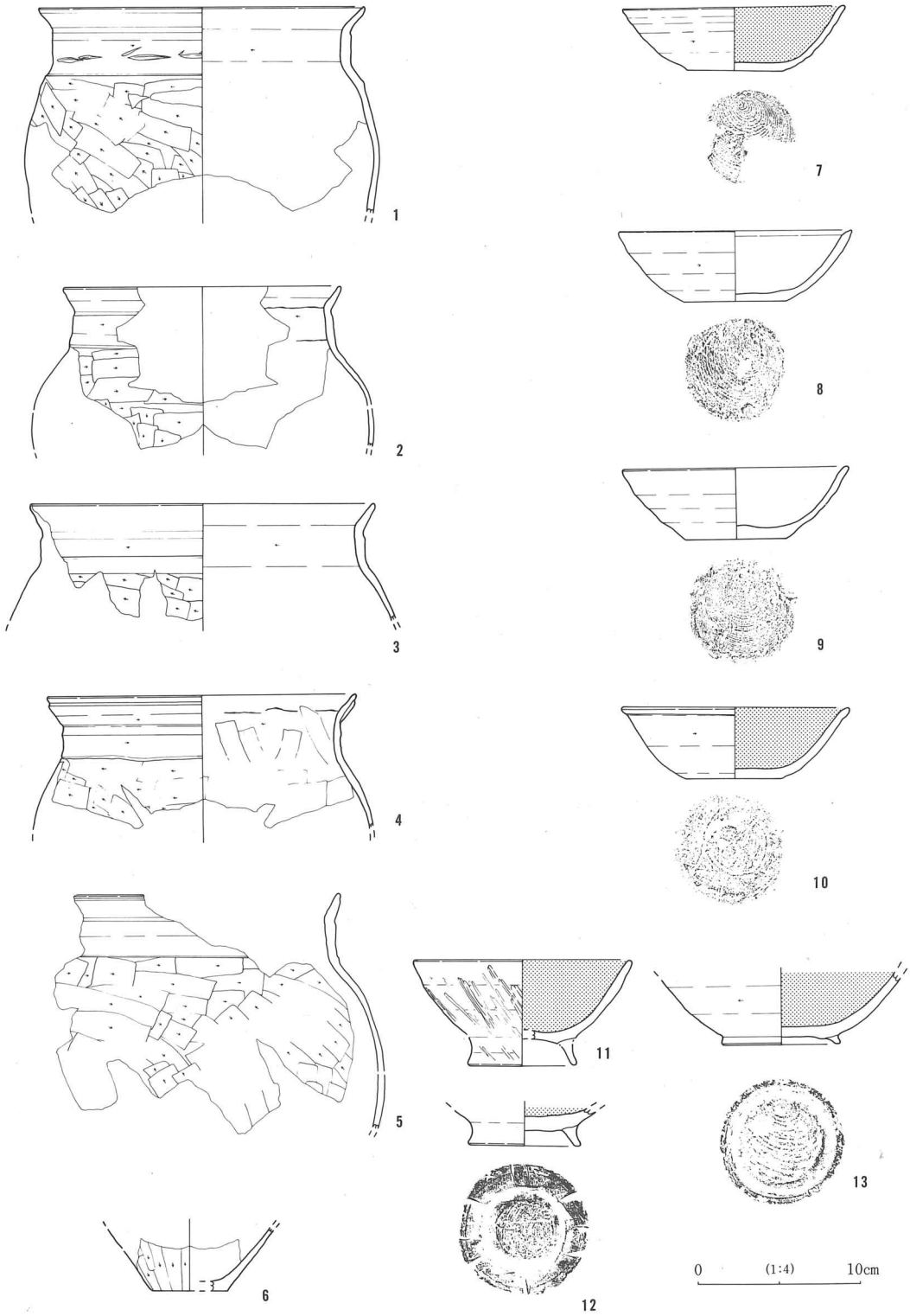
- 1 7.5YR2/3 極暗褐色土層 やや粘性あり。僅かに焼土・ローム粒子・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。
- 2 7.5YR4/4 褐色土層 ローム粒子多量に・黒褐色土・炭化物僅かに含む。
- 3 10YR4/6 にぶい黄褐色土層 ローム粒子ブロック状に含む。
- 4 7.5YR4/3 褐色土層 粒子粗く、ローム粒子多量に・焼土僅かに含む。
- 5 5YR3/4 暗赤褐色土層 焼土多量に・炭化物を含む。
- 6 10YR3/4 暗褐色土層 粒子細かく・粘性あり(粘土ブロック) 僅かに焼土を含む。
- 7 10YR3/2 黒褐色土層 床面か? しまりあり、僅かにローム粒子を含む。
- 8 5YR3/4 暗赤褐色土層 焼土多量に含む。
- 9 10YR3/2 黒褐色土層 僅かにローム粒子・粘土を含む。(カマド袖石補強土)
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色土層 ローム粒子多量に含む。
- 11 2.5YR5/8 明赤褐色土層 ローム層が火熱を受けて赤褐色に変色(火床)
- 12 10YR2/1 黒色土層 粒子細かく粘性あり。

第37図 第1号住居址カマド実測図

P7は入口の施設に伴う柱穴とも考えられる。P2は26×30cmの楕円形を呈し、深さ12cmを測り、覆土は暗褐色土で、ローム粒子・焼土を含み、やや粘性を有する。P3は34×48cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測り、覆土は褐色土で、ローム粒子・黒褐色土・溶結凝灰岩の風化小礫を含み、土質は粒子粗く、ソフトである。P5は20×40cmの不定形であり、深さ15cmを測り、覆土は暗褐色土である。各々の位置は、P2は北西コーナー壁下30cm隔てた位置、P3は南西コーナー壁下25cm隔てた位置、P4は西壁中央で、P5は南西コーナー壁中で検出された。P7は南壁中央より15cm隔てた位置で検出され、25×38cmの楕円形を呈し、深さ55cmを測り、中位でテラスを有し、軸が南西に傾いている状態で検出された。覆土は2層に分割され、中位テラスの所で、下層は黒色土層、粒子細かく、粘性がある。上層は黒褐色土で、ローム粒子混、粒子粗い。その他に性格を異にするP1が北東コーナーで検出された。P1は略60cmの円形を呈し、深さ22cmを測る、擂鉢形であり、東西に1個づつ円磨作用を受けた、扁平な垂角礫の溶結凝灰岩が、逆「ハ」の字状に向き合う形で設置されていた。覆土は3層に分割され、1層は黒褐色土層で、炭化物・焼土を含み、土質は粒子細かく、粘性を有する。2層は褐色土層で、ローム粒子・溶結凝灰岩の風化小礫を含み、粒子粗い。3層はにぶい黒褐色土で、焼土・ローム粒子・溶結凝灰岩の風化小礫が混、僅かに炭化物・灰を含む。P1は灰の堆積が少ないこと、二個の石の配置等から灰落しとは考えにくく、カマドの補助的機能として用いられたとも考えられる。また、P6は略20cmの円形で深さ15cmを測るが、性格を判明するには至らなかった。

カマドは北壁中央と床面を掘り込み構築されていた。残存状態は天井部は崩落しているが、他は略良好である。規模は主軸95cm、袖部幅98cmを測り、主軸方位N-26°-Eを示す。煙道部は北壁中央を緩い山形状に掘り込み、カマド奥壁に添って、段を有した緩やかな傾斜で立ち上がる。袖部は20個近い、垂角礫の溶結凝灰岩で構築され、補強土として、カマドセクション図9層、ローム粒子、粘土を含む黒褐色土で、袖部を覆ったと考えられる。袖部石の配置状態は、左右二列に石を配し、略平行に石の傾斜は左右「ハ」の字状に向き合うように、左側で18cm、右側で15cmローム面を掘り込み、左袖石は12層で固定され、右袖石は10層で固定されており、左右二列の石の間には8層の焼土を含む暗赤褐色土層が堆積していた。器設部は旧状を留めていないが、18×35cmの扁平な垂角礫の溶結凝灰岩が天井石（かまち石）と考えられる。支脚石は検出されなかったが、カマド掘り方の火床面下中央の3個の凹跡が、支脚石の埋まっていた痕跡とも考えられる。火床面の範囲は42×57cmの楕円形を呈し、深さ5cmを測り、11層明赤褐色土層である。

遺物の分布は甕38—1・2・3・4・5はカマド内より出土、甕38—2はカマド焚口から南西50cmの位置で出土、他の甕破片は略カマド内より出土、坏38—7は略床面中央、38—8・9・10・13はカマド内より出土、38—12は南西コーナー北側に位置する。以上のことから、甕・坏の出土はカマド内に集中する傾向が看取できる。



第38图 第1号住居址出土土器实测图



第6表 曲尾Ⅲ遺跡第1号住居址出土土器観察表

挿 番 号	器 種	法 量	成 形 及 び 器 形 の 特 徴	調 整	備 考
38-1	甗	20.0 (12.5) —	頸部～口辺部にかけて「コ」の字状に外反する。最大径胴上部に有す。	内) 頸部～口辺部ヨコナデ、胴部ナデ調整。 外) 頸部～口辺部ヨコナデ、胴上部横位～斜位ヘラケズリ。	回転実測B。 カマド内。 内外面煤付着。
38-2	甗	(16.8) (9.8) —	頸部～口辺部にかけて「コ」の字状に外反する。最大径胴上部に有す。	内) 頸部～口辺部ヨコナデ、胴部ナデ調整。 外) 頸部～口辺部ヨコナデ、胴上部横位ヘラケズリ、胴中央部縦位ヘラケズリ。	回転実測B。 カマド、P1内。外面口縁部僅かに煤付着。
38-3	甗	(20.8) (7.0) —	頸部～口辺部にかけて「コ」の字状に外反する。	内) 頸部～口辺部ヨコナデ 外) 頸部～口辺部ヨコナデ、胴上部横位ヘラケズリ。	回転実測B。 カマド内。外面口縁部僅かに煤付着。
38-4	甗	(18.8) (8.0) —	頸部～口辺部にかけて「コ」の字状に外反する。口唇部に一条の沈線がめぐらされている。最大径胴上部に有す。	内) 頸部～口辺部ヨコナデ、胴部ナデ調整。 外) 頸部～口辺部ヨコナデ、胴上部横位ヘラケズリ。	回転実測B。 No 3.11。 外面煤付着。
38-5	甗	(18.6) (14.3) —	頸部～口辺部にかけて「コ」の字状に外反する。口唇部に一条の沈線がめぐらされている。最大径胴上部に有す。	内) 頸部～口辺部ヨコナデ、胴部ナデ調整。 外) 頸部～口辺部ヨコナデ、胴上部横位～斜位ヘラケズリ。	破片実測A。No3.11。 カマド、38-4と接合関係可能性有す。外面煤付着、剝離著しい。内面胴部僅かに煤付着。
38-6	甗	— (3.9) 4.6		内) ナデ調整。 外) 胴下部縦位ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	回転実測A。 カマド内。外面底部僅かに煤付着。
38-7	坏	13.6 3.9 5.8	体部内弯外傾、端部僅かに外反。	内) 黒色研磨。 外) ロクロヨコナデ、底部回転糸切り。	完全実測。 No 5.6.7。 胎土、明褐色。
38-8	坏	(14.2) 4.3 6.2	体部内弯外傾、端部内稜有す。	内) ヘラミガキ。 外) ロクロヨコナデ、底部回転糸切り。	回転実測B。 カマド内。 胎土、明褐色。
38-9	坏	(13.8) 4.3 6.2	体部内弯外傾、端部僅かに外反。底部内面中央凸気味。	内) ヘラミガキ。 外) ロクロヨコナデ、底部回転糸切り。	回転実測B。 カマド内。 胎土、明褐色。
38-10	坏	13.9 4.3 6.0	体部内弯外傾、端部僅かに外反し稜を有す。器肉厚い。	内) 黒色研磨。 外) ロクロヨコナデ、底部回転糸切り(離し糸切り)の後ナデ調整。	完全実測。カマド内。 胎土、黄褐色、石英、輝石、雲母含。
38-11	坏	(12.4) 6.4 (6.4)	貼付高台、体部内弯外傾、口辺部器肉厚い。	内) 黒色研磨。 外) 体部丁寧な斜位ヘラミガキ、底部回転糸切り。	回転実測B。カマド内 胎土、黄褐色、石英、輝石、雲母含。
38-12	坏	— (2.2) 6.8	貼付高台	内) 黒色研磨。 外) ロクロヨコナデ、底部回転糸切り。	回転実測B。 No 2。 胎土にぶい褐色。
38-13	坏	— (4.0) 7.2	貼付高台	内) 黒色研磨。 外) ロクロヨコナデ、底部回転糸切り。	回転実測A。カマド内 内面剝離著しい。 胎土、明褐色。

遺物 (第38図、図版十九)

本住居址からは土師器坏・甗のみが出土した。このうち13点を図化した。

甗については頸部から口辺部にかけて「コ」の字状に外反しているものが総てである(38-1・2・3・4・5)。口縁端部に2つの形態がみいだされ、外面に沈線のあるもの(38-4・5)ないもの(38-1・2・3)があり、他の口縁部破片にも同じ区別ができる。このことは製作者の癖なのか、地域差なのか、時間差なのか、今後の研究にまかせたい。また、いずれも頸部～口縁部にかけて、「コ」の字状に外反する変換点を1単位とした粘土帯で成形されており、接合部はヘラによって引き締めてあり、凹状に糸をなしている。調整は内面口縁～頸部にかけてヨコナデ、胴

部ナデ調整、外面口縁～頸部ヨコナデ、胴上部から中央部にかけて、横位から斜位のヘラケズリに変化していき、胴下部は縦位のヘラケズリが行なわれていたと考えられる。尚、最大径はいずれも胴上部に位置する。

坏については平底（38—7・8・9・10）と高台付坏（38—11・12・13）の2タイプに分かれ、平底坏をさらに細分すると、内面黒色研磨の施された（38—7・10）、内面ヘラミガキの施された（38—8・9）がある。いずれも底部回転糸切りであるが、38—10は回転糸切りのうちの離し糸切りである。尚、38—10は38—7・8・9の胎土明褐色とは異なり黄褐色であり、器肉も厚く石英・輝石・雲母が含まれていることから製作地の違いが感じられる。高台付坏についても細分してみると、いずれも内面黒色研磨で回転糸切りの後、付け高台であるが、高台部の長い38—11・12と短い38—13に分かれる。尚、38—11は調整について他の坏とは異質であり、胎土は、38—10に類似性が認められ、外面調整は他の坏はロクロヨコナデを行うだけであるのに、ロクロヨコナデの後、体部横位のヘラケズリを行い、その後斜位の丁寧なヘラミガキが施されていることから系譜の異なる高台付坏と考えられ、出土例の増加を待って後述したい。

尚、本住居址において須恵器及び須恵器片が1つも出土していないことは特筆され、この住居址の一つの性格を知る手掛りになるとも考えられる。

以上、本住居址出土の甕の口縁部が明確な「コ」の字条口縁になることと坏の内面黒色処理が粗雑化し、処理のなされない坏が存在することなどから、一応、所産期は9世紀中葉～10世紀初頭と考えられる。  
(羽毛田伸)

## 第2節 土 坑 (第39・40図、図版十七)

本遺跡からは、土坑が9基検出されている。第1地区に7基、第2地区に2基と第1地区に多くみられる。

第1号土坑は、第1地区、えー6グリッド内に位置し、長軸155cm、短軸114cmの不整楕円形を呈する。長軸方位はN—46°—Wを示し、深さ60cmを測る。断面形は上方に広がった「U」字形を呈する。覆土は2層に分割され、自然堆積と思われる。1層は黒色土層で粘性があり、黄色パミスを多量に含んでいる。底面には2ヶ所の窪地があり、遺物は出土していない。

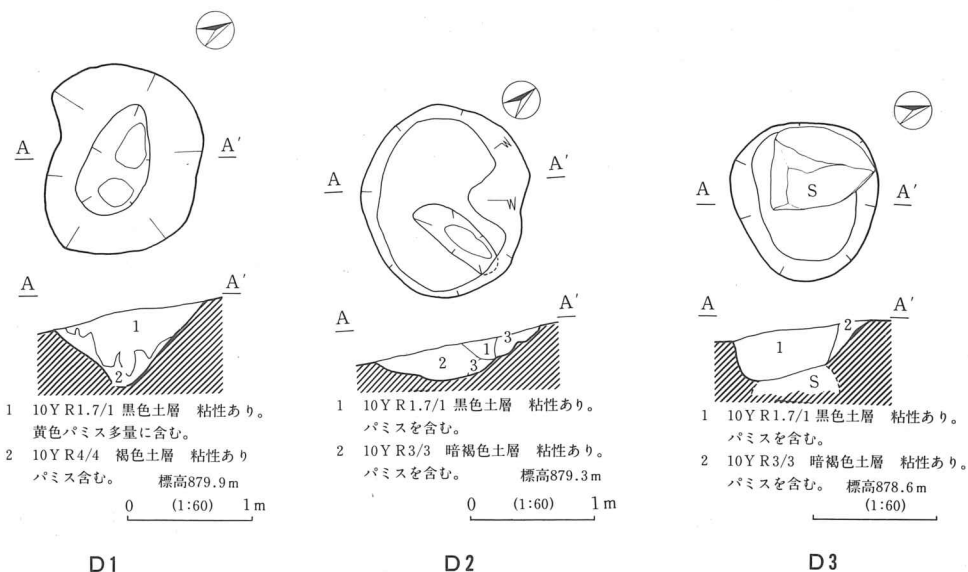
第2号土坑は、第1地区、おー6グリッド内に位置し、長軸155cm、短軸128cmの楕円形を呈する。長軸方位はN—48°—Wを示し、深さ27cmを測る。断面形は浅い舟底型を呈する。覆土は3層に分割される。1層は粘性のやや弱い黒褐色土層で、2層は同じく黒褐色土層であるが、粘性があり、ローム粒子・パミスを含む。3層はにぶい黄褐色土層で、粘性があり、パミスを含む。遺物の出土はなかった。

第3号土坑は、第1地区、きー4グリッド内に位置し、長軸126cm、短軸112cmの楕円形を呈する。長軸方位はN-74°-Wを示し、深さ40cmを測る。断面形は逆台形状に落ち込んでおり、土坑の西側半分位いまで大きな岩が存在している。覆土は2層に分割され、1層は黒色土層で粘性があり、パミスを含む。2層は暗褐色土層で粘性があり、パミスを含む。遺物の出土はなかった。

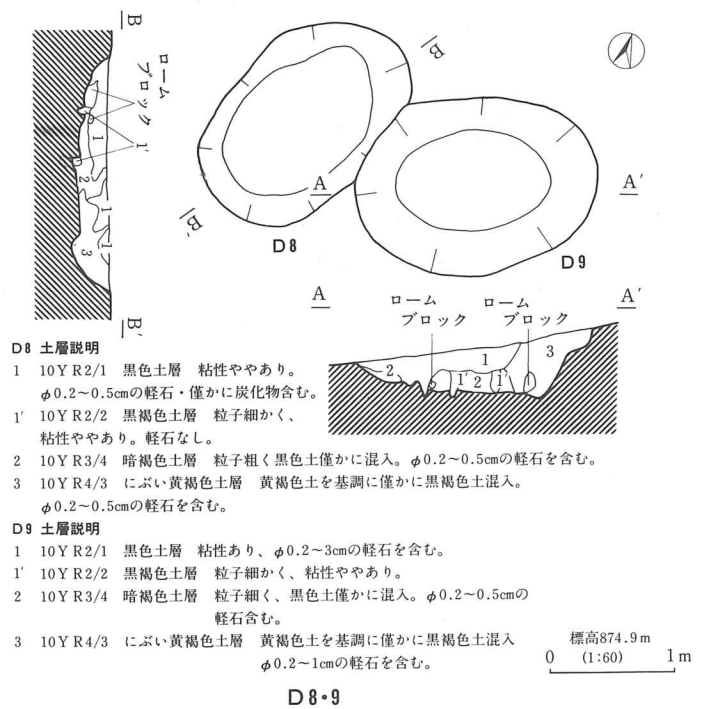
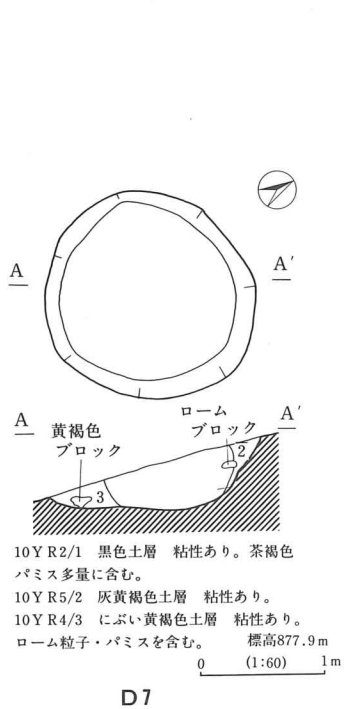
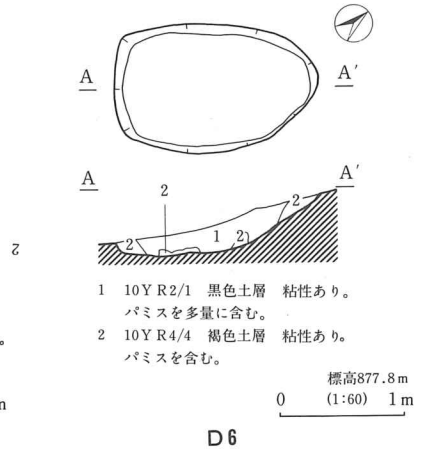
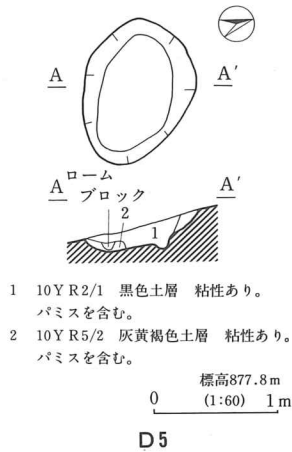
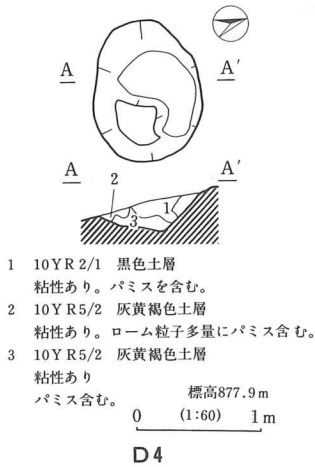
第4号土坑は、第1地区、きー6グリッド内に位置し、長軸115cm、短軸84cmの楕円形を呈する。長軸方位はN-70°-Wを示し、深さ24cmを測る。東側に一段のテラスを有し、北側が高い傾斜面に構築されている。断面形は浅い浅鉢状を呈している。覆土は3層に分割され、1層は黒色土層で粘性があり、パミスを含む。2層は灰黄褐色土層で粘性があり、ローム粒子を多量・パミスを含んでいる。3層は灰黄褐色土層で粘性があり、パミスを含んでいる。遺物の出土はなかった。

第5号土坑は、第1地区、きー7グリッド内に位置し、北側が高い傾斜面に構築されている。平面形態は、長軸117cm、短軸87cmの楕円形を呈し、長軸方位N-59°-Wを示す。深さ15cmで浅い舟底型の断面形を呈す。覆土は2層に分割され、1層は黒色土層で粘性があり、パミスを含む。2層は灰褐色土層で粘性があり、パミスを含む。遺物の出土はなかった。

第6号土坑は、第1地区、か・きー8グリッド内に位置し、北側が高い傾斜面に構築されている。平面形態は、長軸161cm、短軸103cmの南西方向にやや角張る楕円形を呈し、長軸方位はN-43°-Eを示す。断面形は、深さ21cmの浅い舟底型を呈する。覆土は2層に分割され、1層は黒色土層で粘性があり、パミスを多量に含んで土坑の大部分を充填している。2層は褐色土層で粘性があり、パミスを含む。遺物の出土はなく、その時期・性格は不明である。



第39図 第1～3号土坑実測図

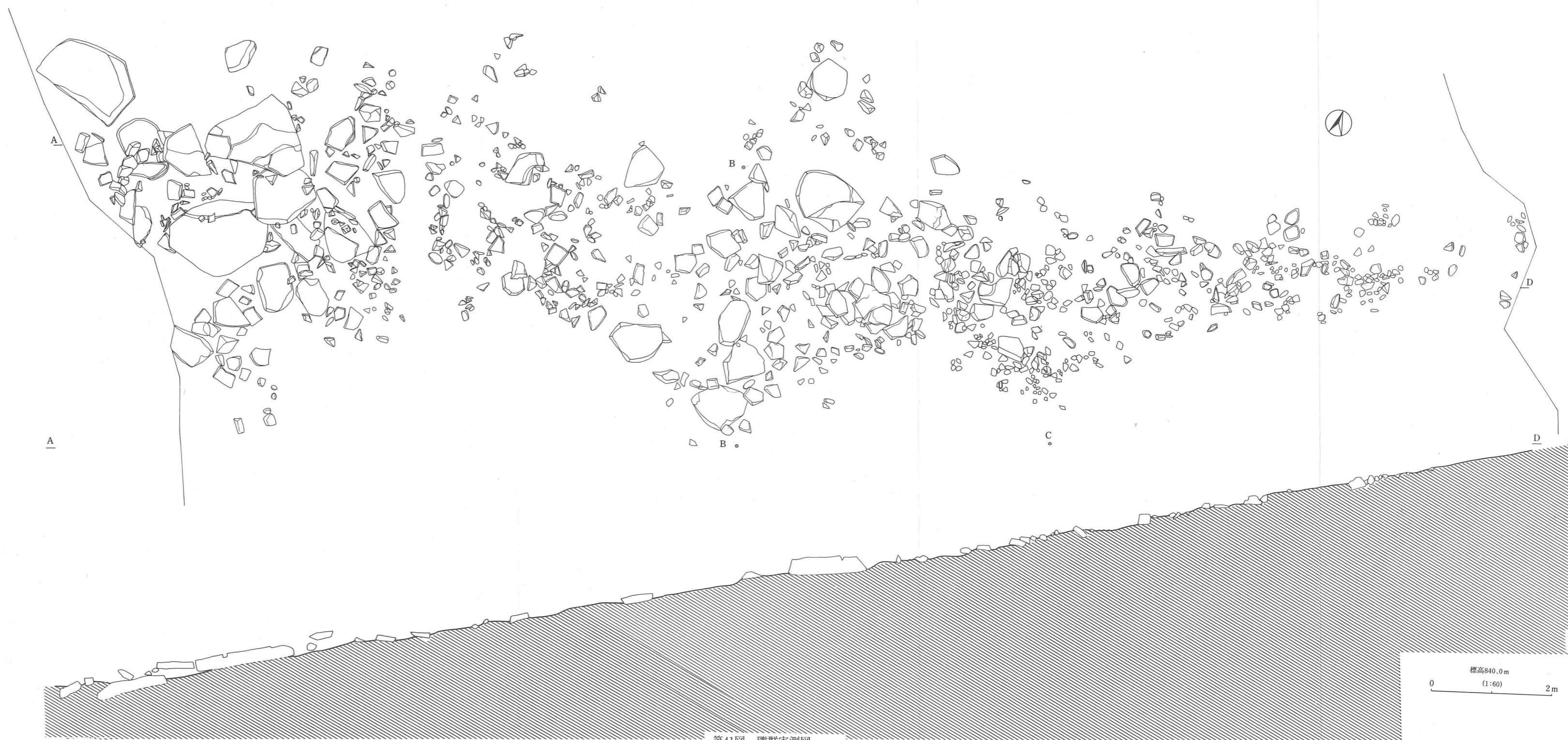


第40図 第4~9号土坑実測図

第7号土坑は、第1地区、かー7グリッド内に位置し、北側に高い傾斜地に構築されている。平面形態は、径170 cmの円形を呈し、断面形は深さ43cmの舟底型を呈する。覆土は3層に分割され、1層は黒色土層で粘性があり、茶褐色パミスを多量に含む。2層は灰黄褐色土層で粘性がある。3層はにぶい黄褐色土層で粘性があり、ローム粒子・パミスを含む。遺物の出土はなかった。

第8号土坑は、第2地区、かー13グリッド内に位置し、第9号土坑と重複関係にあり、第9号土坑により西側部分の一部を破壊されている。平面形態は、長軸189cm、短軸120cmの楕円形を





第41図 磔群実測図

呈し、長軸方位はN—29°—Eを示す。断面形は、深さ25cmの舟底型を呈す。覆土は3層に分割され、1層は黒色土層で粘性ややあり、 $\phi$  0.2~0.5cmの軽石と僅かに炭化物を含む。2層は暗褐色土層で粒子粗く黒色土が僅かに混入している。 $\phi$  0.2 ~ 2 cmの軽石を含んでいる。遺物の出土はなかった。

第9号土坑は、第2地区、か—13グリッド内に位置し、第8号土坑の一部を破壊して構築されている。平面形態は長軸194cm、短軸140cmの楕円形を呈し、長軸方位はN—73°—Eを示す。断面形は、深さ37cmの舟底型を呈する。覆土は3層分割され、1層は黒色土層で粘性があり、 $\phi$  0.2 ~ 3 cmの軽石を含む。1'層は黒褐色土層で、粒子細かく、粘性がややある。2層は暗褐色土層で粒子粗く、黒色土僅かに混入している。 $\phi$  0.2 ~ 0.5 cmの軽石を含む。3層はにぶい黄褐色土層で黄褐色土を基調に僅かに黒褐色土が混入しており、 $\phi$  0.2 ~ 1 cmの軽石を含んでいる。遺物の出土はなかった。

以上、9基の土坑について述べてきたが、遺物の出土が皆無であることや、土坑の形態等にはっきりした共通性もみられず、その所産期及び性格について言及することができない。(高村)

### 第3節 礫群 (第41図、図版十八の1~3)

本礫群は、第2地区、い—12・13、う—13~15、え—13~17、お—14~17、か—16グリッド内より検出された。平面形態は北東の傾斜地上面から蛇行しながら南西の沢地の方向へ伸びており、検出長は23m50cm、最大幅6m、最小幅60cmを測る。礫は拳大から頭大のものが多く、南西の沢地付近には、畳半畳分ほどの大きな板状の礫がいくつもある。石質は白倉盛男氏の鑑定によると、すべて溶結凝灰岩で扁平な節理面をもつものが多いとのことである。これらの溶結凝灰岩はローム層にちょっとくい込むか、直上にあり、礫の下方に掘り込みなどの落ち込みは見られなかった。また、遺物も皆無であった。以上のことから、地形的にも僅かな沢に沿って存在すること、また、礫がローム層に平行もしくは下方か上向き状態で石と石が重なり合っていること、傾斜面の下方に比較的大きな礫が存在することなどから、この礫群は自然地形による押し出しと判断できる。

その他、出土遺物としては、耕作土中より無文の縄文土器片が出土しているだけである。

(高村)

## 第Ⅷ章 曲尾Ⅰ遺跡

### 第1節 竪穴状遺構

#### 1) 第1号竪穴状遺構 (第42図、図版二十二の1)

本遺構は、発掘区域内台地の西寄り中央付近に位置し、え・おー8・9グリッド内より検出された。平面形態は、東西246cm、南北386cm、北壁長227cm、南壁長204cm、東壁長357cm、西壁長378cmを測り、南北に長い隅丸長方形を呈する。長軸方位はN-6°-Eを示す。

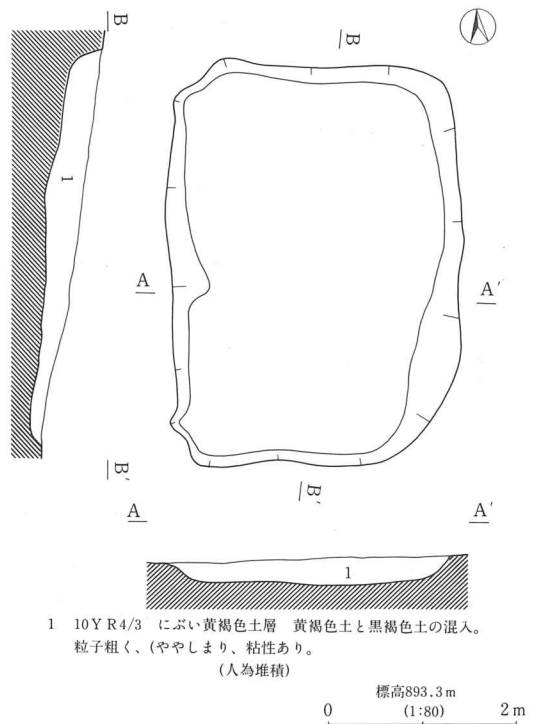
壁は緩やかな傾斜をもって立ち上がり、深さ12~40cmを測る。床面の状況は、平坦でなく、やや北から南にレベルを低下させている。付属施設としての炉・カマド等の火を使用した痕跡をもつものは何もなかった。また、ピット・柱穴等の掘り込みも確認されない。

覆土は1層しかなく、にぶい黄褐色土層で黄褐色土と黒褐色土が混入しており、粒子粗く、ややしまり・粘性がある。この土層観察より人為堆積と思われる、人の手により埋めもどされたものと判断する。

遺物はプラスチックのはし、マルチなどが出土しており、この遺構は、現代、少なくとも戦後のもと思われる。(高村)

#### 第2節 土坑 (第43~45図、図版二十一の2・二十二の2~8・二十三の1)

曲尾Ⅰ遺跡からは8基の土坑が検出されている。いずれも発掘区の中で西方に急傾斜になる12

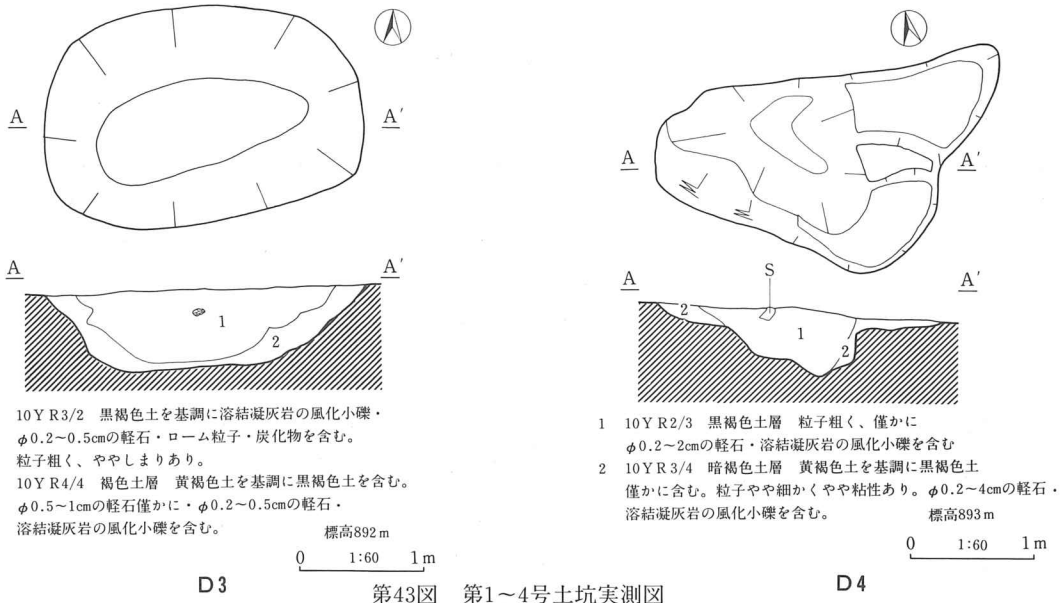
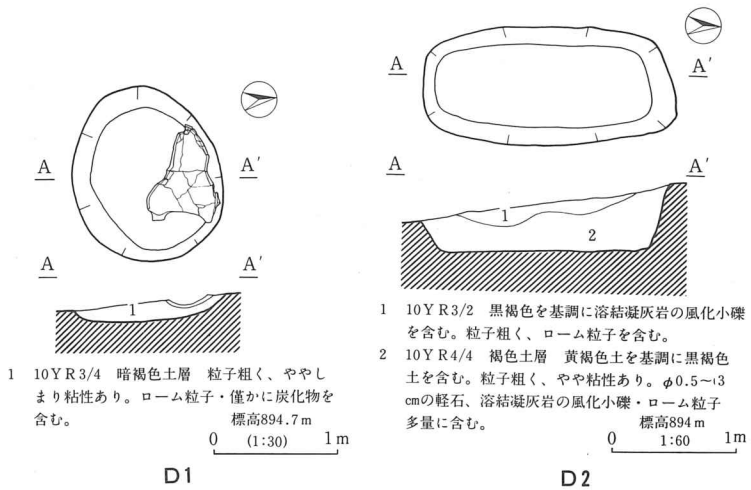


第42図 第1号竪穴状遺構実測図



列以東の緩やかな台地縁辺部に存在する。

第1号土坑は、調査区北側、うー11グリッド内に位置し、長軸140cm、短軸120cmの円形に近い楕円形を呈する。長軸方位はN-84°-Eを示し、断面形は深さ15cmのやや東にレベルを低下させる舟底型をなしている。土坑の北側に口縁部東方に向けて縄文土器（45-1）が横転しており、上半分は耕作等に破壊されたもようで、ほぼ半分が底面よりやや浮いた状態で残存していた。この土器の充填土をふるいにかけてみたが何も発見できなかった。出土した縄文土器は、キャリパー形の深鉢で全器形を知り得た。口縁部は2種類の把手を有した突起が4ヶ所につく口縁で、口縁部と胴部の文様帯は2条の横走る沈線で区画されている。口縁部の文様は沈線と凸帯の組み合わせによる、くずれた渦巻文が描かれ、磨消縄文が施されている。胴部にも磨消縄文が見られ、沈線による「 $\Pi$ 」文が交互に描かれ、胴部においても2区画を意識しはじめた文様帯と思われる



第43図 第1~4号土坑実測図

る。「Π」文間には蕨手文が施されており、縄文はLR縄文である。口縁部と胴部の文様帯が2つに分かれてしっかり施文されていることと、胴部においても2つに分れることを意識しはじめ(1)ていることなどから、加曾利E式III期の特徴をそなえているといえる。以上土坑内にキャリパー

形深鉢を埋めてある本土坑は土拡張としての(2)性格が強いものとする。

第2号土坑は、うー9グリッド内に位置し、長軸200cm、短軸95cmを測る隅丸方形を呈する。長軸方位はN-2°-Wを示す。断面

形は深さ48cmを

測り、底面がほ

とんど水平な平

担面を有する舟

底型を呈する。

覆土は2層に分

割され、1層は

黒褐色土を基調

に溶結凝灰岩の

風化小礫を含み、粒子粗く、ロー

ーム粒子を含む。2層は褐色土層で、

黄褐色土を基調に黒褐色土を含む。

粒子粗く、やや粘性がある。

φ0.5~3cmの軽石・溶結凝灰岩

の風化小礫・ローム粒子を含む。

遺物の出土はなく、その所産期・

性格は不明である。

第3号土坑は、発掘区上面の台

地上、西南に位置し、か・きー9

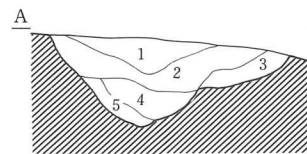
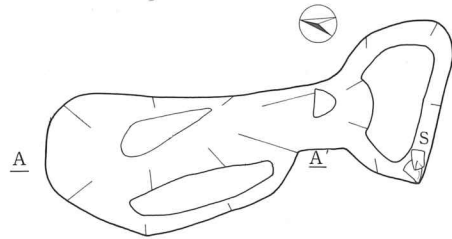
グリッド内より検出された。平面

形態は、長軸255cm、短軸171cm

の楕円形を呈し、長軸方位はN-

80°-Eを示す。断面形は深さ64

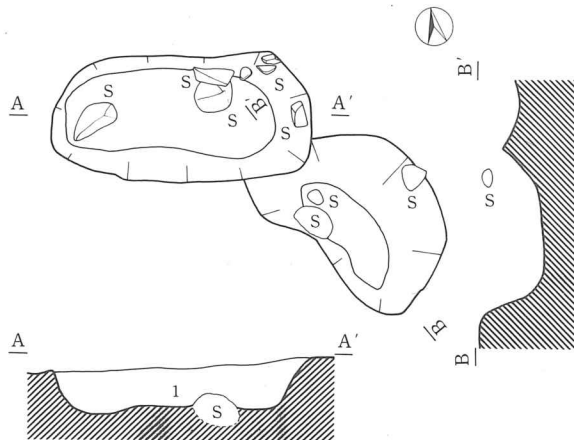
cmの逆台形を呈する。覆土は2層



- 1 10Y R2/2 黒褐色土を基調にローム粒子僅かにφ0.2~0.5cmの軽石、溶結凝灰岩の小礫・僅かに炭化物を含む。粒子細かくやや粘性あり。
- 2 10Y R3/3 暗褐色土層 黒褐色土と黄褐色土が半分位混入。粒子やや粗く、やや粘性あり。炭化物僅かにφ0.2~3cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫、ローム粒子を含む。
- 3 10Y R4/4 褐色土層 黄褐色土を基調に僅かに黒褐色土混入。やや粘性あり。φ0.2~0.5cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫・僅かに炭化物を含む。
- 4 10Y R2/1 黒色土層 黒褐色土を基調に僅かにローム粒子を含む。やや粘性あり。φ0.2~0.3cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫・僅かに炭化物を含む。
- 5 10Y R2/3 黒褐色土を基調にローム粒子を含む。粒子やや粗く、やや粘性あり。φ0.2~0.5cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。

D6

D5



- 1 10Y R2/3 黒褐色土を基調にローム粒子僅かに、溶結凝灰岩の風化小礫・軽石を含む。ややしまり・粘性あり。

D7.8

標高890.9m  
0 (1:60) 1m

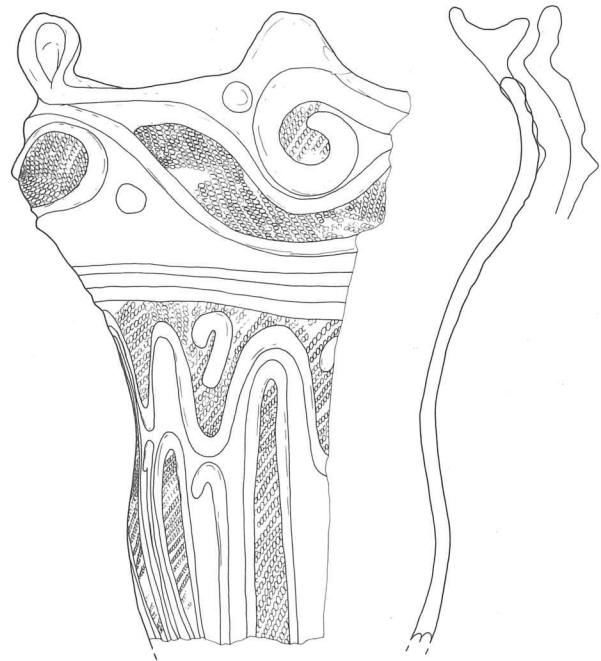
第44図 第5~8号土坑実測図

に分割され、1層は黒褐色土を基調に溶結凝灰岩の風化小礫・ $\phi 0.2 \sim 0.5$  cmの軽石・ローム粒子・炭化物を含み、粒子粗く、ややしまり、粘性がある。2層は褐色土層で黄褐色土を基調に黒褐色土を含む。 $\phi 0.5 \sim 1$  cmの軽石を僅かに・ $\phi 0.2 \sim 0.5$  cmの軽石・溶結凝灰岩の風化小礫を含む。遺物の出土はなかった。

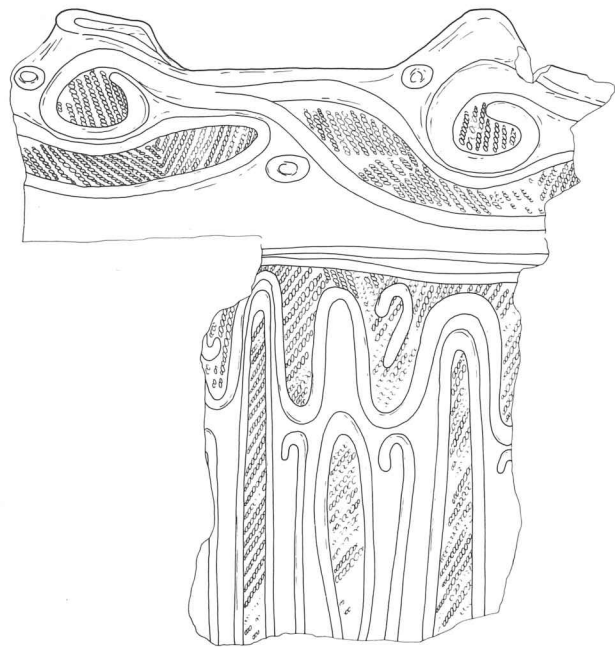
第4号土坑は、発掘区上面の台地上、東北に位置し、いー4グリッド内より検出された。平面形態は東西227cm、南北215cmの三角形に近い不整形である。平面・断面形態・土層観察等により、本土坑は、風倒木の痕跡と思われる。

第5号土坑は、発掘区上面台地の東北に位置し、あ・いー2グリッド内より検出された。平面形態は長さ320cm、幅100cmの不整形を呈し、最深長75cmを測る。この土坑も、第4号土坑と同様、平面・断面形態・土層観察より、風倒木の痕跡と思われる。

第6号土坑は、発掘区上面の台地の東北部、第5号土坑の南、いー2・3グリッド内より検出された。平面形態は長軸139cm、短軸96cmの楕円形を呈し、長軸方位N $53^{\circ}$ Eを示す。断面形は深さ17cmの底面凹凸のある浅鉢状を呈



1



1

0 (1:4) 10cm

第45図 第1号土坑出土土器土器実測図

している。覆土は1層しかなく、黒褐色土層で粒子細かく、粘性・しまりがあり、φ0.2~0.5cmの軽石・僅かに溶結凝灰岩の風化小礫を含んでいる。遺物の出土がなく、所産期・性格は不明である。

第7号土坑は、発掘区上面の台地の東南部に位置し、えー2・3グリッド内より検出された。第8号土坑と重複関係にあり、第8号土坑の北西部の一部を破壊して構築されていた。平面形態は長軸206cm、短軸102cmの楕円形を呈し、長軸方位はN-82°-Wを示す。断面形は深さ32cmの逆台形を呈する。遺物の出土がなく、その所産期・性格は不明である。

第8号土坑は、第7号土坑の南に位置し、えー2・3グリッド内より検出された。第7号土坑と重複関係にあり、北西部の一部を破壊されている。平面形態は長軸157cm、短軸100cmを測る楕円形を呈し、長軸方位はN-37°-Wを示す。断面形は深さ44cmの逆台形を呈する。遺物の出土がなく、その所産期・性格は不明である。 (高村)

註1 三上徹也氏の御教示による。

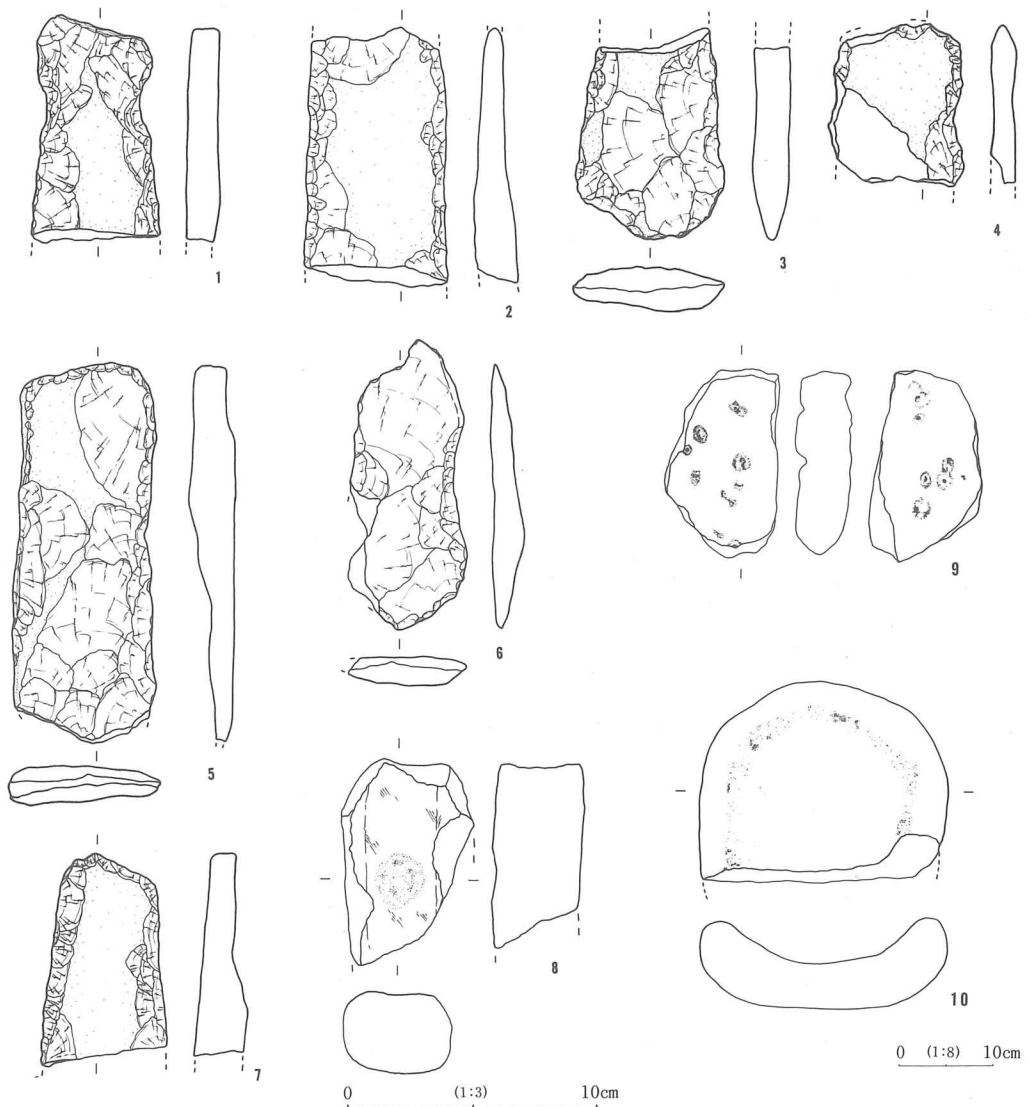
註2 註1と同じ

### 第3節 曲尾I・III遺跡耕作土及び表採遺物 (第46・47図、図版二十三の2・二十四の1・2)

曲尾I遺跡において、縄文時代前期から後期にかけての遺物が出土している。前期に比定されるものには47-1・2があり、混和材として繊維を含み、2は花積上層式と考えられループ縄文が観察でき、前期前葉の土器である。中期に比定されるものには47-3・4・5・6・7・8・9があり、3・4・5・6はLR縄文を地文に隆起帯もしくは凹線によって区画、磨消しを施しており加曾利EIII~IVに属する土器といえよう。8・9は綾杉文もしくは条線文が施文されてお

第7表 曲尾I・III遺跡、耕作土及び表採石器観察表

挿図番号	遺跡名出土位置	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	欠損状態	備考
46-1	曲尾III表採	打製石斧	玄武岩	< 9.0)	< 5.0)	< 1.3)	< 103.1)	刃部欠	短冊形を呈すと思われ、自然面を多く残し、側面に剝離調整。着装部側辺抉りを有す。
46-2	曲尾III表採	打製石斧	玄武岩	< 10.2)	< 5.6)	< 1.6)	< 54.3)	刃部 基部部欠	短冊形を呈すと思われ、自然面を多く残し、側面に剝離調整。
46-3	曲尾III地区表採	打製石斧	玄武岩	< 8.1)	< 6.0)	< 1.5)	< 97.4)	基部部欠	短冊形を呈すと思われ、刃部円刃、刃面磨滅が認められる。
46-4	曲尾I表採	打製石斧	玄武岩	< 6.3)	< 5.0)	< 1.0)	< 62.1)	刃部 基部欠	自然面を多く残し、側面に剝離調整。
46-5	曲尾I表採	打製石斧	玄武岩	15.1	5.6	1.5	221	刃部僅欠	短冊形を呈し、自然面を多く残し、側面に剝離調整。煤付着側辺磨滅が認められる。
46-6	曲尾I表採	打製石斧	玄武岩	< 11.5)	< 4.7)	< 1.2)	< 77.9)	片側辺欠	分胴形を呈すと思われ、刃面磨滅が認められる。
46-7	曲尾I表採	打製石斧	玄武岩	< 8.1)	< 5.0)	< 2.0)	< 108.8)	刃部欠	短冊形を呈すと思われ、自然面を多く残し、側面に剝離調整。
46-8	曲尾I表採	磨製石斧	緑色片岩				< 215 )		乳棒状磨製石斧の可能性有り。
46-9	曲尾I表採	多孔石	溶結凝灰岩				< 1830.7)		0.8~1.8cmの径を有し、深さ0.5~1.2cmの凹状が表面に8個、裏面に6個有す。
46-10	曲尾I表採	石皿	溶結凝灰岩						



第46図 曲尾Ⅰ・Ⅲ遺跡耕作土及び表採石器実測図（1～8は1：3、9～10は1：8）

り曾利系に属する土器と考えられ、47—8は粗い「ハ」の字状文であることから曾利Ⅴ式といえよう。後期に比定されるものに47—10・11があり、口辺部に隆起帯が横位に一条施され、胴部に縄文が施されていることから後期初頭と考えられる。

石器においては46—4～10が出土しており、4・5・6・7は石質玄武岩の打製石斧である。46—8は石質緑色片岩であり、乳棒状磨製石斧の可能性もある。

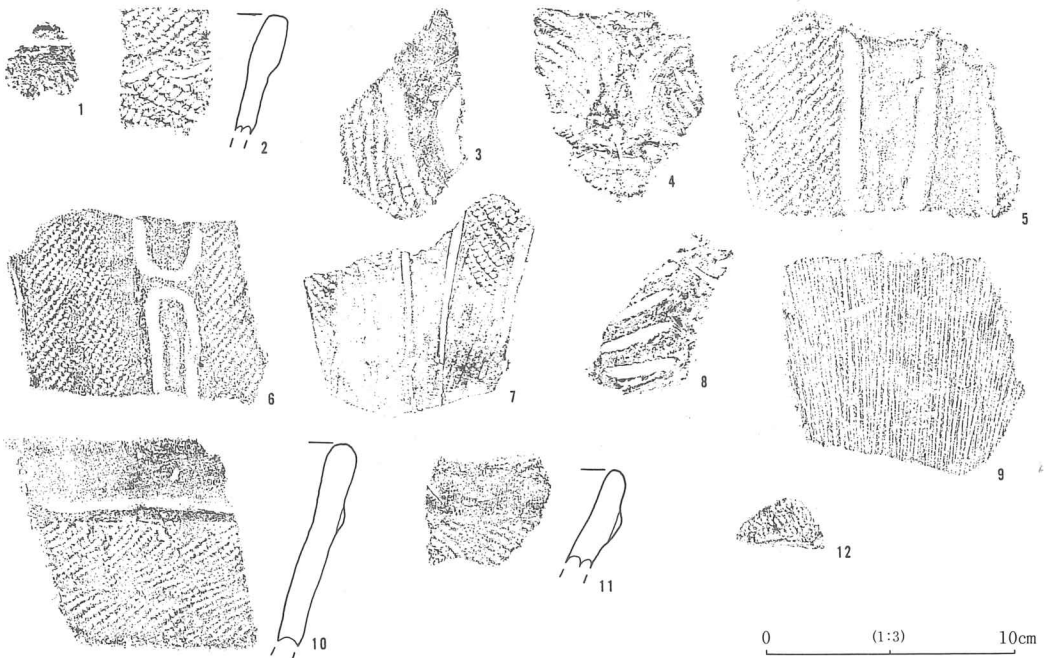
以上曲尾Ⅰ遺跡の耕作土及び表採遺物から、縄文時代前期～後期にかけ間断はあったが洪積台地上に生活が営まれたことが窺われる。

曲尾Ⅲ遺跡においては、46—1～3の石質玄武岩の打製石斧が出土している。（羽毛田伸）

註1 福島邦男氏の御教示による。

第8表 曲尾I遺跡、耕作土及び表採土器拓影図観察表

挿図番号	遺跡名・出土位置	器種・部位	文様	時期	備考
47-1	曲尾I・表採	深鉢・胴部		縄文前期	混和材として繊維含。
47-2	曲尾I・耕作土	深鉢・口辺部	縄文、ループ文	縄文前期 花積上層式	混和材として繊維含、 複合口縁。
47-3	曲尾I・表採	深鉢・口辺部	LR縄文を地文に隆起帯によって区画。 加曾利E系土器	縄文中期後葉	
47-4	曲尾I・表採	深鉢・口辺部	隆起帯によって区画、中に縄文を残す。 加曾利E系土器。	縄文中期後葉	
47-5	曲尾I・表採	深鉢・胴部	LR縄文を地文に、3本の縦位凹線が施こされ 磨消を施こす。加曾利E系土器。	縄文中期後葉	内面煤付着
47-6	曲尾I・表採	深鉢・胴部	LR縄文を地文に、垂下する凹線が2区画有し 磨消を施こす。加曾利E系土器。	縄文中期後葉	内面煤付着
47-7	曲尾I・表採	深鉢・胴下部	LR縄文を地文に、縦位の凹線2本有し、凹線 間磨消を施こす。	縄文中期末葉 ～後期初頭	内面丁寧なナデ調整。
47-8	曲尾I・表採	深鉢・胴部	綾杉状文が施文、曾利系土器。	縄文中期末葉	外面煤付着。
47-9	曲尾I・表採	深鉢・胴部	櫛による条線文、曾利系土器。	縄文中期後葉	内面煤付着。
47-10	曲尾I・表採	深鉢・口辺部～ 胴上部	口辺部に1帯の隆起帯が横位に施こされ、胴部 幅の狭いLR縄文が施こされている。	縄文後期初頭	
47-11	曲尾I・表採	深鉢・口辺部	口辺部に1帯の隆起帯が横位に施こされ、胴部 縄文が施こされている。	縄文後期初頭	
47-12	曲尾I・表採		櫛による刺突文が施こされている。	縄文時代	



第47図 曲尾I遺跡耕作土及び表採土器拓影図

## 第4節 周辺遺跡既出資料 (第48～50図、図版二十四の3～5)

雨原A・B遺跡では、既出資料48—1・2が雨原B遺跡で、表採されている。いずれも曾利系土器で、48—1は微隆起の懸垂文で区画、中に縦条線文が施され、48—2は綾杉文が施文されている。以上のことから縄文時代中期後葉の遺跡の存在する可能性が強い。また、49—33・34の須恵器が出土しており、49—33は提瓶と思われ、奈良～平安時代の山地・高地集落の性格を知る上で貴重な遺跡になるとと思われる。

木戸平遺跡において、48—5・23、50—46が表採された。48—5は隆起の懸垂文で区画、中に羽状条線が施文されており、曾利系土器と考えられる。48—23はLR縄文を地文とし、凹線によって区画、磨消し縄文が施されており、加曾利E系の土器であり、50—46は石質玄武岩の打製石斧で短冊形を呈する。

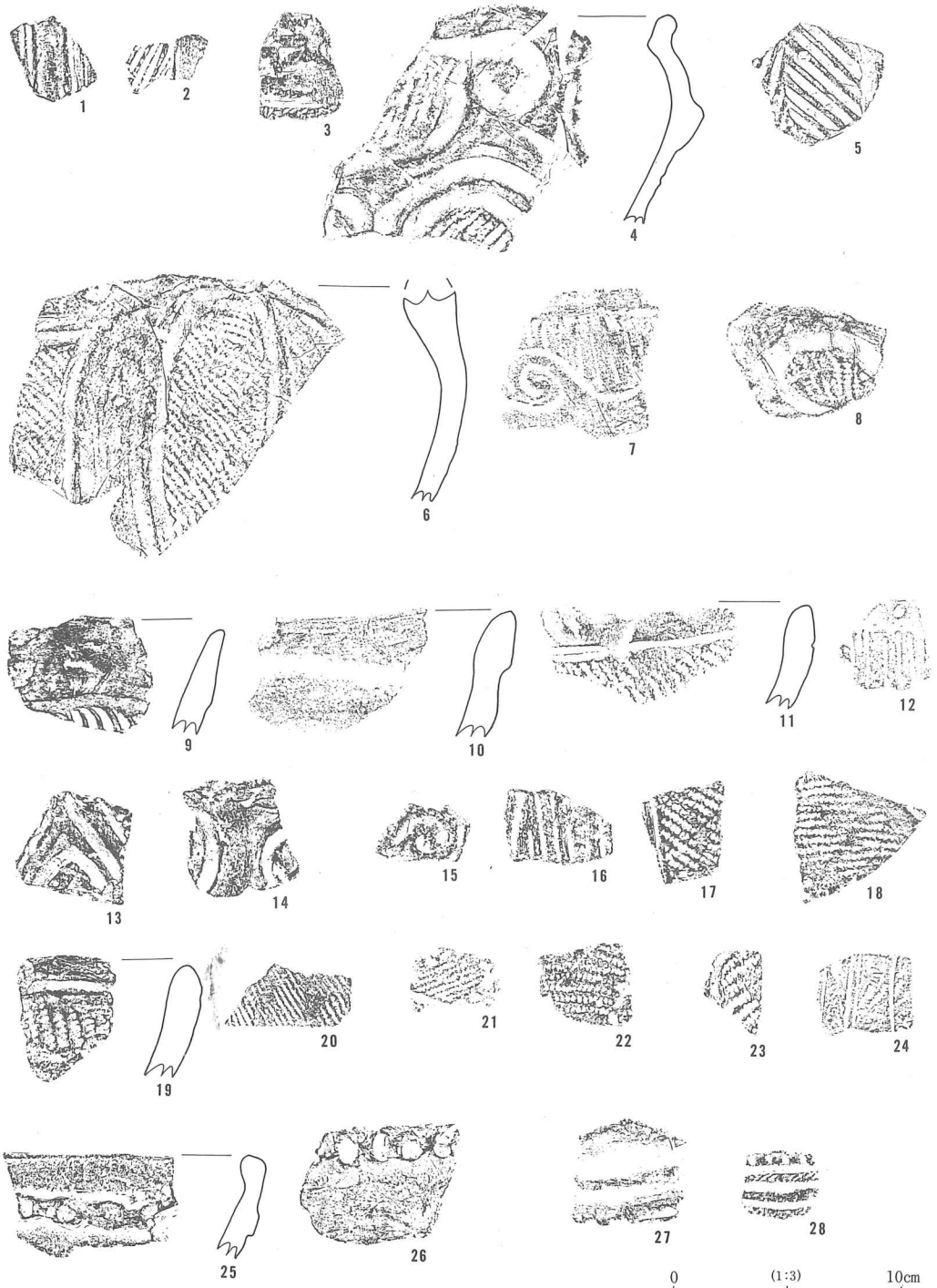
吹付遺跡において、50—42～45の打製石斧が表採された。形態としては短冊形と撥形の2形態が出土しており、玄武岩の薄く剥れた自然面を利用し、側辺と刃面を剥離調整したものが主であるが50—45の表面は前面剥離が施されている。

鶉尾根遺跡において、48—11・21・22、50—47が表採された。48—11は口縁部省略化傾向にあり、1条の横線を有し、胴部LR縄文が施文、縄文時代中期終末～後期初頭のものと考えられる。48—21はLR縄文を地文とし、凹線によって区画、磨消し縄文が施されている。50—47は石質玄武岩の打製石斧で撥形を呈し、着装部側辺僅かに抉り有する。以上のことから縄文時代中期後葉～後期初頭の遺構の存在する可能性が強い。

仙太郎遺跡において、48—24が表採され、LR縄文を地文とし、沈線で区画されており、縄文時代中期後葉以降の土器片である。

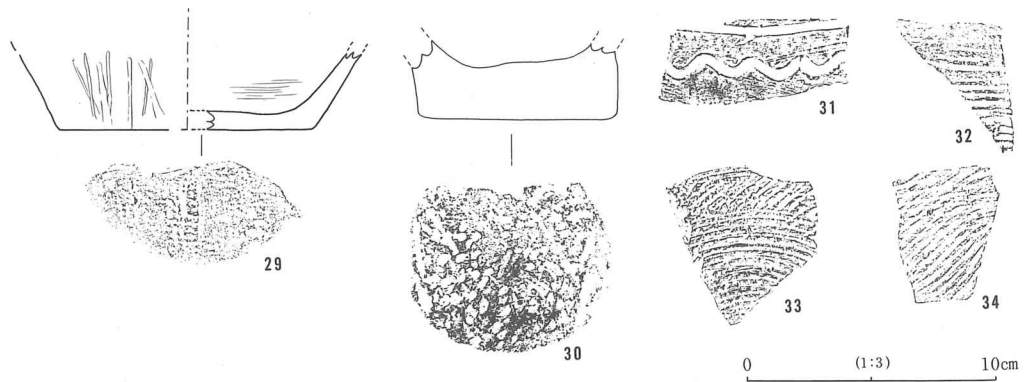
曲尾遺跡からは、縄文時代中期後葉において加曾利E系土器48—4・6・8・17・18と曾利系土器48—3・7・9・10・13・14・16等が出土している。また、48—20は単位の細かい縄文が施され、内面丁寧なナデが施されており、小片ではあるが後期初頭にあたる称名寺式土器の可能性もある。縄文時代後期の特徴である、粗製土器深鉢48—25・26・27と精製土器49—29が出土し、49—29は炭素吸着による黒色仕上げ、底部に綱代圧痕が観察でき、堀ノ内式土器である。また、49—28も縄文を地文に三条の沈線と列点文を有し、堀ノ内式土器の可能性が強い。尚、石器においては定角式磨製石斧50—35・36と石質玄武岩の打製石斧50—38～41が表採されている。打製石斧の形態は短冊形と撥形の2形態であり、傾向としては自然面を利用し側辺、刃面のみ剥離調整を施し、着装部側辺は僅かに抉られ、細かく剥離を行っていることが認められる。以上のことから曲尾遺跡は縄文時代中期後葉～後期にかけ、間断はあったものの長い間生活地帯であったこと





第48図 周辺遺跡既出土器拓影図

(雨原 B1~2、曲尾 3~4、6~10・12~20・25~28、木戸平 5・23、鶉尾根 11・21~22、仙大郎 24) <その 1>



第49図 周辺遺跡既出土器拓影図 (曲尾29~32、雨原 B33~34) <その2>

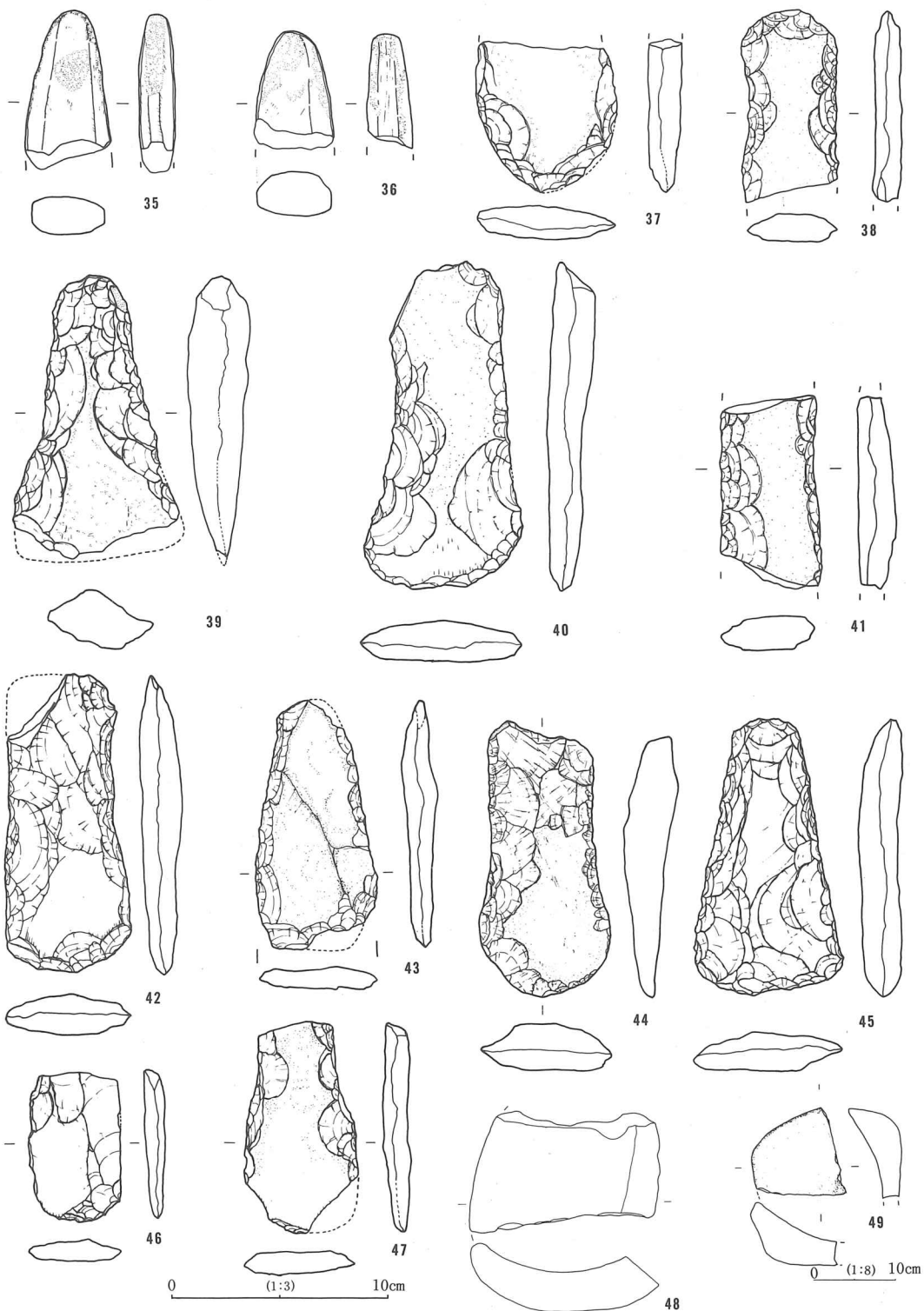
第9表 周辺遺跡、既出土器拓影図観察表

挿図番号	遺跡名	器種・部位	文様	時期	備考
48-1	雨原B	深鉢・胴部	微隆起の懸垂文で区画、中に縦条線文が施こされる。曾利系土器。	縄文中期後葉	
48-2	雨原B		綾杉文が施文、曾利系土器。	縄文中期後葉	
48-3	曲尾A	深鉢、頸部~口辺部	口辺部凹帯を有し、沈線で区画、胴部文様は斜行条線文が施文。曾利系土器。	縄文中期後葉	
48-4	曲尾A	深鉢、(キャリバー形)口辺部~頸部	L R 縄文を地文とした磨消縄文。口辺部隆起文 (渦巻楕円) によって区割、楕円の中 L R 縄文残す。胴部微隆起と凹線による懸垂文で区画、中に L R 縄文。口縁部波状口縁と考えられる。加曾利 E 系土器。	縄文中期後葉	曲尾 I 遺跡 D1 号内のキャリバー形深鉢と同時期と考えられる。
48-5	木戸平	深鉢、胴部	隆起の懸垂文で区画、中に羽状条線施文。曾利系土器。	縄文中期後葉	
48-6	曲尾	深鉢、胴部	L R 縄文を地文とした磨消縄文。口縁部微隆起を有し、胴部微隆起の懸垂文で区画、中に L R 縄文残す。口縁部波状口縁と考えられる。加曾利 E 系土器。	縄文中期終末	
48-7	曲尾A	深鉢 (カボチャ形) 頸部~胴上部	渦巻文と沈線によって区画、中に斜行条線が施文される。曾利系土器。	縄文中期後葉	
48-8	曲尾	深鉢、口辺部	L R 縄文を地文とした磨消縄文。隆起文によって区画、中に L R 縄文残す。加曾利 E 系土器。	縄文中期後葉	
48-9	曲尾	深鉢、口辺部	口縁部省略化が観察でき、綾杉状文が施文されたと考えられる。曾利系土器。	縄文中期終末	
48-10	曲尾A	深鉢、口辺部	口縁部省略化が観察でき、微隆起文と凹線によって区画、中に縄文なし。曾利系土器?	縄文中期後葉~終末	
48-11	鶏尾根	深鉢、口辺部	口縁部省略化が観察でき、一条の横線を有し、胴部 L R 縄文が施文。加曾利 E 系土器。	縄文中期終末	
48-12	曲尾A		縦条線文が施文。		
48-13	曲尾	深鉢、胴部	綾杉状文が施文。曾利系土器。	縄文中期終末	
48-14	曲尾	深鉢、口辺部	楕円文の凹線によって区画、中に僅かに縦条線が観察できる。曾利系土器。	縄文中期終末	
48-15	曲尾A		渦巻文が施文。		
48-16	曲尾	深鉢、胴部	垂下する凹線によって区画、中に斜行条線文が施文。曾利系土器。	縄文中期後葉	
48-17	曲尾	深鉢、胴部	L R 縄文を地文とし、沈線によって区画される。加曾利 E 系土器。	縄文中期終末	

48-18	曲尾	深鉢	L R 縄文を地文にし、微隆起によって区画される。加曾利E系土器。	縄文中期終末	
48-19	曲尾	深鉢、口辺部	一帯のL R 縄文を地文に、口辺部一条の横線が施こされている。	縄文中期後葉～終末	
48-20	曲尾	深鉢	単位の細かい縄文が施こされ、内面丁寧になでられている。称名寺系土器とも考えられる。	縄文中期終末～後期初頭	西片ヶ上第1号住炉内より称名寺式土器破片出土。
48-21	鶉尾根	深鉢	L R 縄文を地文とし、凹線によって区画。加曾利系土器。	縄文中期後葉	
48-22	鶉尾根				
48-23	木戸平		L R 縄文を地文とし、凹線によって区画。		
48-24	仙太郎		L R 縄文を地文とし、沈線によって区画。		
48-25	曲尾A	深鉢(粗製土器)口辺部	口辺部、一条の凸帯ときざみ目を有す。堀ノ内系土器。	縄文後期	
48-26	曲尾B	深鉢(粗製土器)口辺部	口辺部、一条の凸帯ときざみ目を有す。堀ノ内系土器。	縄文後期	
48-27	曲尾	深鉢(粗製土器)口辺部	口辺部、一条の凸帯を有す。堀ノ内系土器。	縄文後期	
48-28	曲尾A		縄文を地文に、三条の凹線と列点を有す。堀ノ内系土器。	縄文後期	
49-29	曲尾A	深鉢(精製土器)底部	炭素吸着による黒色仕上げ、底部網代圧痕観察できる。堀ノ内式土器。	縄文後期	
49-30	曲尾	深鉢、底部	底部網代圧痕観察できる。	縄文時代	
49-31	曲尾A	壺、胴上部	外面、篋による横走直線文と山形文。内面、刷毛目調整。弥生土器。	弥生中期	山麓地帯よりの表採。
49-32	曲尾A	甕(壺)	叩き整形が行なわれ、外面平行文様、内面同心円状の文様。	奈良～平安時代	兵士山遺跡にて住居址1棟検出。(高地集落)
49-33	雨原	提瓶?	叩き整形が行なわれ、外面カキ目痕。内面同心円状の文様。	奈良～平安時代	同上。 高地集落の可能性有す。
49-34	雨原	甕(壺)	叩き整形が行なわれ、外面平行文様。内面同心円状の文様。		同上

第10表 周辺遺跡既出石器観察表

挿図番号	遺跡	器種	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	欠損状態	備考
50-35	曲尾	磨製石斧	チャート	< 7.3	< 3.9	< 1.75	< 80.8	刃部欠	定角式磨製石斧、着装部粗面を残す。
50-36	曲尾	磨製石斧	緑色片岩	< 5.4	< 3.5	< 2.0	< 71.1	刃部欠	定角式磨製石斧、着装部粗面を残す。
50-37	曲尾	打製石斧	玄武岩	< 7.0	< 6.4	< 1.5	< 98.7	刃部残存	刃部円刃、磨滅が認められる。
50-38	曲尾	打製石斧	玄武岩	< 8.8	< 4.2	< 1.3	< 78.1	刃部欠	短冊形を呈し、着装部側辺僅かに抉り有す。
50-39	曲尾	打製石斧	玄武岩	< 12.9	< 7.6	2.8	< 220.9	刃部僅欠	撥形を呈し、着装部側辺細かく剥離。刃面、側刃部磨滅が観察できる。
50-40	曲尾	打製石斧	玄武岩	15.2	7.1	1.9	243i	完形	短冊形を呈し、刃部偏刃気味、着装部側辺細かく剥離。刃面使用痕有す。
50-41	曲尾	打製石斧	玄武岩	< 8.7	< 4.6	< 1.6	< 112.2	基端部刃部欠	短冊形を呈すと思われる。
50-42	吹付	打製石斧	玄武岩	13.7	5.8	1.9	< 179.3	片基端部僅欠	短冊形を呈し、着装部側辺僅かに抉り有す。刃面使用痕を有し、側辺磨滅している。基端部煤付着。
50-43	吹付	打製石斧	玄武岩	11.4	5.5	1.3	< 90.4	片刃部片基端部欠	撥形を呈し、自然面を利用、側辺、刃面のみ両面加工、着装部細かく剥離、側刃部磨滅が観察できる。
50-44	吹付	打製石斧	玄武岩	12.2	5.9	2.1	185.7	完形	短冊形を呈し、刃部円刃、着装部側辺僅かに抉りを有し細かく剥離、刃面使用痕が顕著。
50-45	吹付	打製石斧	玄武岩	12.7	6.8	1.8	192.5	完形	撥形を呈し、表面全面剥離、裏面自然面を利用、側辺、刃部のみ剥離。刃部直刃気味で、磨滅が観察できる。
50-46	木戸平	打製石斧	玄武岩	< 6.8	< 4.3	< 1.0	< 40.0	基端部欠	短冊形を呈し、刃部円刃、刃面に僅かに使用痕有す。
50-47	鶉尾根	打製石斧	玄武岩	9.6	5.0	1.1	< 83.4	片刃部欠	撥形を呈し、着装部側辺僅かに抉り有す。刃部磨耗著しく、刃面に使用痕観察できる。
50-48	曲尾	石皿	溶結凝灰岩					底部～片縁僅残存	
50-49	曲尾	石皿	砂岩						内面に煤付着。



第50図 周辺遺跡既出石器実測図

(曲尾35~41・48~49・吹付42~45、木戸平46、鶉屋根47) (48~49は1:8、他は1:3)

が窺われる。尚、49—31の弥生中期の壺胴上部破片から、香坂川上流にも弥生時代の遺構の存在する可能性があり、注意していきたい。

さらに、ここでは図示し得なかったが、五斗代B遺跡発掘調査報告書によると、縄文時代前期と思われる繊維を含む土器片が、仙太郎・木戸平A・鶉尾根・鶉尾根北遺跡より表採されており、本調査においても曲尾I遺跡より花積上層式土器が2片表採されていることから、縄文時代前期の遺構の存在する可能性も非常に高い。また、昭和54年度兵士山遺跡調査により、灰釉陶器を伴う平安時代の住居址が1棟検出されており、昭和55年度五斗代B遺跡調査により、礫群から縄文時代早期押型文土器片2点、縄文時代前期（木島式、花積下層式、黒浜式、諸磯A・B・C期）、縄文時代中期（勝坂式）、縄文時代後期の土器が出土している。

これらの遺跡は山脚上の緩斜面をもった小平坦面に形成され、香坂一帯は縄文時代の密集する地帯であり、幸か不幸か関越自動車道に伴う開発により、佐久地方における縄文時代が徐々に解明されていくものと思われる。

(羽毛田伸)

## 第IX章 調査のまとめ

今回、淡淵・屋敷前・西片ケ上・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ遺跡において検出された遺構・遺物の詳細は前述した。検出された遺構は、屋敷前遺跡で土坑6基、西片ケ上遺跡で敷石住居址1棟、土坑7基、溝状遺構2基、曲尾Ⅲ遺跡で竪穴住居址1棟、土坑9基、礫群1基、曲尾Ⅰ遺跡で竪穴状遺構1基、土坑8基である。

一方、出土遺物には、縄文土器・土師器・須恵器・陶器・石器がある。

以下、今回の調査において検出された遺構・遺物を中心としてまとめを行っていきたい。

淡淵遺跡は、香坂ダムの北岸、緩やかな南傾斜の崖推堆積地形上に位置しているが、前述したように調査対象地には遺構の存在がなく、試掘調査地域より北方の台地に遺跡は存在するのではないかと予想される。

屋敷前遺跡からは、土坑が6基検出されているが、第3号土坑が奥州桑を抜根する際の名残りの土坑、第4号土坑は現代のぼや炭を作った土坑、第6号土坑が風倒木の痕跡ということが判明したが、残りの土坑の所産期・性格などは不明であった。遺物も縄文土器数片と石器・陶器と数少なく、調査対象地には集落跡の痕跡はまったく窺えなかった。おそらく淡淵遺跡と同様、北方の現在の集落付近に遺跡が存在するものと思われる。

西片ケ上遺跡からは、敷石住居址（縄文時代後期初頭）が1棟検出された。南方に張り出し部をもつ柄鏡形の形態を呈している。出土遺物は加曾利E系の系譜をひく深鉢、準三十稲葉式土器といえる壺形土器に近い深鉢、称名寺式の土器片、石鏃2点、横刃型石器、凹石、打製石斧、敲石が出土しており、総体的には量が少ない。敷石住居址の性格として住居址か非住居址かという問題があるが、本住居址の場合、祭祀的遺物が出土していなく、また、炉も使用されていたことが判明しているため、住居址としての機能を有していたことが強いと思われるが、遺物の出土量が少なく、速断は避けたい。

佐久地方において見られる敷石住居址は、長野県埋蔵文化財センターが資料集成した『塩尻市御堂垣外遺跡敷石住居址をめぐる』によると望月町極楽寺遺跡1棟、同町下吹上遺跡1棟、浅科村舟久保遺跡1棟、御代田町上藤塚遺跡1棟、同村面替遺跡1棟、同村宮平遺跡6棟、軽井沢町茂沢南石堂遺跡8棟、小諸市寺ノ浦遺跡1棟、同市郷土遺跡3棟、同市加増遺跡2棟、同市下笹沢遺跡1棟、同市石神遺跡1棟、同市久保田遺跡6棟、佐久市中村遺跡3棟、佐久町館遺跡1棟、同町宮の本遺跡1棟と本遺跡の1棟を加えて合計39棟発見されている。これらの敷石住居址を時

期別にみると加曾利E式期2棟、中期末から後期初頭8棟（曾利IV2棟、曾利IV～V1棟、曾利V1棟、加曾利EIV1棟、中期末1棟、加曾利EIV～称名寺1棟、称名寺1棟）、堀ノ内式期12棟（堀ノ内II2棟）、加曾利B式期3棟、その他、後期5棟、不明9棟となっている。このことから、佐久地方の敷石住居址の推移は、中期末から後期初頭に増加し、後期の堀ノ内式期に盛行が見られ、加曾利B式期において衰退していることが窺える。これは、敷石住居址の初源期は不明であるが山本暉久氏の言われている所とほぼ合致している。本住居址と同様な柄鏡形敷石住居址は、茂沢南石堂遺跡4棟、郷土遺跡2棟、加増遺跡2棟、久保田遺跡3棟の計13棟(本遺跡も含めて)と敷石住居址検出数に比しては少ないと言える。時期別にみると、加曾利E式期1棟、中期末から後期初頭3棟(加曾利EIV～称名寺1棟、中期末1棟、称名寺1棟)、堀ノ内式期5棟、その他、後期3棟、不明1棟である。柄鏡形敷石住居址においても、敷石住居址の推移と同様に中期末から後期初頭に多くみられ、堀ノ内式期が5棟と最も多い。これは、山本暉久氏(1982)が言われている、中期末から後期初頭に典型的な柄鏡形住居址が成立した時期として第II期としてとらえ、堀ノ内式併行期に発展を遂げている(第III期)としている考え方にほぼ合致している。

以上、西片ヶ上遺跡からは敷石住居址が1棟しか検出されなかったが、これは道路幅という限られた範囲での調査であったため、周辺にはさらに敷石住居址が存在するものと思われる。

曲尾III遺跡からは、平安時代の住居址が1棟検出されている。住居址はかなり角度のある南傾斜面に構築されており、とても立地の良い所とはいえない。規模は東西340cm、南北350cmを測り、平安時代では中型の小さい方といえる。ピットは計7個検出されているが、支柱穴と思われるピットは検出されなかった。カマドは北壁の中央付近に溶結凝灰岩を使用した石組のカマドでかなりしっかりしたものがあり、遺物は土師器の甕と坏が出土しており、須恵器・灰釉陶器の出土はみられなかった。この住居址の所産期を決定した土器は、「コ」の字状を呈した武蔵系の薄手長胴甕の存在からであるが、須恵器の伴出がなかったことは興味あることといえる。本住居址が存在する地点の標高は879mで付近の地形からも稲作による生活はできなかったものと思われる。香坂東地において発掘調査された遺跡で平安時代の住居址が検出されているのは、さらに山へ入った標高970mを測る兵士山遺跡で東西560cm、南北560cmの大型の規模を持つ住居址が1棟検出されている。また、昭和61年度、佐久市教育委員会が発掘調査した下茂内遺跡群茂内口遺跡においても、平安時代の住居址3棟、掘立柱建物址3棟等が検出されており、標高は880～950mを測る。周辺遺跡においては、淡淵・屋敷前・西称ぶた・東称ぶた・城の口・裏林・小屋場・東山神・東林・鶉尾根北・仙太郎・木戸平A・東木戸平A・東木戸平B・雨原A・雨原B遺跡から平安時代の遺物が採集されており、香坂東地の山間部に該期の集落が多く営まれていたことが窺える。昭和58年に報告した川上村横尾遺跡において山地・高地集落を集成・分析したことがあるが、本住居址もその一つと考えられ、律令制が崩壊し中世村落が次第に形成された時期に盛んに山地へ進出



した痕跡と考えられる。香坂川に沿ってその上流に向う山道は矢川峠にぶつかる、それから東は群馬県下仁田町で、第II章遺跡の環境で述べているように中山道の裏道として江戸時代から明治頃まで日影新道として盛えたことがわかっている。平安時代においても、この道は上州との交流の要路として盛んに使われた可能性が十分にあり、本住居址もその峠道に関係した遺構かもしれない。また、香坂東地に多数存在する遺跡は、本遺跡・兵士山・下茂内遺跡などから類推するに大規模な集落址としてではなく、小規模な住居址群として存在したと思われるが、しかし、この19遺跡という多数の遺跡から山地の開拓が平安時代に盛んに行なわれ、山村としての観を呈していたのではないかと推測する。

曲尾III遺跡からは、縄文時代中期後半加曾利E III期の土坑墓(第1号土坑)が検出されている。この第1号土坑が存在する位置は、発掘調査区でも北方の台地上にあり、その北方からは、多量の縄文前期から後期の土器・石器が表採されている。また、耕作の際、扁平な溶結凝灰岩が多量に掘り起こされた場所があり、敷石住居址も確実にあったことが知られている。

第1号土坑のように土坑内から完形に近い土器が埋められて検出された例は、望月町竹之城原遺跡第5号土坑に見られ、規模は1.9 × 1.35mの楕円形を呈し、両把手付の樽形土器がほぼ完形で北側にやや傾いた状態で出土しており、時期は中期末葉の曾利V式としている。佐久地方で今後同様な資料の増加を待って分析していきたい。他の土坑は、風倒木の痕跡や時期・性格の不明なものが多く、以上のことから、遺跡の中心は北方の台地上にあるものと考えられる。

以上、香坂東地の一連の発掘調査遺跡をまとめてきたわけであるが、今回の調査により、佐久市の縄文時代の一端が明らかにされたことは意義深いことと思われ、また、平安時代の山地・高地集落の資料が増加したことは、今後、平安時代における山地開発の手がかりを知る上で貴重な資料となると思われる。

(高村)

## 引用参考文献

- 木下亀城・小川留太郎 1967 『標準原色図鑑全集 6 岩石鉱物』
- 神奈川県教育委員会 1976 『上浜田遺跡』
- 佐久町教育委員会 1979 『宮の本』
- 千曲川水系古代文化研究所編 1980 『編年』
- 神奈川考古同人会 1980 「縄文時代中期後半の諸問題」『神奈川考古 第10号』
- 佐久市教育委員会 1981 『五斗代B』
- 鈴木道之助 1981 『石器の基礎知識III』 柏書房
- 山ノ内町教育委員会 1981 『伊勢宮』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981 『清里・陣場遺跡』
- 赤山容三 1982 「竪穴住居」『縄文文化の研究 8』 雄山閣
- 山本暉久 1982 「敷石住居」『縄文文化の研究 8』 雄山閣
- 加藤晋平・小林達雄・藤本強 1981・1982 『縄文文化の研究 縄文土器 I・II』
- 佐久市教育委員会 1983 『中村遺跡』
- 川上村教育委員会 1983 『横尾』
- 小諸市教育委員会 1984 『久保田』
- 長野県埋蔵文化財センター 1984 『塩尻市御堂垣外遺跡敷石住居址をめぐって』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団・群馬県教育委員会 1984 『中尾』
- 藤村東男 1984 『縄文土器の知識II—考古学 シリーズ15—』 東京美術
- 望月町教育委員会・東信土地改良事務所 1984 『竹之城原遺跡・浄永坊遺跡・浦谷B遺跡』
- 御代田町教育委員会 1985 『宮平遺跡』
- 御代田町教育委員会 1985 『野火付遺跡』
- 小林達雄 1986 「縄文土器編年の研究」『季刊考古学 17号』
- 荒井和之 1986 「文様系統論、関山式土器」『季刊考古学 17号』
- 柿沼修平・田川良 1986 「文様系統論、称名寺式土器」『季刊考古学 17号』
- 宮本長次郎 1986 「住居」『日本考古学 4』 岩波書店
- 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1986 『芝間』
- 山梨県考古学協会 1986 『山梨考古学論集 I』 ほおずき書籍
- 佐久市教育委員会 1986 『下茂内遺跡群茂内口遺跡発掘調査概報』
- 岡本東三 「縄文時代 I (早期・前期)」『日本の美術』 至文堂
- 土肥孝 「縄文時代 II (中期)」『日本の美術』 至文堂
- 金子裕之 「縄文時代 III (後期・晩期)」『日本の美術』 至文堂

## 後 記

今回、佐久建設事務所・佐久市土木課が行う長野県佐久市県道香坂中込線バイパス改良工事事業（高速道関連工事専用道路）の計画がなされ、これに伴う緊急発掘調査を行うことになりました。

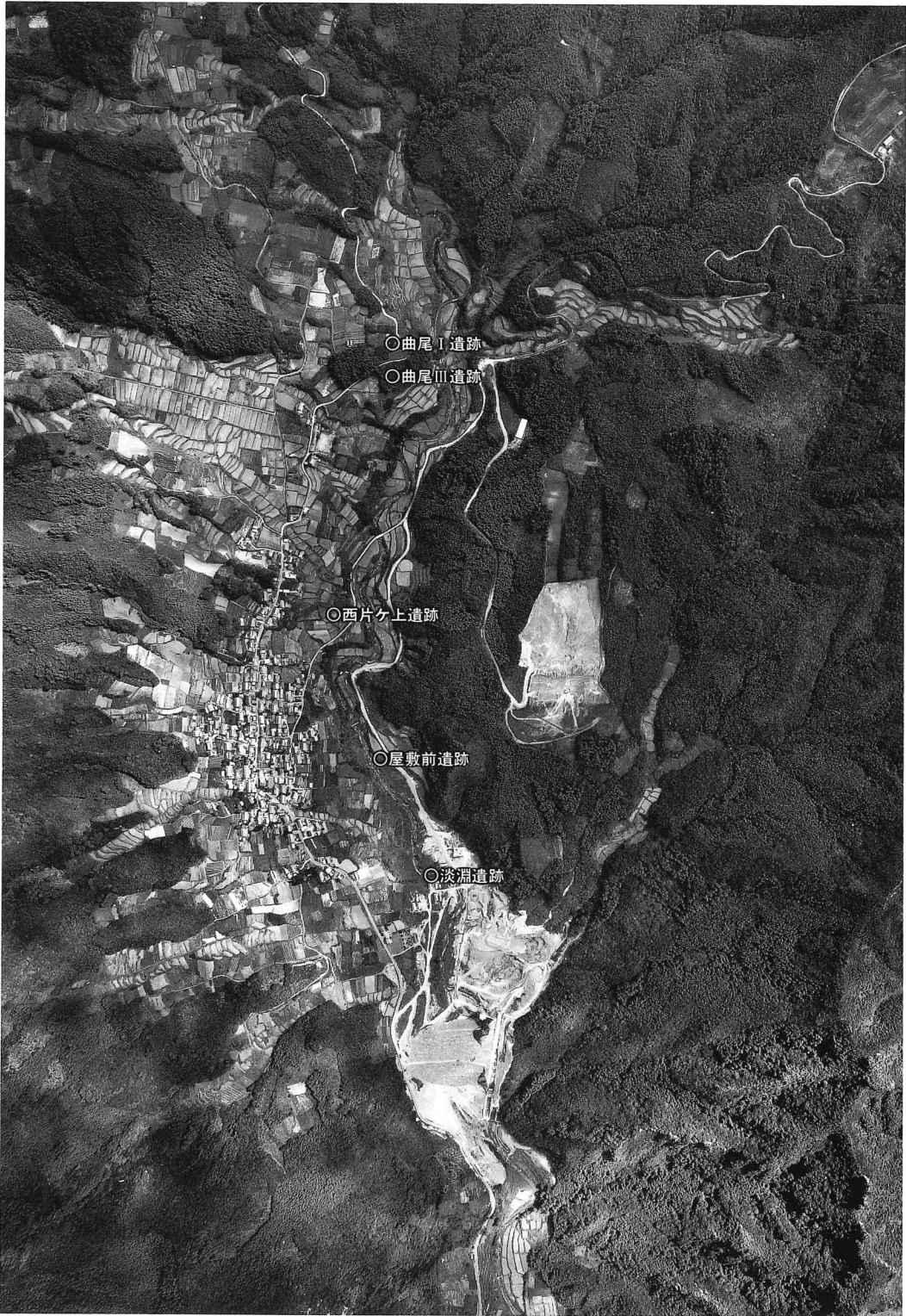
本調査に関して、調査各段階において御配慮をいただいた佐久市教育委員会、地元中島区長さんをはじめ、区民の皆様方の深い御理解と御援助によって調査を充実したものにすることが出来たことを心から御礼申しあげます。また、秋の収穫期の多忙のなかを、現地調査に続いて整理調査にと参加して下さった協力者の皆様の熱意と、調査各段階において諸鑑定及び御意見をいただいた長野県埋蔵文化財センター・地元研究者各位のご指導とご協力により、ここに報告書を発行できることを改めて感謝の意を表する次第です。

香坂の谷は溪谷ではありますが、香坂東区地籍には縄文時代の遺跡を中心に平安時代に至る埋蔵文化財の遺跡が濃密に分布し、重要な遺跡分布地帯であります。

本調査は、高速道路関連工事専用道路の幅員10mで限られた区間遺跡の南西部の端、ほんの一部であり、調査対象面積も小さいため確認された遺構・遺物の数は思ったより少なかったが、その成果は、佐久市地域では初検出の柄鏡形敷石住居址の検出、それに伴う準三十稲葉式土器といえる深鉢土器・称名寺式土器の破片等の検出など重要な資料を得ることが出来、佐久市地域内に於ける縄文時代の一端が明らかにされたことは意義深いことであります。また、平安時代の山地・高地集落の資料も増加し、香坂の谷における古代延喜式以前よりの古道の推測と共に、今後平安時代における山地開発の手がかりを知る上で貴重な資料を得たと思います。

今後とも更に各位のご指導を賜わり、本報告書を総合研究調査の足掛りとしたい所存です。

(黒岩)



淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾III・曲尾I遺跡付近航空写真

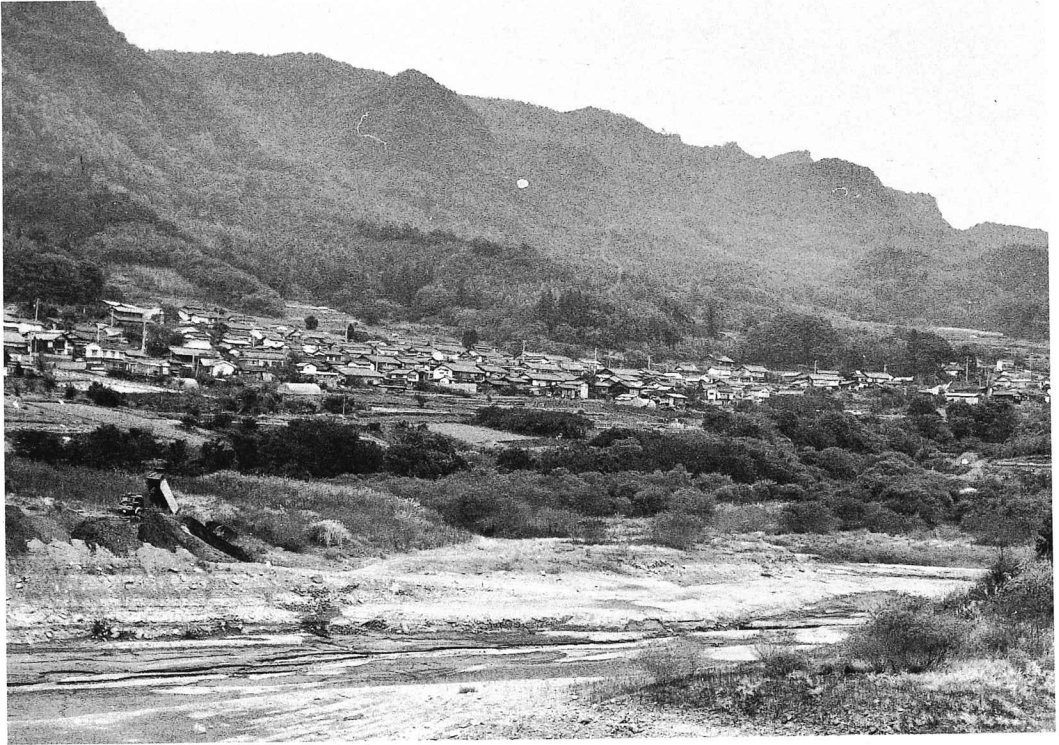


1 淡淵遺跡遠景（南方より）



2 淡淵遺跡トレンチ内状況（東方より）





1 屋敷前遺跡遠景（南方より）



2 A・B地区全景（西方より）

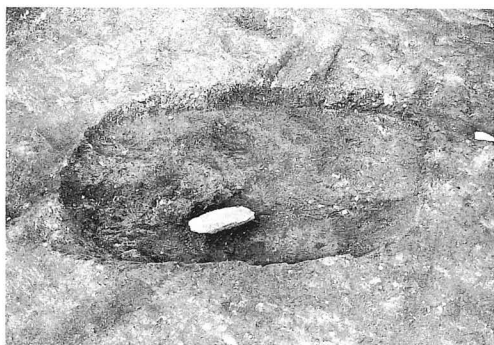


1 C・D地区全景（東方より）

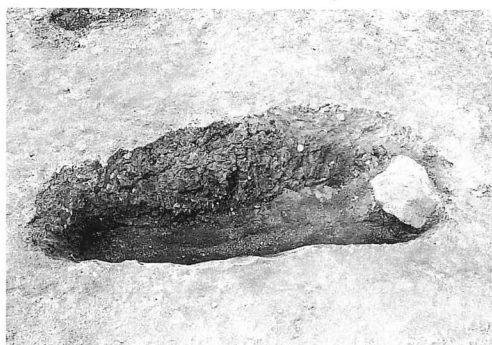


2 F・G・H地区全景（東方より）

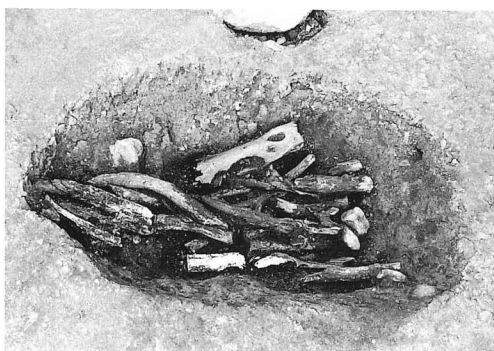




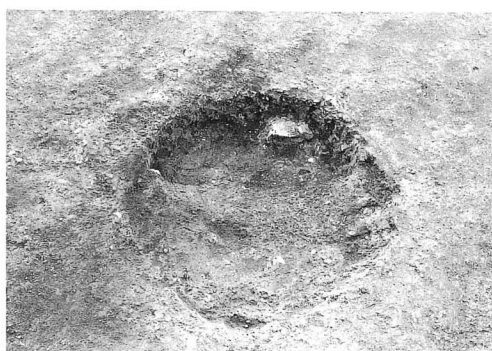
1 第1号土坑（南西より）



2 第2号土坑（南方より）



3 第3号土坑（南方より）



4 第4号土坑（東方より）



5 第5号土坑（東方より）



6 第6号土坑（南方より）



7 発掘調査スナップ



8 発掘調査スナップ



1 西片ヶ上遺跡遠景（南方より）



2 第1地区全景（西方より）



1 第1地区全景（東方より）



2 第2地区全景（西方より）





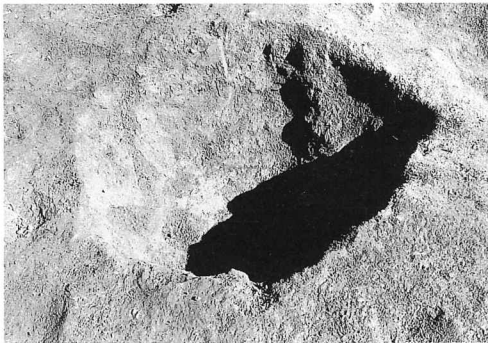
1 第1号敷石住居址（南方より）



2 第1号敷石住居址（西方より）



1 第1号敷石住居址炉址（南方より）



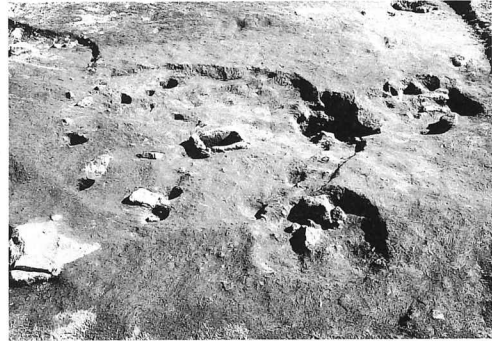
2 第1号敷石住居址炉址掘り方（西方より）



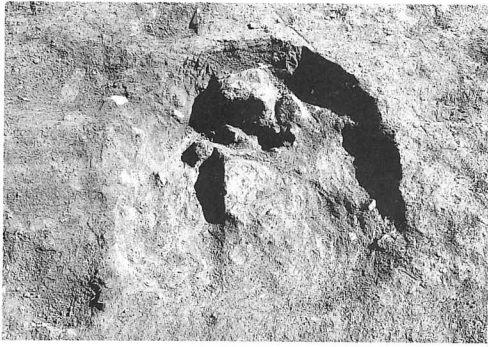
3 第1号敷石住居址接合部（西方より）



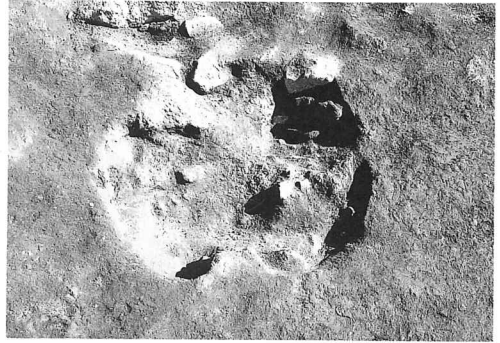
4 第1号敷石住居址掘り方（南方より）



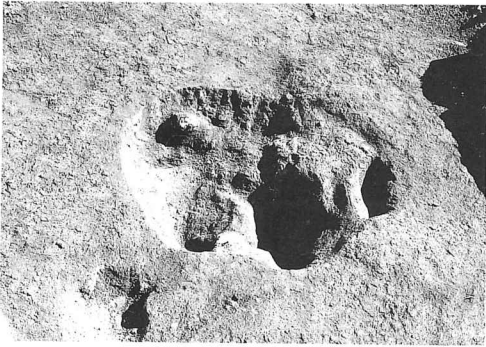
5 第1号敷石住居址掘り方（西方より）



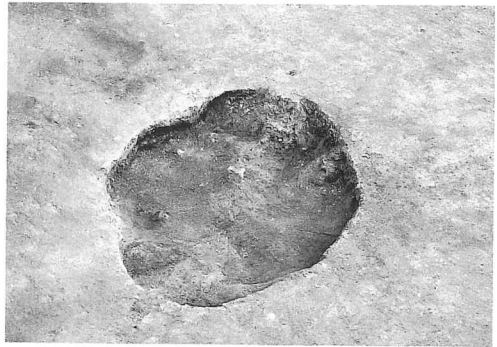
1 第1号土坑（西方より）



2 第2号土坑（西方より）



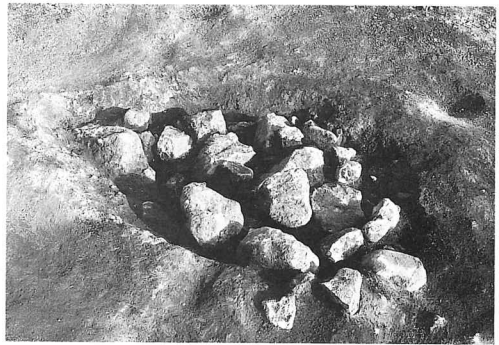
3 第3号土坑（西方より）



4 第4号土坑（西方より）



5 第5号土坑（西方より）



6 第6号土坑（西方より）

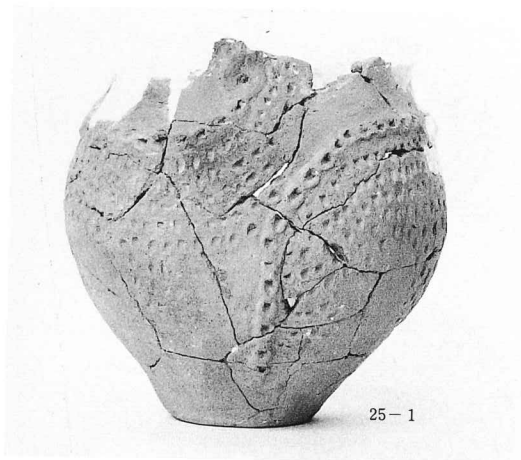


7 第7号土坑（西方より）



8 第1・2号溝状遺構（西方より）

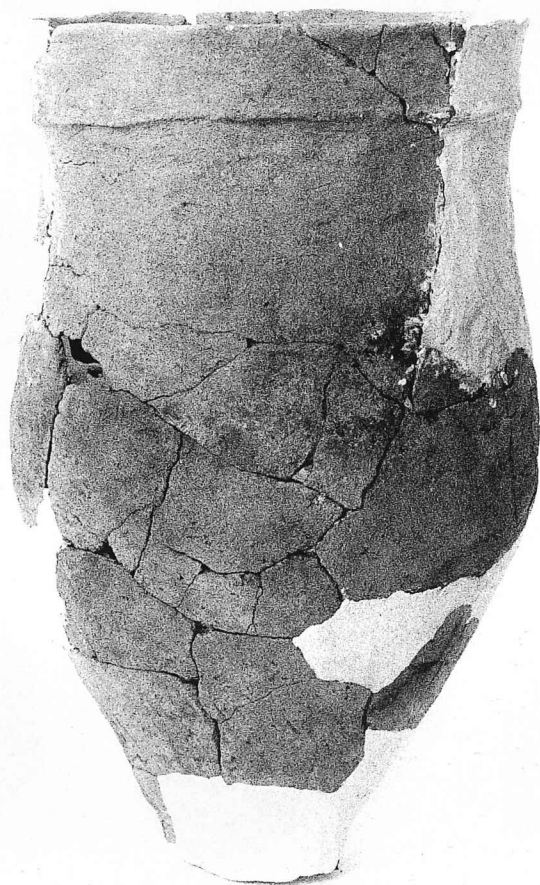




1 第1号敷石住居址出土土器

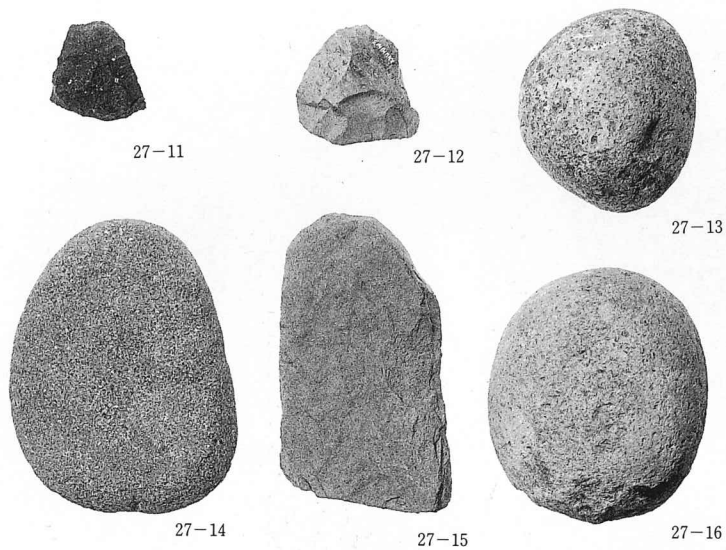


2 第1号敷石住居址出土土器

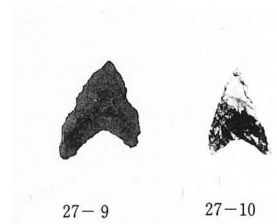


3 第1号敷石住居址出土土器





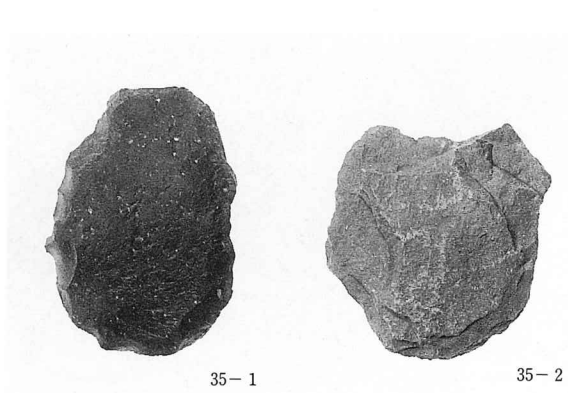
1 第1号敷石住居址出土石器



2 第1号敷石住居址出土石器



3 第2号溝状遺構出土石器



4 耕作土出土石器



1 曲尾Ⅲ遺跡遠景（南方より）



2 第1地区全景（東方より）



1 第1地区全景（西方より）



2 第2地区全景（西方より）



1 第1号住居址（南方より）

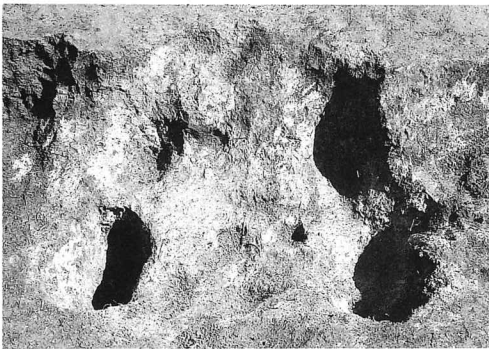


2 第1号住居址（西方より）





1 第1号住居址炉址（南方より）



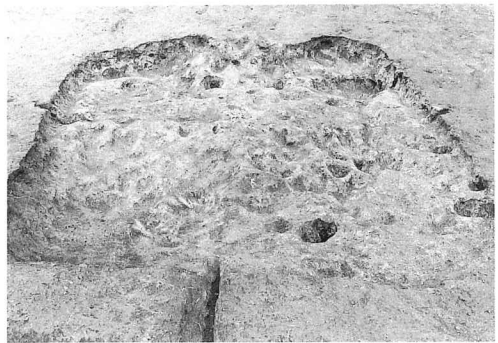
2 第1号住居址炉址掘り方（南方より）



3 第1号住居址炉址とP<sub>1</sub>（南方より）



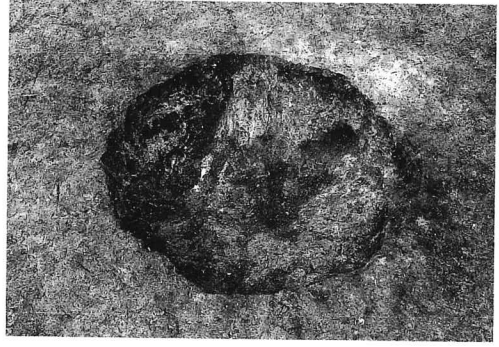
4 第1号住居址P<sub>1</sub>（南方より）



5 第1号住居址掘り方（南方より）



1 第1号土坑 (南方より)



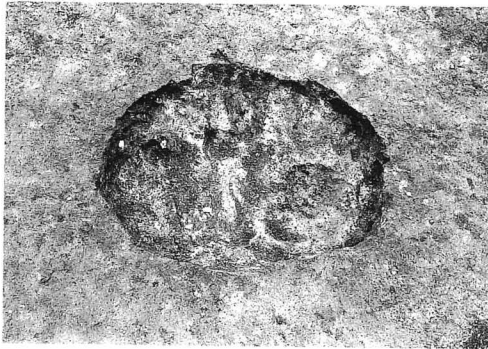
2 第2号土坑 (南方より)



3 第3号土坑 (西方より)



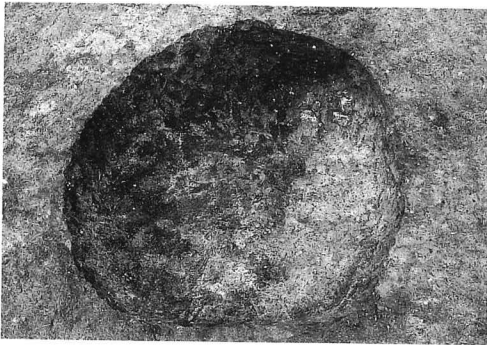
4 第4号土坑 (南方より)



5 第5号土坑 (南方より)



6 第6号土坑 (南方より)



7 第7号土坑 (南方より)



8 第8・9号土坑 (西方より)



1 礫群 (東南より)



2 礫群 (南方より)



3 礫群 (東方より)



4 発掘調査スナップ



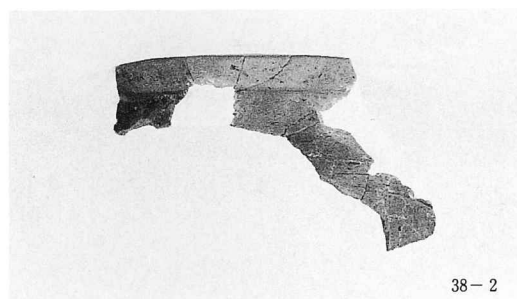
5 発掘調査スナップ





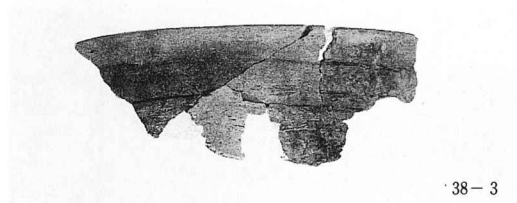
1 第1号住居址出土土器

38-1



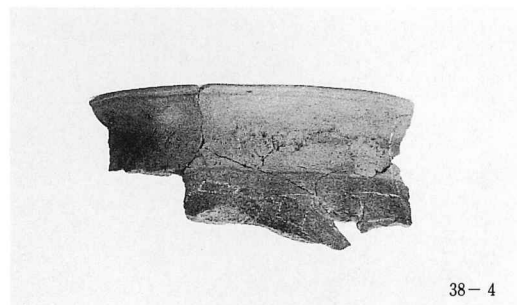
2 第1号住居址出土土器

38-2



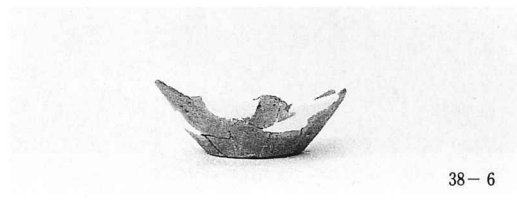
3 第1号住居址出土土器

38-3



4 第1号住居址出土土器

38-4



5 第1号住居址出土土器

38-6



6 第1号住居址出土土器

38-7



7 第1号住居址出土土器

38-8



8 第1号住居址出土土器

38-9



9 第1号住居址出土土器

38-10



10 第1号住居址出土土器

38-11



11 第1号住居址出土土器

38-12



1 曲尾 I 遺跡遠景 (南方より)



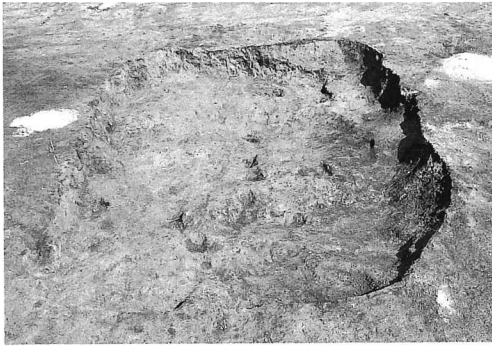
2 発掘調査区全景 (西方より)



1 発掘調査区全景（東方より）



2 第1号土坑（西方より）



1 第1号竖穴状遺構 (南方より)



2 第1号土坑 (南方より)



3 第2号土坑 (南方より)



4 第3号土坑 (南方より)



5 第4号土坑 (南方より)



6 第5号土坑 (南方より)



7 第6号土坑 (南方より)



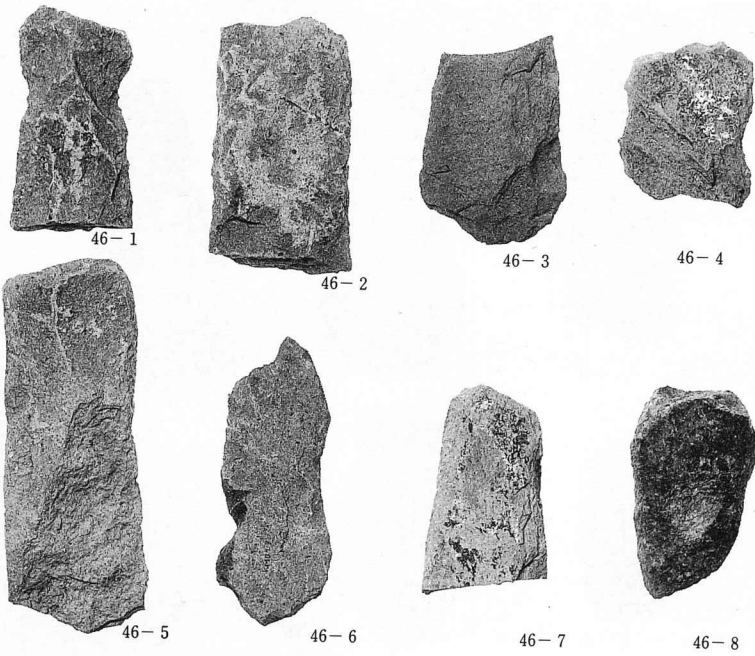
8 第7・8号土坑 (南方より)





45-1

1 第1号土坑出土土器



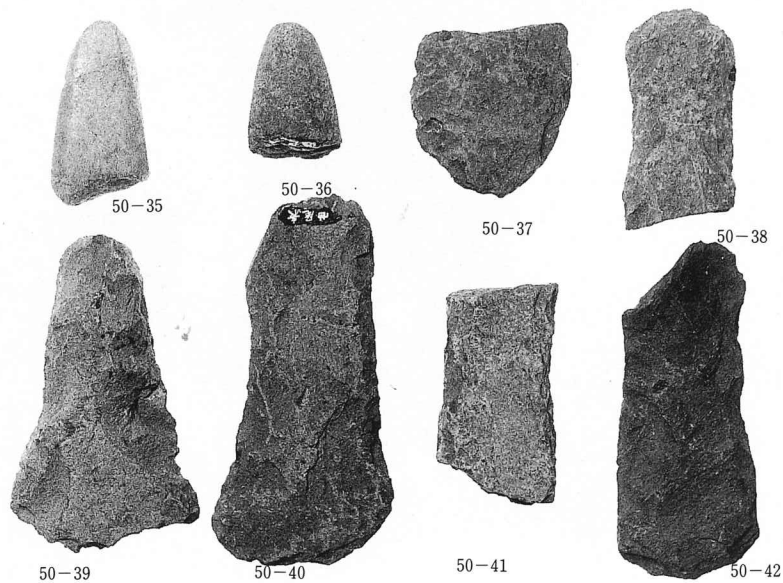
2 曲尾 I・III 遺跡耕作土及び表採石器



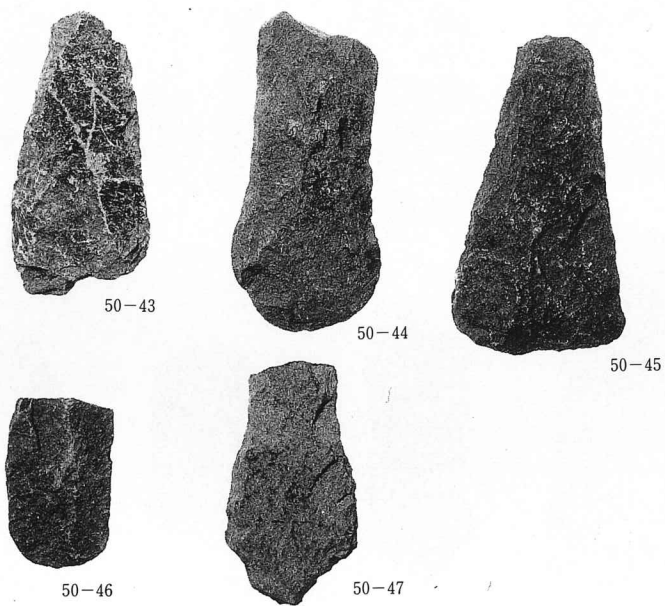
1. 2 曲尾 I・III遺跡耕作土及び表採石器



3 周辺遺跡既出石器



4 周辺遺跡既出石器



5 周辺遺跡既出石器

佐久埋蔵文化財調査センター報告書	第1集	『西裏・竹田峯』
〃	第2集	『池畑・西御堂』
〃	第3集	『芝間』
〃	第4集	『新町II』
〃	第5集	『宿上屋敷 下川原・光明寺』

---

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第6集  
長野県佐久市  
淡淵・屋敷前・西片ヶ上・曲尾III・曲尾I遺跡

1987年3月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター  
発行者 長野県佐久市教育委員会  
印刷所 ほおずき書籍株式会社

---





